桜文論叢

第102巻　2020年10月

日本大学法学部

Nihon University
College of Law

目　　次

論　説

社会派詩人ヴィニー？
――「脱宗教化」から見たサン＝シモン主義との接点をめぐって――… 江島　泰子 …… 1

現代英語の be about to に関する意味論的研究 …… 佐藤　健児 …… 33

Semantic and textual characteristics of the colligational framework *the N1 of the N2* in argumentative essays by L1 speakers of English and Japanese …… Joe Geluso …… 57

「他者」という罠
――こどもたちに語る沖縄学――…… 前嵩西一馬 …… 95

社会派詩人ヴィニー？

――「脱宗教化」から見たサン＝シモン主義との接点をめぐって ――

江　島　泰　子

はじめに

> ヴィニーはロマン派の詩人たちの中で，自らの芸術に最も忠実な芸術家である。彼は，友人たちの文学理論における不完全な部分，社会性に乏しい部分を最もよく感知できる人だった。新しく，より高尚で，より幅広い概念の価値を十全に理解し，それを実現できた。

これは，1831年６月30日付の『グローブ』（*Le Globe*）紙の記事からの引用である。同紙は同年１月から「サン＝シモン教義の新聞」という副題をつけて発行されていた。さらに８月からは「サン＝シモン教の新聞」と銘打たれることになった(1)。『グローブ』紙の記事が示すのは，ロマン派の文学者たちの中で，アルフレッド・ド・ヴィニー（1797-1863）が社会問題に強い関心を抱き，サン＝シモン主義者たちが提示する社会改革の主張を理解し，それを作品に反映させることができた芸術家として評価されていることである。

『グローブ』紙の記事の日付の時点では，ヴィニーは，多くが『古代・近代詩集』（*Poèmes antiques et modernes*）に収録されている作品および17世紀を舞台とした小説『サン＝マール』（*Cinq-Mars*）によって主として知られた作家であった。その生涯にわたる業績を俯瞰した場合にも，社会性に富んだ詩人という定義は，彼のイメージからは遠いように思われる。

本論考は，この疑問あるいは違和感を出発点として，ヴィニーが当時の社会をどのようにとらえ，それを作品にどのように反映したのかについて考察を加えようとするものである。つまり，ヴィニー作品におけるアンガージュマンの文学としての側面を検討することになるが，その際にサン＝シモンが唱えた「新しい宗教」と「芸術家の役割」という視点を導入する。『劇作家ヴィニー』の著者Ｅ・サケラリデスは，サン＝シモンおよびその弟子たちとヴィニーの関係について以下のように記す。

> 1814年（ママ），『同時代人に宛てたジュネーヴの一住人の手紙』と題された彼（サン＝シモン）の最初の著作が出版された。
>
> 以来，彼は地球の住人たちを道徳的，物質的に導くことのできるような新たな宗教を希求した。そうであるなら，社会の真の先導者たち，すなわち「人類の中で選ばれた人々」は，学者と芸術家ということになろう。(…)
>
> サン＝シモンが社会のファクターとしての芸術家の役割について語るのを聞くとき，それはまさにヴィニーの考えを聞いているようである。(…)
>
> サン＝シモンとヴィニーの後に，アンファンタンは知的能力への融資制度の創設を要求した（…）[2]。

この引用では，ヴィニーはサン＝シモンおよび彼の門弟アンファンタンと関連付けられている。芸術家の役割に関して，サン＝シモンがヴィニーの先駆者と位置づけられ，ヴィニーとアンファンタンの間に類似の考えが存在するという指摘だ。さらに注目すべき点は，サン＝シモンが追求したとされる新たな宗教の創設が，社会変革における重要なファクターとしての芸術家の役割を要請するということだ。本論考では，新宗教の構想と関連づけられた芸術家のアンガージュマンという観点から，作家ヴィニーの思想における「社会性」を考察していく。

サブタイトルにある「脱宗教化」という言葉について一言言及しておく。この言葉であるが，フランス語の laïcisation に対応している。本論文では，この

語の定義をめぐり，L. レタのエルネスト・ルナン研究を出発点とした。L. レタによれば，ルナンの『キリスト教起源史』には「宗教的なものの脱宗教化」（la laïcisation du religieux）の意図が存在する[3]。『キリスト教起源史』の第一巻目となる『イエスの生涯』が1863年に刊行された際に，宗教界では激烈な批判が巻き起ったが，その核心にあったのは「キリストの神性」をめぐる問題であった。ルナンの著書においては，キリストの神性がメタフォリックなものでしかないことと，仲介者・救済者としての役割が否定され，「信仰のキリスト」が疎外されていることに非難が集中した[4]。人類史におけるイエスの役割の重要性を認める一方で，キリスト・イエスの脱神性化を行うルナン解釈の在り方を，L. レタは「脱宗教化」という語でとらえた。この論争はいわばパンドラの箱を開ける行為に似て，キリスト教をめぐってすでに存在したさまざま思想の様態が顕在化することになる。本論文では，キリスト教のコンテキストにおける脱宗教化―キリスト教は，無神論も含めて実に様々な在り方が存在するので，「脱キリスト教化」はここでは用語として不適切であろう―という視点に立ち，ヴィニーの著書にこの問題についてどのような記述があるかを拾い上げつつ，分析していく。「サン＝シモン教」と芸術家の使命が緊密に結びついている以上，この視点からの検討が必要であると思われる。

1　サン＝シモン教，芸術家の社会的役割，そしてヴィニー

A. ピコンは，サン＝シモンが宗教と称するものは，超越的な起源をもつ啓示宗教とはまったく異なり，むしろある種の社会組織であると指摘する[5]。P. ミュッソによれば，サン＝シモンが目指していたのは宗教の世俗化であり，合理的宗教，神なき宗教が彼の願いであった。つまり神を「原理」とし，科学法則によって代替されるべきものとした[6]。これらの指摘は，彼の最後の著作『新しいキリスト教』（1825）を考えるうえで示唆を与えてくれる。この書の中でサン＝シモンは，最も貧しい階級の精神的・物理的生について憂慮し，キリスト教の唯一の，しかし瞠目すべきメリットとして弱者への配慮を挙げる[7]。

最大多数の階級の境遇向上を主眼とする社会改革が唱えられると同時に，大革命以降の社会におけるとりわけ貧困層の宗教的無関心を問題視し，キリスト教を代替する新たな宗教の普及が提案されている。そこには，富裕階級や支配者に対して下層階級が暴力に訴えることがないようにとの配慮，今日でいうところの階級闘争を回避しようという配慮も見える[8]。J. グランジュは，『新しいキリスト教』とサン＝シモン主義者たちが師の考えを解釈した『サン＝シモン学説解義』（1830-1831 全2冊）の間には，フリーメイソンやカルボナリスムの影響が介在し，彼らのロマン派的陰影をもつ社会主義的共和主義を特徴づけていると指摘する。『サン＝シモン学説解義』における唯物主義は明白であるが，彼らは社会の新たな組織創設の目的のために，宗教を必要としたのだ[9]。

とはいえ，新たな「宗教」の創設を企図する以上は，教義と組織のみならず儀式が必要となる。そこで，芸術家の役割がクローズアップされる。サン＝シモン自身が芸術家に社会的役割を付与していたことは周知のとおりであるが[10]，『新しいキリスト教』の中では，「詩人たちは説教者たちの努力を補佐しなければならない。礼拝のために聖歌隊が歌うにふさわしい詩編を創らねばならない…」とされ，その他の芸術家たち，音楽家，画家，建築家等にもそれぞれ参与が要請される[11]。弟子たちは師の考えを継承・発展させた。とはいえ，彼らの見解にはさまざまなニュアンスがあり，また時期によっても変遷しており，一様ではない。本論では，知識階級に強いインパクトを与えた1830年の七月革命という社会変動の前後を中心に，サン＝シモン主義者たちの芸術家への呼びかけを確認したうえで，それと関連させてヴィニーの思想を見ていく。

アンファンタンのスポークスマン的存在であったエミール・バローは『芸術家たちへ』（1830）の中で，「…人類の教師たれ。…サン＝シモンから教授すべき内容を学べ」と訴える。バローにおいても，無産の労働者階級の解放および彼らの境遇の改善が，芸術家の専心事項に含まれる[12]。ところで，バローは歴史を，有機的（*organique*）あるいは宗教的な時代と，それに続いて生起する批判的（*critique*）あるいは非宗教的時代に分割する。ギリシア・ローマの多神教の時代とキリスト教中世が有機的時代とされ，異教時代は有機的かつ物質主

義的であり，キリスト教中世は有機的かつ精神主義的である[13]。芸術の歴史もこれに対応するかたちで進行する。芸術とは「感動させる力」の多様な表出であるが，社会的かつ宗教的であるときにこそ，力強く健全である[14]。しかし，中世芸術とそれに続くルネサンス期の芸術を比較するとき，批判的時代に対応するとされる美の表現のほうを，全般的に見ると私たちはむしろ高く評価していないだろうか。しかし，バローのように，芸術の力を大衆に与える影響力と解釈するなら，大聖堂の美に表象される中世を，芸術の最盛期と解釈することも可能となる[15]。さらに，先行する二つの有機的時代に続いて第三の有機的時代が訪れることになる。それは異教の物質主義とキリスト教の精神主義の完全な統合である新たな時代であり，サン＝シモン主義がそれに対応する[16]。この来るべき宗教的時代は，「人類のあらゆる進歩によって拡大された神（un Dieu）」の時代である[17]。この歴史観は，『サン＝シモン学説解義』にも見える。「（バランシュの表現を借りれば）いわゆる歴史循環の危機の時代の一つに，私たちが遭遇しているのではないかと考えてみたまえ。そこでは，疲弊した批判的時代から新たな有機的時代への移行がなされる」[18]。引用にあるピエール＝シモン・バランシュ（Pierre-Simon Ballanche 1776-1847）は，『社会循環論序説』（*Essai de palingénésie sociale*）等の著作で知られる思想家である。『社会循環論序説』の出版と同年の1827年には，ジャンバティスタ・ヴィーコの『新しい学』のミシュレによる訳が出版された。三つの有機的時代という発想については，当時哲学界に君臨していたヴィクトール・クーザン（Victor Cousin 1792-1867）の思想の影響を推察できる[19]。すなわちサン＝シモン主義者たちが採用した歴史の循環的運動理論は，当時の思想の諸潮流を広く参照していたことがわかる。

『芸術家たちへ』は，「芸術は礼拝であり，芸術家は司祭（prêtre）である」という宣言で終わる。一方，『サン＝シモン学説解義』の２冊目では，司祭と芸術家の役割が次のように定義される。

司祭は未来を予見し，人類の過去の運命を未来の運命に連結する規則を

考案する。別の言い方をすれば，司祭は支配する。芸術家は司祭の考えを把握し，それを自らの言語に翻訳する。(…) 芸術家は司祭の考えをすべての人々にとって感知できるものにする。(…) 芸術家を通して，司祭は自らを顕示する。芸術家は一言で言えば，司祭の言葉（Verbe）である[20]。

一方「司祭」も，ある意味で「芸術家」である。芸術の定義が「感動させる力」であるなら，説教者の雄弁も芸術の発現と確かにいえるであろう。Ph. レニエによれば，「芸術家」と「司祭」をめぐって，サン＝シモン主義者たちの中で，語彙の定義に錯綜と不一致がある[21]。

これは，教義をめぐってのサン＝シモン主義者たちの間の不一致とも連動している。ヴィニーが最初に交友をもったサン＝シモン主義者は，フィリップ・ビュッシェ（Philippe Buchez 1796-1865）であった[22]。ビュッシェは元カルボナリ党の最高責任者の一人であったが，のちにサン＝シモン主義に傾倒する。アンファンタン，バザール，オランド・ロドリゲスと共にサン＝シモンの弟子たちの中で中心的な地位にあった四人の一人だった。教義の流布を目指すサン＝シモン主義者たちは，芸術家たちの協力を必要としていた。ユゴー，サント＝ブーヴなどと同様に，ヴィニーは彼らの説教に足を運んだ一人であった[23]。つまり，当時隆盛を極めつつあったロマン派の作家たちが，サン＝シモン主義者たちの動向に強い関心を示していたことがわかる。ところが，サン＝シモン主義者たちの間に分裂が生じる。ビュッシェは，仲間内で進行しつつあったヒエラルキー形成と「教会」の設立に反対し，1829年暮れに友人たちと共に組織から離反する。彼らは，アンファンタンの影響が強くなっていく組織における「神権政治的体制，汎神論的唯物主義，不道徳主義」を告発した[24]。その後，ビュッシェの思想はキリスト教に傾倒していく。彼とその賛同者たちは，キリスト教を「継続的な革命」ととらえた。大革命は福音書の実現であり，フランスこそがキリスト教社会主義のメシア的役割を担うと考えた[25]。サケラリデスは「ビュッシェは，文明の発展について，福音書の教義と共和主義の主張の間の関係について，労働者たちの組合の組織化について，自らの考えを再確認

した。これらの考えは，社会の知的階層の中に脈々と流れ込んだ」としている[26]。1830年９月末にビュッシェとその共鳴者たちはショワズール通りの一角に移り住む。ショワズール通りの彼らの新居は，アンファンタンとバザールという二人の最高教父（le Père suprême）を中心にサン＝シモン主義者たちの中心拠点となったモンシニィ通りの旧ジェスヴル館の真向かいに位置していた。新居への引っ越しに合わせて彼らは多くの人々に引越祝いの招待状を出した。この招待客たちの中にヴィニーの名もあり，彼は招待に応じた[27]。彼は「教会」設立後のアンファンタンとバザールを中心とした集まりには参加を控えたが，ビュッシェやその他の離反者たちとの関係は途絶えてはいなかった[28]。

本論の冒頭で引用したサン＝シモン教義の機関紙『グローブ』の記事の一節に再び目を移そう。この記事の日付は，1831年６月30日である。つまり，この時期にヴィニーは，『グローブ』紙を発行していたグループとは距離を置いていた。問題の記事は，戯曲『アンクル元帥夫人』（*La Maréchale d'Ancre*）の６月25日のオデオン座での初演を受けて書かれた批評記事である。するとヴィニーへの高い評価はこの劇作に由来するのか，あるいはそれ以外の彼の作品に依拠するのかという疑問が生じる。ヴィニーの劇作家としての業績については後に触れることにし，ここではその他の作品への評価の可能性を検証したい。

『古代・近代詩集』の中に収められた作品を見てみよう。私たちの目を引くのは，1831年１月に書き上げられ，同年４月に発表された詩「パリ」である。「上昇」（Élévation）という副題が付されており，語り手が一人の旅人を伴って，フランスの首都を高みから俯瞰している情景が展開する。「世界の軸」[29]と「私」が形容するパリは，フランス大革命の震源地である。さらに，1830年の七月革命によってアンリ四世以来続いたブルボン王朝が滅び，オルレアン家による立憲王政が始まってそれほど時間が経過してない頃である。この時期の多様な宗教思想・社会運動を念頭に置きつつ，ヴィニーはフェリシテ・ラムネ，バンジャマン・コンスタンおよびサン＝シモン主義者たちに言及する。この三者が表象する動向は，労働問題や民衆の教化という政治・社会問題と連動して，キリスト教を維持するのか，あるいは破壊しそれを代替する宗教を構築するの

かという極めて19世紀的な問いを内包していた。キリスト教の次に到来する宗教の可能性は，新たな政治体制の問題と相まって，実に多種多様な思索を生むことになる。

そうした宗教運動は，伝統的な実定宗教の在り方への批判あるいは問題視をそもそも出発点としており，新たな社会の動向と連動しようとする意図によって，その在り方は多種多様であるものの，ある種の「脱宗教化」が必然的に図られることになる。ヴィニーはそのことをよく理解していた。サン＝シモンの弟子たちに関連する詩句は以下のとおりである。

> … ある広大で普遍の寺院，
> そこで人は香も，塩も，血も，パンも，ワインも，ホスチャも奉献しない。
> ただ，自分の時間と仕事に還元された自分の生涯を奉献する。
> ただ，すべての人への愛を，さらに自らと「相続財産」と「国家」を供犠として奉献する。
> ただ一人，父も息子もなく，言葉に従い，
> 連帯がその目的で，労働がその役割だ。
> そして，イエスの後に言葉を発したその人によれば，
> すべての人が呼ばれ，すべての人が選ばれる[30]。

パリを見下ろす「私」の目に，サン＝シモン主義者たちの「寺院」(le temple) が映る。これは，アンファンタンたちが部屋を借りた旧ジェスヴル館を指す。「イエスの後に言葉を発したその人」とは，『新しいキリスト教』の著者サン＝シモンのことである。「香，パン，ワイン，ホスチャ」はキリスト教のミサを示し，「血」と「塩」はユダヤ教と関連する。「血」は生贄の動物の血に対応し，「塩」は「あなたの素祭の供え物はすべて塩をもって味をつけねばならない。あなたの素祭に，あなたの神の契約の塩を欠いてはならない。すべて，あなたの供え物は，塩を添えてささげねばならない」というレビ記（2，13）を思い起こさせる。これらはユダヤ・キリスト教の宗教儀式に不可欠な諸要素である

が，サン＝シモン主義たちの宗教においては，これらは無用のものとなる。つまり，「奉献」という行為が宗教を想起させるにしても，それはユダヤ・キリスト教とはまったく異相のものとして，サン＝シモン主義者たちの試みは解釈される。「すべての人が呼ばれ，すべての人が選ばれる」は，「呼ばれる者は多いが，選ばれる者は少ない」という福音書の言葉（マタイ22，14）のアンチテーゼといえよう[31]。確かにサン＝シモン主義者たちは，自分たちの師をイエスに取って代わる者と考えていた。1831年６月６日の『グローブ』の記事には，イエスとサン＝シモンの対比が見られ，「地上よ，喜べ。サン＝シモンが現れた。…世界を救った十字架よ。今ではお前は世界の重荷だ。消え去れ…」といった記述が存在する[32]。血縁関係によらぬ連帯（「父も子もなく」）が称揚されて相続財産が否定され，「労働」を価値基準としつつ成立する共同体が彼らの目的とされる。キリスト教との対立が明確化され，サン＝シモン教の組織に加わろうとする者は，今までの信仰を放棄する旨の宣誓を迫られた[33]。

「パリ」のこれらの詩句からまず理解されるのは，バザールとアンファンタンたち一門によって代表されるサン＝シモン主義の重要性を，ヴィニーが十分に認識していたことである。1831年６月30日の『グローブ』紙最終段落にあるヴィニーへの賛辞には，詩「パリ」におけるサン＝シモン主義への言及が関係していると想像される。さらに注目すべきは，1831年５月６日付『グローブ』紙における「パリ」に関する記事である[34]。詩人は「唯物主義の哲学者」のように懐疑と絶望の叫びを発しているとするコメントがあり，その叫びは「信仰を失った悩める魂の苦しみが生んだ冒瀆の言葉」と定義される。そのうえで，自分たちの「信仰」に合流するよう，誘いかけているのだ。記事は信仰の必要性を説く。

> 貴方はたぶん我々の政治学を評価しながらも，我々の宗教的性格を否定し，宗教が何の役に立つのかと自問する人々の一人かもしれない。宗教が必要なのは，信念が，愛が必要だからだ。科学，哲学，理性はそれだけでは懐疑と渇きしか生み出さないからだ。

確かに「長いこと世界は闇の中にある」と終わる「パリ」からは，ヴィニーにおける信仰の危機が読み取れる。この詩の創作ノートには，ある旅人への問いかけのかたちで，「君はこのように言うかもしれない。神は世界の歩みに介入しない …/神は存在しないと」，あるいは「君はキリスト教徒かもしれない，類まれなことだが」といった詩句がある[35]。日記の一節が示すように（「ユリアヌスは超自然の神秘的な世界への『信仰』を擁護したからこそ，偉大であったと私には思われる。それなしには『宗教』は存在せず，地上は唯物主義に陥るだろう…」）[36]，彼はむしろ唯物主義を警戒していたのであるから，「唯物主義の哲学者のように」という『グローブ』紙の比喩には，サン＝シモン主義者たちの無理解を感じたのではないかと想像される。

一方，ヴィニーの側からは，サン＝シモン主義者たちの「宗教」がどのように見えていたのか。1829年12月の日記の中に次のような一節がある。

> サン＝シモンの教義について考える…
>
> 彼の弟子たちは多くが能力ある経済の専門家で，芸術家を勧誘するために宗教者を装っている。バザール–アンファンタンの門弟たちは汎神論者で，人間の個人的［一語不明］や魂の行く末については何一つ提供できない。彼らはプラトンよりマルサスのほうをよく知っている[37]。

ヴィニーはこの引用の直後に，彼らの創設しようとしているのは「哲学的教権政治」であると記している。サン＝シモン主義者たちとの齟齬は明瞭である。とはいえ，サン＝シモン主義者たちからしてみれば，いち早く彼らの社会運動の重要性を認識し，それを自らの詩の中に読み込んだ詩人に期待したのは当然のことだったろう。そして，自分たちの運動への再参入を促したのだ。まして，ヴィニーが離反者たちとの交流を続けていたことを知っている以上，なおさらのことであったろう。

2　『アンクル元帥夫人』から『チャタートン』（*Chatterton*）へ

先に見たように，1831年６月30日の『グローブ』紙の記事は，パリで上演が始まったばかりの劇作『アンクル元帥夫人』に関するものである。サン＝シモン主義者たちは，大衆の教化のための演劇の効用に注目していた。この点について，「サン＝シモン主義者たちは教育に寄与する強力な諸要件の一つとして芸術を考えており，演劇に非常な重要性を見出していた」(38)とサケラリデスは指摘している。ヴィニー自身，読者は本を火に投げ込むことも窓から捨てることもできるが，いったん劇場に足を運んだ多くの観客たちはそこで語られることに耳をふさぐことはできないと，演劇の特異性を解釈していた(39)。

『グローブ』紙以前に彼らの思想普及のための機関誌であった『生産者』（*Producteur* 1825 /10 - 1826/10）に「劇作について」という記事がある。そこで執筆者Ａ. ガルニエは「劇場において最も輝かしい成功を収める方法は，今日の新たな道徳的諸観念を示すことだ」とし，劇作家たちに，社会の最新の傾向を考察し，それを劇場で再現するよう推奨している(40)。ここで価値あるものとされているのは，現代劇である。一方，ユゴーの『エルナニ』が上演され，エルナニ論争が巻き起ったのは1830年２月のことであるから，ロマン主義演劇の最盛期が到来しようとしていた時期である。1827年末には，ユゴーの史劇『クロムウェル』が有名な序文を伴って出版された(41)。当時ほかにも多くの史劇が創作されたが，過去の出来事は現在を照明するという考えから，歴史は現代を考えるための重要な参照項と位置づけられ，その意味から史劇における「現代性」が認識されていた(42)。

『アンクル元帥夫人』は史劇に分類される。主人公レオノーラ・ガリガイは，マリー・ド・メディシスの寵臣コンチーニの妻である。ルイ十三世の摂政マリー・ド・メディシスの権力を後ろ盾に，夫とともに富と栄誉をほしいままにしたとされる実在の人物である。夫の元帥がルイ十三世の指示で暗殺された後に，魔術を使って摂政を翻弄したかどで逮捕され，グレーヴ広場で処刑された。

問題の『グローブ』紙の記事では，「もし彼（劇作家）が観衆を過去にいざない，過去の様々の思い出で魅了したいなら，新しい視点からそれらを提示し，観衆の偏見を改めさせ，彼らが最も進歩的な人々に共感を持つようにすることめざすべきだ。この方向性以外では，演劇には未来がない」と指摘している。これはA. ガルニエの「劇作について」にも通じる主張である。つまり，史劇の有用性は否定しないものの，史劇にはある一定の条件が課される。そのうえで，『アンクル元帥夫人』についての次のようなコメントが続く。「ロマン派の概念によれば，これは同派の生んだ最も優れた作品の一つである。しかし，その欠点はまさにロマン派の概念にしたがって制作されたことにある」。サン＝シモン主義の見地からは，ロマン主義の文学理論には「不十分な部分」があるということだ。ただ，『グローブ』紙の記事はそれが何であるか具体的な指摘を欠いている。

彼らがいうロマン派劇の欠点とは何か？『アンクル元帥夫人』の中心的テーマは権力の乱用と腐敗である。これはロマン主義が好んで扱ったテーマの一つであった[43]。さらに『エルナニ』の例が示すように，禁断の恋あるいは不可能な愛が多くのロマン主義劇を特徴づける。ヴィニーはボルジアという架空の人物をヒロインの初恋の人として作中に登場させる。コンチーニ暗殺のシーンに架空の登場人物ボルジアとの決闘という要素を導入したため，宮中の敵対者たちやパリ民衆から嫌悪された権力乱用の極悪人コンチーニという印象が薄まる結果となっている。さらに，逮捕され連行される妻が夫とかつての恋人の亡骸を目の当たりにするという史実とは異なる設定は，主人公の運命の悲劇性を浮かび上がらせ，私物化された権力への糾弾を弱める。

一方で，ロマン主義劇の特徴である人間の二面性のテーマが浮かび上がる。ヴィニーはヒロインの性格を次のように規定する。「決然として男性的な性格の女性。優しい母で忠実な恋人。メディチ家から学んで，メディチ家風に慎重で本心を表さない。高貴な振る舞いを身につけているが，偽善的なところがある」。ヒロイン像を通じて，善あるは悪に分類しきれない人間の二面性と運命

の悲惨が強調される。サン＝シモン主義者たちの目から見ると，登場人物の大部分が絶対王政時代の為政者たちとその取り巻きである劇であっては，ポスト革命期の時代を照明する歴史の教訓が不明確であるということだろう。

ではロマン主義劇には，大衆教化の意図が全く不在であったのか。サケラリデスによれば，ロマン主義者たちが自らの劇作に付した序文の多くに，演劇の社会的使命の表明が読み取れる。ユゴーの『ルクレツィア・ボルジア』（*Lucrèce Borgia* 1833）は，サン＝シモン主義風の作品と解釈できる。その根拠として引かれているのが，「大衆が劇場を後にするときには，なんらかの峻厳で深い教訓を持ち帰るのでなければならない」という戯曲の前書きである[(44)]。それは，演劇には「教化し，称揚し，教えを説く使命」があるとする『グローブ』紙の記事と共通するように思える。ヴィニー自身はというと，「芸術は哲学的寓話であるべきだ」[(45)]としている。「哲学的寓話」というキーワードをもとに考えたとき，『アンクル元帥夫人』と『ルクレツィア・ボルジア』に共通するのは，人間の二面性に関する思索であろう。相矛盾するように見える性格を併せ持つ人間像は，ユゴーが『クロムウェル序文』で，魂と肉体によって成り立つ人間の特徴として，キリスト教と関連させつつ，近代におけるドラマの核心に据えたものである[(46)]。二人のヒロインはともに，権力を手中にしたがゆえに権力に翻弄される，あるいは権力により腐敗し悪の権化となり果てた存在だが，一方で自らの命も顧みない崇高な母性愛を体現する女性たちでもある。ユゴーのいう「なんらかの峻厳で深い教訓」は矛盾を含む人間のこの根源的な在り方に関係すると思われる。そうであれば，サン＝シモン主義者たちが考えた「教化」の内容と同一であるといえるだろうか。

とはいえ，ポスト革命期の時代に，サン＝シモン主義者たちであれ，ロマン派の作者たちであれ，共通に意識していたことがある。それは，歴史を進化させる真の原動力とは何かを問いなおし，民衆の決定的な重要性を明瞭にすることである[(47)]。たとえば『クロムウェル』であるが，「職工たち」（Les ouvriers）と題された第５幕では，護国卿の権力を支えるのが民衆であることが強調され

ている。クロムウェルが戴冠式を挙げ王位に就くはずだった「ウエストミンスター寺院の場」には，その装飾を担った職人たちが登場する。ユゴーは親方による搾取を受ける彼らの苦しみに言及する。その一方で，聖書を読むことができる彼らとは異なる，別種の民衆も登場する。ウエストミンスター寺院に向かうクロムウェルの行列を見物する下層民たちだ。「そうだ，数知れないこの民衆（…）/わしの高貴な運命の強力な共犯者のように見えるが/わしが徒刑場に引かれていくときも同じように歓呼するだろう」(48)。それは時には権力に味方するが，時には為政者のコントロールが効かない存在としての民衆である。『クロムウェル』を扱った『グローブ』紙の記事がある（1828年１月26日と２月２日の２回）。特に一回目は「序文」の分析であるが，ロマン主義文学の理論家としてユゴーを容認したうえで，「（…）それ（「グロテスク」le grotesque）は人間性に本来のもので，近代の風俗や様々な信仰から生まれたのであるから，ドラマ（le drame）はそれを排除することはできない」としている。ユゴーはカウンター・カルチャーとしてグロテスクを考え，それが社会の底辺に横たわる民衆文化と共有する自然な親和性を想定した(49)。『グローブ』紙の記事を書いた E. バローは，グロテスクに関するユゴーの主張に賛意を示す。さらに，Ph. レニエの指摘のとおり(50)，魂と物質からなる二面性をもつ人間という新たな人間解釈は，サン＝シモン主義者たちの賛同をえた。とはいえ，実際に創作されたロマン派劇がサン＝シモン主義者たちの理論と完全に歩を一にするものとは限らない。さらに，教義の喧伝の手段としての枠組みは，美の表現である芸術にとって窮屈であるいう問題もある。

『アンクル元帥夫人』には，ピカールという靴製造業の親方が登場する。市民軍（milice bourgeoise）の巡査としてコンチーニ暗殺の際に，元帥が合言葉を言えなかったため彼を捕縛した実在の人物である(51)。パリ市民の良識を表象する存在として，劇の中では位置づけられている。『グローブ』紙が他のロマン主義者たちと異なり，ヴィニー作品には「社会性」が備わっていると評価した根拠の一つとして，こうした第三身分の人物の導入が関係すると想像するこ

とができるだろう。権力闘争に明け暮れる支配者階級とは別の視点をもたらす役割を果たしているからだ。とはいえ，「彼ら（観衆）が最も進歩的な人々に共感を持つようにすることを目的とすべきだ」とする『グローブ』紙の注文を満たすためには，このブルジョワ階級の人物の重要度は低いといわざるをえない。観衆の注目が主人公レオノーラの悲劇に集中する構図は変わらない。劇作を締めくくるピカールの最後の言葉「そして我々は？」にもかかわらず，支配階級への権力集中への疑義や権力闘争の愚劣さが鮮明になっていない印象がある。サン＝シモン主義の立場からこの劇作を全面的に肯定できない理由は，ここにあるのではないか。

ロマン派の人々の中でもとりわけヴィニーこそが，サン＝シモン主義者たちの新しい詩学を作品において実現したと，『劇作家ヴィニー』の著者サケラリデスは考える。彼女が示そうとするヴィニー像は，サン＝シモン主義者たちの影響を受け，労働者階級の運命にまで強い関心を示す社会派文学者のそれである。そして，その理論がもっとも完成したかたちで具現した作品こそ，戯曲『チャタートン』（1834年初演）であるとされる[52]。

この戯曲は，18歳で自ら命を絶ったイギリスの詩人トーマス・チャタートン（1752-1770）という実在の人物をモデルにしている。成功を期待してロンドンに出てきたチャタートンは極度の貧しさの中で，餓死する前にヒ素で命を絶つ。ヴィニーはまず小説『ステロ』（*Stello*）の中で，彼の生涯をかなり自由に脚色して主人公とした。若き詩人はジョン・ベルという名の企業家が営むロンドンのある宿舎の住人という設定である。その宿舎は二人の子の母であるベルの妻キティが管理している。夫妻はヴィニーが創造した登場人物である。チャタートンは一縷の望みをつないで富裕な貴族に援助を乞うが，彼は下僕としての労働を提案される。つまり，彼は詩人としては完全に否定される。才能がありながらも，芸術家の存在そのものを蔑視するブルジョワ社会の中で認められず，貧困の中で自殺する主人公を通して芸術への無理解，芸術家の悲惨な運命が描かれている。密かに年下の詩人に想いを寄せていたキティは，彼の自殺後に絶

命する。

特筆すべきは，『ステロ』に関してフィリップ・ビュッシェが主幹する新聞（*L'Européen*）に掲載された評である。

> 詩的活動と政治活動を分離すること。これがアルフレッド・ド・ヴィニー伯が展開しようとした考えである。これが彼が，彼同様に詩作を生業とする人々に与えようとしたアドバイスである。自らの教訓を力説するため，彼は三人の詩人の例を持ち出す。彼らは政治と関わりをもったために，一人は病院送りとなり，もう一人は服毒自殺し，三人目は断頭台で果てる[53]。

服毒自殺する詩人がチャタートンである。彼はロマン主義が創造した「呪われた詩人たち」の一人であり[54]，社会から隔絶した孤独な存在である。社会の不公正と無理解の犠牲者であるが，知的エリートであって，それ以外のカテゴリーの社会の犠牲者たちとは一線を画している。他者と共有されえない不幸を抱え込んだ個人が絶望のあまり自殺するというストーリーは，キリスト教の視点からの批判にさらされた。ビュッシェの酷評の理由は，他者との連帯の不在と彼の最期がエゴイズムの帰結と捉えられたことにある。

チャタートンの物語は，戯曲に移し換えられたときに重要な変更が加えられた。一つには，「ノワール博士の第一診察」という副題をもつ小説『ステロ』ではチェタートンの物語は博士によって語られたが，劇ではクエーカー教徒の老人が筋の展開に深くかかわる。つまり，好奇心とイロニーが不在ではないノワール博士の語りが，貧しく敬虔なキリスト教徒（「わしはキリスト教徒で，キリストの普遍的共和国の中でも最も純粋な集団に属する」）[55]の視点に転換されている。クエーカー教徒の口を通じて，ジョン・ベルやその他の富裕階級の人々への批判が展開される。さらに劇では，チャタートンは自らを「本作りの職工」（ouvrier en livres）と定義する[56]。「セデーヌ嬢と著作権」[57]の中でもヴィニーは文学者を「本作りの職工」と呼び，その生きる権利と自由を訴え，それと関連して著作権を主張した。詩人はその活動の内容が異なっても，労働に従事す

る者の一人なのである。労働というテーマのもとで，詩人の活動は，サン＝シモン主義の視点からすると他のタイプの諸活動と共通性をもつ[58]。それによって，ジョン・ベルの作業所で彼に搾取されている職工たちと詩人の間に連帯の関係が可能となる。『チャタートン』の第一幕二場には，ジョン・ベルの工場で働く労働者の一団が登場し，仕事中に機械で腕を怪我して解雇された一人の同僚の職場復帰を懇願するシーンがある。

クエーカー教徒：（一人，ジョン・ベルがやって来るのを見ながら）ほら，怒っている。ほら，金持ちにして幸運な投資家。絵に描いたようなエゴイスト。法的には非の打ち所がない人物。

ジョン・ベル：（…職工たちに向かって，怒って）とんでもない，とんでもない！―お前たちはもっと働くんだ。それだけのことだ。

一人の職工：（同僚たちに向かって）そして，お前たちはもっと稼ぎが減るんだ。それだけのことだ。

ジョン・ベル：どいつがしゃべったんだ。わかったら，あいつと同じように，ただちにくびだ。

クエーカー教徒：よく言った，ジョン・ベル！おまえは，臣下に囲まれた王さながらにご立派だ。[59]

「最大多数の最も貧しい階級の道徳的，物理的，知的運命の向上」は，サン＝シモン主義の機関紙となった『グローブ』紙の標語にあるテーゼだ。職工たちはこの場にしか登場しないが，こういったシーンの挿入は，ビュッシェの批判に答えるものとなっているように思われる。ジョン・ベルは，ヴィニーが「我々の利己的で物質的な社会」（notre égoïste et matérielle société）[60]と呼ぶものの表象である。

一方で，M. ジョルジャンが指摘する通り，チャタートンはロンドン市長に庇護を願い出るが，それは芸術家と権力の関係，他の労働者たちのケースでは想定できない芸術家のある種の特権を明示している[61]。彼の自殺は，詩人と

しての存在を否定され，下僕の職を提示されたことによる強い屈辱感に起因する。これは，職工たちの状況とは別種のものであろう。ヴィニー自身，創作ノートの中で，「有産の産業従事者は自分の財産を増やすために，無産の産業従事者である職工の賃金をカットするが，少なくとも，食い扶持は与える。詩人にはそれがない」と記している(62)。ここで問題となっている無産者（prolétaire）という新しいコンセプトは，サン＝シモン主義者たちの理解していたところでは「最大多数の最も貧しい階級」を意味し，彼らの抱いていた構図は，「勤労者」（travailleurs）と「有閑者」（oisifs）の対立という古典的なものだった(63)。ヴィニーの考えも，その域を出ていない。詩人は，後者のカテゴリーにも入りうる。創作ノートによれば，怪我して失業した職工トビーがチャタートンから金を奪ったうえで殺害するというストーリーが構想として存在した。それは無教育の人間にあっては，絶望は殺人にいざない，詩人では自殺にいたるという発想による(64)。この筋は最終的には放棄されたものの，他の職工たちとの連帯の意識が劇作中でそれほど明瞭ではない背景とも考えらえる。「『チャタートン』は彼ら（文筆家たち）の地位を高める。そして，物質的で，ブルジョワ的で，産業家流で，計算高く，強欲で，蓄財に励む利己主義に抗議する」とヴィニーは後年の日記に記すが，「ブルジョワ階級のことは念頭になかった」とも付け加えている(65)。つまり，労働者階級の悲惨な現実と，それを放置する社会の在り方への問題意識はもってはいるものの，階級間の抗争という意識は不在だったということだ。この数行が書かれたのは1862年で，『レ・ミゼラブル』出版の年である。ユゴーも階級闘争の観念は排除しているが，小説の中でブルジョワジー批判を展開したという点では，ヴィニーとは異なる。

3　『ダフネ』におけるサン＝シモン主義者たちへの言及

「ノワール博士の第二診断」の副題をもつ『ダフネ』はヴィニーの死後約50年後の1912年に，パリのフランス国立図書館に保存されている草稿をもとに，

フェルナン・グレグによって雑誌『ルヴュー・ド・パリ』（*Revue de Paris*）に発表された。翌年に単行本として出版された80ページほどの中編小説である。入れ子形式の小説で，ステロとノワール博士が登場するパリの情景に始まり，ローマ皇帝ユリアヌスの時代の描写が挿入された後，最後に二人が再登場して終る。大革命をへてキリスト教が弱体化し，宗教への無関心や反感が広がりをみせた時代において，キリスト教を代替する宗教の可能性はあるのか。ヴィニーは小説『ダフネ』において，「脱宗教性」の問題を取り上げ，その中心テーマとした。七月革命以降の自らの人生を「私の生涯で最も哲学的な時期」(66)と定義するヴィニーは，哲学的視座から宗教についての思索を展開することになる。

その問いへの答えが，『ダフネ』の結論部分に示される。サン＝シモン主義者たちへの言及が見いだされるのは，この箇所である。

> 彼ら（ノワール博士とステロ）は（…），仮面をつけず奇妙ないでたちをした男たちの集団が通るのを見た。美貌の青年たちで，胸に名前が刻まれていた。この者たちはサン＝シモンという名の男を崇拝していて，新たな社会を構築すべく，新たな信仰を布教していた。
>
> 群衆たちは彼らに石を投げつけ，嘲笑した。
>
> それだけではなかった。彼らはもっと不吉なものを見た。それは一人の司祭で，先ほどの若者たちを追ってやってきて，次のように言った。「あなた方に仕えよう，あなた方を模倣しよう」。「王たちは頭蓋骨の容器に入った血をすする。司祭たちは，富と名誉と権力が喉までこみ上げて窒息しそうだ。民衆は彼らを打倒せねばならない。（…）」。「あなた方のためにサン＝シモン主義の『黙示録』をしたためよう。それは憎しみの書となるだろう」。
>
> 群衆は彼の言葉を聞き，嘲笑した(67)。

「仮面をつけず」という描写は，当日が謝肉祭期間の最終日の「謝肉の火曜

日」であることに対応する。「奇妙ないでたち」とは，サン＝シモン主義者たちの制服を示唆している。ヴィニーがサン＝シモン主義者たちの社会改革プログラムから距離を置くようになったのは1840年のことであり，『ダフネ』の結論部分が書かれた1837年においては，彼はまだサン＝シモン主義者たちにそれなりの評価を与えていたとされる。つまり，「群衆たちが石を投げつける美貌の青年たち」という表現からは，群衆の無理解に遭遇する彼らに対するヴィニーの同情的な視点が看取されるというのだ(68)。ヴィニーは1832年の日記に次のように書く。

> サン＝シモン主義者たちの喜劇は，グロテスクな仮装行列に終わった。しかし，自分たちの思想の持続性について思い違いをしたものの，彼らはその普及に尽力した。
>
> 最大多数の階級の生活の改善，さらに無産者の「能力」と所有者の「相続権」の調整が，まさに今日の政治の課題である(69)。

にもかかわらず，彼らの努力は実ることなく，サン＝シモン主義者たちの「宗教」は広く民衆の受け入れるところとはならなかった。これが『ダフネ』の結論である。

彼らに続いて登場する一人の司祭は，明らかにフェリシテ・ラムネを指す。ところで，サン＝シモン主義者たちの活動にラムネが触発されたとまでは仮定できるだろうが，彼をサン＝シモン主義者たちの追随者あるいは模倣者とみなす解釈には明らかに無理がある。エミール・バローは1830年12月14日の『グローブ』紙上で，次のようにラムネについて述べている。

> 布教活動を完遂するために，ついに貴方は教会のヒエラルキーを侵犯せざるをえなくなった。司祭たちは，貴方の声に耳を貸さないだろう。司祭たちは給与をもらうことに満足し，従属や退廃さえも受け入れるだろう。（…）今日におけるカトリシスムの唯一の功績は，貴方のような勇気ある

司祭を生み出したことだ。メストルとシャトーブリアンの雄弁を受け継いだ貴方の天才は，（…）カトリシスムの断末魔を少しく和らげることだろう。

この引用からはラムネとサン＝シモン主義者たちの対立の構図が明らかである。この時期のラムネはメストルとシャトーブリアンの系譜に属する伝統主義者であり，教皇権至上主義者であった。彼は当時，『未来』（*L'Avenir*）紙を主幹し，キリスト教の再興を図るとともに，それを新しい時代にふさわしい政治体制構築と連動させようとしていた。『未来』紙において，「貧しい民衆は，貧しさを分かちあうのでなければ，司祭を敬愛しない」と述べて，聖職者を国家の公僕の地位に置く政教条約の破棄を唱えて，フランスカトリック教会上層部を震撼させていたことも事実である(70)。一方，ラムネはキリスト教の復興に心血を注いでいたのであり，カトリック教会組織に離反する意図は当時は抱いていなかった。この時期のラムネの政治的活動は，サン＝シモン主義者たちの“宣教活動”といわばライバル関係にあったといえるだろう。七月革命後のラムネを，ヴィニーは「パリ」において次のように描写する。

ローマの意に反してローマに尽くす貧しく力ある司祭
崇高な「死体」は，その不死の釘から
祭壇に血を滴らせることはもうない
無だ…眠りについたその耳は
新たなエレミヤの嘆きを聴くことはないだろう(71)

ヴィニーはラムネを預言者エレミヤに喩え，教皇を中心としたカトリック信仰の復興に尽力するラムネの努力を，不毛なものとして否定した。ヴィニーのラムネ観は，バローのコメントと符合しているように思われる。

ラムネの転機は，1832年に訪れたと考えることができるだろう。同年にラムネの思想は教皇勅書「ミラーリ・ヴォス」によって糾弾された。さらに1834年に出版された『信者の言葉』（*Paroles d'un croyant*）は，新たな勅書「シング

ラーリ・ノス」によって教皇の咎めを受けることになる。1836年には，教皇庁を激烈な調子で非難したラムネの著書『ローマの事々』（*Affaires de Rome*）の出版が，カトリック教会との断絶を決定的なものとした。『信者の言葉』や『ローマの事々』における攻撃の調子は，ラムネの激しい性格を反映しているのだが，それが『ダフネ』における「憎しみの書」というヴィニーの表現につながっているのだろう。『ダフネ』は三部作になる予定だったが，日記等からその構想を見ていくと，ヴィニーがずっとラムネに関心を抱き続けていたことがわかる。ラムネはサン＝シモン主義者たちとは異なり，新たな宗教的組織を作ろうとする意図は持たなかったが，新たな宗教の在り方を模索した一人だった。1837年の日記には，明らかにラムネを下敷きとした登場人物について，「おお，ラミュエル，あなたは自分を宗教者と思っていたが，違う。あなたは哲学者だ。―もし真の宗教者であったなら，十字架の足元にとどまっていたはずだ」というくだりがある[(72)]。確かにラムネの思想は，原罪とキリストの死による贖罪を否定し，「福音書の師」を人類の表象とするにいたる。彼が四福音書を自ら翻訳し長い注釈をつけて出版した『福音書』には，民衆の先頭にたつ革命家イエスが浮かびあがる。また彼は，『哲学の素描』（*Esquisse d'une philosophie* 1841-6）を上梓する。1844年，ラムネが『哲学の素描』の出版（全4巻）を続けていた時期，ヴィニーは皇帝ユリアヌスとラムネを関連づけて次のように記している。

古代と近代の二つの主要な宗教は二つの同様な曲線をたどっているように思われる。

四世紀において多神教は衰退しつつあった。多神教は再興のために，折衷的で理神論的なアレキサンドリア学派の哲学に逃避しようとした。（…）

ところが，このアレキサンドリア学派は，当時の時代に適合し，それと共に歩もうとしたために，半ば宗教である中途半端な哲学となり，同時に，半ば哲学である中途半端な宗教となってしまった。

シュトラウスは，キリスト教の「理念」を救うために，物語を犠牲にす

ることを望んだ。ラムネは自らの神権政治を救うために，それを七月革命の民衆運動に依拠させようと望み，彼のキリスト教を哲学と人間理性に立脚させようとした。彼の教義はそこで自らを見失い，彼の哲学は教義であらんとして損なわれてしまった[73]。

つまり，ヴィニーはこの時期のラムネの思想が脱宗教化し，その結果として「中途半端な宗教」になってしまったうえに，哲学としても不完全なものであると指摘しているのだ。サン＝シモン主義者たちとラムネの関連付けは，この脱宗教化の問題と関連しているように思われる。

この小説にも一人の職工が登場する。彼はジャン・ロワールという名の旋盤工である。1831年２月14日から15日にかけてパリ大司教館襲撃事件が起き，ノートルダム大聖堂の裏手にあった大司教館の図書館では大量の蔵書が破られ，窓からセーヌ川へ投げ捨てられた。『ダフネ』はこの史実を背景としている。三人の子を連れた職工は，セーヌ川から拾い上げた古書をノワール博士に売りつけようとする[74]。ここには，書籍が表象する知へのアクセスをめぐっての二つの階級の深刻な分断がある。さらに「『ダフネ』の結末」と題された部分にある以下の次のくだりは，ジャン・ロワールとの遭遇が下敷きとなっている。

二人（ノワール博士とステロ）とも，12世紀の「蛮族」（les Barbares）が引き起こした出来事（アレキサンドリア図書館の焼き討ち）について13世紀に書かれた見事な記述を，むさぼるように読んだ。しかし，読み続けることができなくなった。なぜなら残りの三百ページは，今日遭遇した19世紀のパリの蛮族たちによって引き裂かれていたからだ[75]。

注目されるのは，パリの民衆がローマ時代の蛮族たちに比されていることだ。『ダフネ』は入れ子細工になっているため，この比較は小説の構造と当然ながら関係する。一方で，ヴィニーが参照した可能性があるのが，1832年に出版されたサン＝シモン主義者たち説教集（*Prédications*）である。P. ミッシェルの指

摘のとおり，革命後の無産階級を「新たな蛮族たち」と形容する箇所を含むE.バローの説教が行われたのは，1830年11月である。そこでは「出自によるあらゆる特権が例外なく廃止され，能力による序列化」が準備され実現するときにこそ，19世紀の蛮族の脅威が解消するとの主張が見える[76]。それに先立って10月にはすでに，別の説教者が労働者階級を蛮族に譬え，「労働者階級！彼らこそが封建社会の廃墟の上に新たな支配を確立することになるだろう。しかし，彼らは（…）スキティアの砂漠からやって来るのではなく，（…）作業場や田畑から抜け出てくる。今そこで彼らは，無知と貧困にあえいでいるのだ（…）」[77]としたくだりが存在する。サン＝シモン主義者たちの説教よりももっと多くの読者にこの比較を広めたと想像されるのが，1831年12月８日に『デバ』（*Journal des Débats*）紙に掲載されたサン・マルク・ジラルダンの記事である。「社会を脅かす『蛮族』は，コーカサスや中央アジアのステップにいるのではない。彼らは我々の工業都市の市外にいるのだ」という一節は，同年のリヨンの絹織物職人たちの反乱の後の強い危機感を背景に執筆された。この記事でも念頭に置かれているのは，リヨンの絹織物職人のような労働者たちであって，筆者が « populace » と呼ぶ下層の烏合の衆ではない。著者はリヨンの騒乱をハイチのサン＝ドミンゴで起きた奴隷反乱と同一地平に置く。つまり，都市の労働者と植民地の奴隷が比肩されているのだ。当時の社会の深刻な分断が理解される一方，著者が主張するのは次の点である。「有産階級と無産階級の間に超えることのできない障壁を設けるのは，残虐であり横暴である」。すべての者が容易に産業に携わり，所有に到達できることなしには，社会の安定はないと著者は警告する。当然のことながらブルジョワ階級の危機意識と自己防衛の必要性の自覚が前面に出ており，その視点からは，労働者階級は流血を伴う革命を引き起す可能性のある危険な人物たちである。

おわりに

サン＝シモン主義者たちやラムネのケースから知りえるように，19世紀にお

ける新たな宗教の希求は，新しい時代に適合した政治体制や社会の構築の模索と連動していた。J. グランジュは，『サン＝シモン学説解義』では，反教権主義とユートピア社会主義に固有の世俗化されたキリスト教が混合され，表現されており，「サン＝シモン教は（…），社会と政治の組織化（相続に関する法，金利生活の禁止など）によって，友愛と利他心のキリスト教的メッセージを実現する」とする。しかし，それはキリスト教神学と神の超越の排除を前提としているのだ(78)。一方，ヴィニーは宗教のこうした変容の可能性を拒否する。すでに見たように，彼はサン＝シモン教を「哲学的教権政治」に過ぎないとしたが，宗教は哲学に歩み寄ることによって，別の言い方をすれば，脱宗教化を被ることによって，崩壊すると考えた。なぜなら彼にとって宗教とは，「声になれば祈りとなり，信仰の対象に哀願し感謝を捧げ，天上的な存在が現存することへの希望によって息吹を与えられ，崇拝の対象が現に存在することを信じる愛」(79)によってしか成り立たないからだ。自らは哲学に依拠しつつ，新たな信仰としての芸術を企図しながらも，彼は新たな宗教の創設を否定する。

そのことは，彼が社会問題に目を向ける際の立ち位置とも関係しているように思われる。私たちは，ヴィニーが社会問題に非常に強い関心を持ち，労働者たちの存在を意識して作品の中に登場させていたことを確認した。ただし，彼は，政治的な主張の手段として労働者たちを描いたのではなかった。『チャタートン』には政治的意図が認められるようにも思われるが，先に見たように1862年の日記では，『チャタートン』の再演の折に，ブルジョワジー批判の目論見はなかったとしている。つまり，階級間の緊張関係に危機感を持ってはいたが，それを解決しようとする意識は希薄だったというのだ。とはいえ，社会正義の観念が表明されていることは否定できないし，七月革命直後の時代を考慮するとき，そこから30年を経た感想が必ずしも彼の当時の心境と対応しているかは疑念が残るのも事実だ。

一方，『チャタートン』の初演と同年の1834年に発表されたユゴー『クロード・グー』と比較するとき，我々は両者の差異を感じざるをえない。この小説は実話に基づいているが，社会問題小説であって，現実が大幅に改変されてい

る。「パリの蛮族」の一人であるグーは盗人であり，殺人者でもある。ただし，民衆に潜在する潜在可能性の表現として描かれている。その意味で，ユゴーの創造した労働者は政治的意図を担っているがゆえに理想化されており，現実から遠い。ヴィニーの旋盤工と比較するとき，台頭しつつある新しい階級へのまなざしが，その差異を生んでいるように思われる。

三部作を想定していた『ダフネ』の構想では，ロワールがラムネを想起させる登場人物ラミュエルを殺害するというストーリーが存在した[(80)]。「ラミュエル」は，ラムネとエマニュエル（＝キリスト）を合成した語であり，社会変革を企図した宗教者として登場する予定だった。「支配者のための宗教」を脱皮して民衆へと向かおうとし，政治的改革を実現しようとした司祭が一労働者によって命を失うという設定は意味深長である。先に見たように，ラムネの思想は革新を希求する社会運動の中で，脱宗教化していく。ヴィニーはサン＝シモン主義者たちの試みと同様に，こうした動向の成功も信じていない。となれば，キリスト教を代替する宗教創設の試みと不可分に結びついた芸術家の役割も，曖昧なものにならざるをえなかったといえるだろう。

註

(1) 『グローブ』紙の記事は，フランス国立図書館 RetroNews のサイトから入手。『グローブ』がサン＝シモン主義の新聞であった時期は，1830年11月11日から1832年４月20日までである。

(2) Emma, Sakellaridès, *Alfred de Vigny, auteur dramatique*, Paris, Librairie de la Plume, 1902, pp.195-196.『同時代人に宛てたジュネーヴの一住人の手紙』の出版年であるが，1802年である。日本大学図書館法学部分館が所蔵するサン＝シモン・コレクションの Part II は，エマ・サケラリデスが1902年から1908年の間に執筆したと推定される未刊行の研究書の草稿である。そのタイトルは「サン＝シモン主義者たちとロマン主義者たちとの知的関係」（*Les Rapports intellectuels des Saint-Simoniens avec les Romantiques*）となる予定であった。序論の後に十一の章が確認され，「サン＝シモン主義者たちによる芸術家の使命」，「サン＝シモン主義者たちの主張」，「オーギュスタン・ティエリー」，「サント＝ブーヴ」，「アルフレッド・ド・ヴィニー」，「アルフォンス・ド・ラマルティーヌ」，「ヴィクトール・ユゴー」，「ジョルジュ・サンド」，「ピエール＝ジャン・ド・ベランジェ」，「ジュール・ミシュレ」，「エドガール・キネ」である。ヴィニーとサン＝シモン主義の関係については，

実際の接点や直接的な影響関係を考察しているので，一部参照した。サケラリデスも，冒頭に挙げた『グローブ』紙の記事を引用している。本草稿はPDF版のかたちでの閲覧が可能である。

(3)　Laudyce Rétat, *Introduction* à l'*Histoire des origines du christianisme*, Paris, Robert Laffont, 1995, t. I, p.II.「脱宗教化」については，拙論「ヴィニー『ダフネ』における「脱宗教性」」（『キリスト教文学研究』第37号，2020年4月，pp.62-73を参照されたい）。

(4)　*Ibid*., p.XXXV.

(5)　Antoine Picon, « La religion saint-simonienne », *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, 2003, t.87, p.26.

(6)　ピエール・ミュッソ著『サン＝シモンとサン＝シモン主義』，杉本隆司訳，白水社，2019年，40，45頁。

(7)　Saint-Simon, *Nouveau christianisme, Dialogues entre un conservateur et un novateur, Œuvres complètes*, PUF, 2012, t. IV, p.3185. サン＝シモンの最後の著作とされる『新しいキリスト教』であるが，多様な解釈が可能である（pp. 3169-3147）。

(8)　*Ibid*., pp.3218-3219.

(9)　Juliette Grange, « Contexte de rédaction et place dans l'histoire des socialismes » in *Exposition de la Doctrine de Saint-Simon*, éditée par J. Grange et P. Musso, Lormont, Le Bord de l'eau, 2020, p.51.

(10) P. ミュソー，前掲書，98-99，109頁。

(11) *Nouveau christianisme*, p.3210.

(12) Émile Barrault, *Aux artistes. Du passé et de l'avenir des beaux-arts*, Alexandre Mesnier, 1830, p.76. 最初に発表されたのは，1829年である。

(13) *Ibid*., pp.12-13.

(14) *Ibid*., p.73.

(15) Philippe Régnier, « Les Saint-Simoniens, le Prêtre et l'Artiste », *Romantisme*, 1990, n° 67, p.35. Ph. レニエによれば，バローの芸術論は多面的であり，有機的時代と批判的時代に対応する芸術の諸価値も複雑に交錯している（p.40）。

(16) *Ibid*., p.36.

(17) E. Barrault, *op.cit*., p.76.

(18) *Doctrine de Saint-Simon, Exposition, 1ère année, 1829*, Paris, Au bureau de l'Organisateur, 1830, p.268.

(19) Ph. Régnier, *op.cit*., p.36.

(20) *Doctrine de Saint-Simon, Exposition, 2e année, 1829-1830*, Paris, Au bureau de l'Organisateur et du Globe, 1830, pp.125-126.

(21) Ph. Régnier, *op.cit*., p.38.

(22) Pierre Flottes, *La pensée politique et sociale d'Alfred de Vigny*, Genève, Slatkine Reprints, 2012（réimpression de l'édition de Paris, 1927）, p.64.

(23) Léon Séché, *Le Cénacle de la Muse française 1823-1827*, Paris, Mercure de France, 1908, pp.268-269.

(24) *Le siècle des saint-simoniens, du Nouveau christianisme au canal de Suez*, Paris, BNF, 2006, p.50.

(25) Frank Paul Bowman, *Le Christ des barricades*, Paris, Cerf, 1987, p.196.

(26) サケラリデス草稿，p.133.

(27) 同上，pp.132-133.

(28) *Stello, Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. II, p.1480（*Stello* に付された注による）。P. ベニシューの指摘のとおり，ビュッシェやその共鳴者たちとの関係も，1830年においてビュッシェと２，３度会っているのが確認できるとはいえ，書簡などの資料からは多くを知りえない（Paul Bénichou, *Les mages romantiques*, Paris, Gallimard, 1988, p.136）。とはいえ，ヴィニーがサン＝シモン主義者のプロスペール・ロベールに宛てた手紙からは，彼がサン＝シモンの思想に興味を持っていたことがわかるし，また1830年３月18日にビュッシェがヴィニーに宛てた書簡によると，E. バローの『芸術家たちへ』は，プロスペール・ロベールを通じてビュッシェからヴィニーに手渡されたことという事実も明らかである（Alfred de Vigny, *Correspondance*, Paris, Classiques Garnier, t. I, pp.359, 417-418）。

(29) « Paris », *Poèmes antiques et modernes, Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. I, p.107.

(30) *Ibid.*, p.109.

(31) *Ibid.*, p.1028（詩「パリ」に付された注による）。

(32) セバスティアン・シャルレティ著　沢崎浩平他訳『サン＝シモン主義の歴史』，1886年，法政大学出版局，97頁。

(33) Francis Démier, « Les saint-simoniens à la rencontre des ouvriers parisiens au tournant des années 1830 », in *Actualité du saint-simonisme*, colloque de Cerisy, sous la direction de Pierre Musso, 2004, Paris, PUF, p.174.

(34) P. Flottes, *op.cit.*, p.86に指摘がある。本論では，『グローブ』紙の主張を別の角度から分析した。

(35) Esquisse de « Paris », « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. I, p.271.

(36) Vigny, *Journal d'un poète, Œuvres complètes d'Alfred de Vigny*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1948, t. II, p.1289.

(37) *Ibid.*, p.900.

(38) サケラリデス草稿 p.139。

(39) « Lettres à Lord***», *Œuvres complètes d'Alfred de Vigny*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. I, p.397. « Lettres à Lord***» は『オセロ』を訳した戯曲『ヴェニスのモール人』（*Le More de Venise*）の出版の際の前書きである。一方でヴィニーは，劇作は哲学的思索を展開するには不適切であるとも，述べてい

る（p.399）。

(40) Adolphe Garnier, « De l'art dramatique », *Producteur*, t.2, 1826, pp.605-606.

(41) この戯曲は古典劇の三単一の法則へのアンチテーゼとして構想されていたこともあり非常に長大な作品となり，上演されることがなかった。

(42) これは，シャトーブリアン『革命試論』（*Essai sur les révolutions*）にある考えと一致する（Annie Uberfeld, *Introduction* à Hugo *Cromwell*, GF-Flammarion, 1968, p.19）。

(43) Marie-Christine Moreau, *Chatterton et le drame romantique*, CRDP Midi-Pyrénées, 1996, p.104.

(44) *Préface de Lucrèce Borgia*, *Œuvres complètes*, « Théâtre I », Paris, Robert Laffont, 1985, p.973.

(45)『アンクル元帥夫人』の序文（p.625）。

(46) Hugo, *Préface de Cromwell*, *Œuvres complètes*, « Critique », Paris, Robert Laffont, 1985, p.16.

(47) Annie Uberfeld, *Introduction* à Hugo *Cromwell*, GF-Flammarion, 1968, p.22.

(48) Hugo, *Cromwell, Œuvres complètes*, « Théâtre I », Paris, Robert Laffont, 1985, pp.294-295, 299, 340 et 346.

(49) Anne Ubersfeld, *op.cit*,, p.65.

(50) Philippe Régnier, *Les idées et les opinions littéraires des Saint-Simoniens (1825-1835)*, thèse pour le doctorat du 3e cycle (sous la direction de M. R. Fayolle, année universitaire 1982-1983), p.161.

(51) *La Maréchale d'Ancre*, pp.1446-1447（『アンクル元帥夫人』に付された注による）。

(52) サケラリデス草稿，pp.141-142（「それはおそらくロマン派が実現した最も見事な作品であり，当時の哲学的思索の最も見事な表現であった。というのも我々はチャタートンを，あらゆる社会的悲惨の表象と見なすことができるからだ。彼は単に芸術家の上にだけでなく，女性や労働者の上に，『幸福な者たち』のエゴイズムが生み出したあらゆる犠牲者の上にのしかかる，社会的悲惨の表象であるからだ」）。

(53) *L'Européen, journal des sciences morales et économiques* (le 28 avril 1832). フランス国立図書館 Gallica のサイトより入手。『ステロ』には獄中の息子の運命を憂慮するアンドレ・シェニエの父の様子を表現して「彼は，ある幸運なる有機的時代において尋問中の犯罪者が判事を見つめるように，私を見つめた」とノワール博士が語るシーンがある（*Stello*, p.571）。P. ベニシューの指摘（P.Bénichou, *op.cit*., p.137）によれば，*L'Européen* の記事の執筆者はこのくだりに有機的時代に関するヴィニーの否定的見解を読み取った。

(54) Marie Christine Moreau, *op.cit*., p.97.

(55) *Chatterton, Œuvres complètes d'Alfred de Vigny*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. I, p.797.

(56) *Ibid*., p.788.

(57) « De Mademoiselle Sédaine et de la propriété littéraire – Lettre à Messieurs les députés », Mélanges, *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. II, p.1195. 1841年１月15日に『両世界評論』に掲載された論文。著作権に関する議論が１月18日に国民議会で審議されるのを念頭に書かれた。著作家を父にもったセデーヌ嬢が，父の死後に遺族手当を打ち切られて貧窮状態にあったことが背景にあった。

(58) Maxime Georgen, « Le saint-simonisme et l'au-delà du littéraire : l'exemple de Chatterton », in Actualité du saint-simonisme, colloque de Cerisy, sous la direction de Pierre Musso, 2004, Paris, PUF, pp.311-312.

(59) *Chatterton*, pp.765-766.

(60) Esquisses concernant *Chatterton, Œuvres complètes d'Alfred de Vigny*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. I, p.865.

(61) Maxime Georgen, *op.cit.*, p.318.

(62) Esquisses concernant *Chatterton*, p.865.

(63) Francis Démier, *op.cit.*, pp.169-170.

(64) Esquisses concernant *Chatterton*, pp.838-839.

(65) *Journal d'un poète*, p.1373.

(66) *Ibid.*, p.960.

(67) *Daphné, Œuvres complètes d'Alfred de Vigny*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, t. II, pp.979-980.

(68) *Ibid.*, p.1635.『ダフネ』に付された編者Ａ・ブーヴェの作品解題による。

(69) *Journal d'un poète*, p.968.

(70) 拙著『「神」の人　19世紀文学における司祭像』（国書刊行会，2015年，pp.13-25）を参照されたい。

(71) « Paris », p.108.

(72) *Journal d'un poète*, p.1058.

(73) *Le Journal d'un poète*, pp.1224-1225. ヴィニーは360年の代わりに300年，四世紀の代わりに三世紀としているが，明らかな誤りである。

(74) *Daphné*, pp.906-907.

(75) *Ibid.*, pp.979.

(76) Pierre Michel, *Un mythe romantique Les Barbares 1789-1848*, Lyon, Presses universitaires de Lyon, 1981, pp.261-262. E. Barrault, « Les Femmes », *Prédications*, 1ère partie, *Œuvres de Saint-Simon et d'Enfantin,* Paris, Ernest Leroux, 1877, t. 43, pp.220.

(77) P.-M. Laurent, « L'Etat et l'Europe », *Prédications*, pp.179-180.

(78) J.Grange, *op.cit.*, p.52.

(79) *Daphné*, p.963.

(80) *Journal d'un poète*, p.1056.

本論文は学術振興会科研費（基盤研究 C 17K02604）を得て，執筆されたものである。

現代英語の be about to に関する意味論的研究 *

佐　藤　健　児

1. はじめに

「かたちが違えば意味が異なる。意味が違えばかたちが異なる」（Bolinger（1977：x））―ことばの世界の大原則である。では，ともに近接未来を表わすとされる be about to と be going to とでは，どのように意味が異なるのであろうか。例えば，次の（1）のような例における容認性判断の違いは，いったい，どのように説明されるべきであろうか。

（1）Message printed on hot beverage cup sleeves:
Caution: The beverage you { ***are about to*** / ?***are going to*** } enjoy is extremely hot.　（Strauss et al.（2018：245））

* 本稿は日本大学英文学会2018年度学術研究発表会（2018年12月８日（土），日本大学文理学部）および六甲英語学研究会2018年12月例会（2018年12月23日（土），神戸市勤労会館）において口頭発表した原稿に大幅の加筆・修正を施したものである。当日司会をしてくださった黒滝真理子先生，出水孝典先生，発表の準備段階から貴重なご意見をくださった柏野健次先生，吉良文孝先生，保坂道雄先生，和田尚明先生，小澤賢司氏，発表の際に有益なコメントをくださったフロアの先生方，そして，インフォーマントとして協力してくださった Richard Caraker 先生，Myles Chilton 先生，Thomas Lockley 先生，Jonathan Wood 先生にもこの場をお借りして心より感謝申し上げたい。

本稿では，従来，周辺的な未来表現とみなされてきた be about to について，適宜，be going to との比較・対照を織り交ぜながら，その意味的特徴を明らかにしてみたい。

2. Be about to の統語的特徴

本題に入る前に，be about to の統語的特徴について，３点指摘しておきたい。

2.1. Be about to の主語

はじめに，be about to の主語についてみてみよう。次の（2a）の例にみるように，近接未来を表わす表現の中でも，be on the point of は，ふつう，その主語に無生物をとることはできないとされる（Cf. Close（1975：261）；Declerck（1991：116）；鈴木・安井（1994：211）など）。

（２）a. *I feel (that) <u>something terrible</u> ***is on the point of*** happening.

（鈴木・安井（1994：211））

b. I can't see you now. <u>I</u>'***m*** just ***on the point of*** leaving.

（Close（1975：261））

では，be about to の場合はどうであろうか。この点に関しては，Potsuma（1926：245）に以下の記述がみられる。

（３）*To be about* is distinguished from to *be going in*［ママ］that it is less colloquial than the latter and is more distinctly used to express a near or immediate future. <u>Nor is it, apparently, ever used in connexion with the indefinite *it* as the subject. Thus *It is going to rain* could hardly be replaced by *It is about to rain*.</u>

しかし，Potsuma（1926）の記述は少なくとも現代英語の be about to には

当てはまらないようである。次の（4）のような実例が観察されるからである（Cf. 荒木編（1986：271f.））。

（4）There was a fifteen-second pause. While he waited, Tsukuru gazed out the window at the streets of Shinjuku. Thick clouds covered the sky, and it looked like it ***was about to*** rain.

（Haruki Murakami, *Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage*）

さらに，次の（5）や（6）の例にみるように，be about to の主語としては，不定の it のみならず，虚辞の there や無生物も生起可能である。

（5）There***'s about to*** be an explosion.　（Long and Long（1971：163））

（6）I feel (that) something terrible ***is about to*** happen.［Cf.（2a）］

（Close（1975：261））

以上の点からも分かるとおり，少なくとも現代英語においては，be about to の主語として生起する名詞句の種類に関して，統語上の制約は存在しない。

2.2. Be about to の統語的ステータス

次に，be about to の統語的ステータスについて考えてみよう。すなわち，be about to を，統語上，次の（7i）と（7ii）のどちらとみなすべきかという問題である[2]。

2　意味的には，*OALD*[10]（s.v. ABOUT）のように，be about to をイディオムとみなすべきか否かが問題となる。*OALD*[10]によれば，イディオム（idiom）とは次のように定義される。

（i）a group of words whose meaning is different from the meanings of the individual words: *'Let the cat out of the bag' is an idiom meaning to tell a secret by mistake.*　（*OALD*[10]（s.v. IDIOM））

本稿では，be about to の表わす意味は，（i）be，（ii）about，（iii）to という個々の単語の意味の総和によって導き出されるものであり，その意味において，イディオムではないという立場をとる（Cf. Yamamoto（2010：83））。

（7）i. Be about to はひとまとまりの機能語である。
ii. Be about to は be + about to という複数の要素からなる複合的な表現である。

（7i）は be about to を be going to と同様，3語で1つの機能語とみなす考え方である。この立場をとる文法家には，例えば，安藤（2005）や石橋編（1966）などがいる。

（8）この about の品詞については，ときに I am about *starting*.（私は出かけようとしているところだ）のように動名詞を伴うこともあるので，OED[2]は ‘on the point of’ という意味の前置詞と解している[3]。一方，OALD[5, 6]や LDCE[3, 4]は形容詞としている。しかし，こういう品詞の詮索はあまり生産的ではなく，いまは文法化が生じて，be about to で近接未来時を指示する機能語になっている，と考えるのが至当であろう。（安藤（2005：110））

一方，Wada（2019）は次の3つの統語的な証拠に基づき，be about to は be going to とは異なり，be + about to という2つの要素から合成的に構成されていると主張する。（7ii）の分析である。

第1に，about to は be 以外のコピュラと共起することが可能である。

（9）a. He remembered that Narcisse’s nose had twitched at the breakfast table and that she ***had seemed about to*** cry.
（Irwin Shaw, *Tip on a Dead Jockey*）（小西編（1989：11））

3　これに対し，be about to は動名詞を伴わないとする文法書・語法書や辞典も存在する。
（i）a. I ***was about*** { ***to get*** / ***getting*** } into the bath when I heard a strange noise.
（Turton（1995：§6））
b. I ***was about*** { ***to leave*** / ***leaving*** } when the telephone rang.
（Heaton and Turton（1987：1））
c. ‘You ***are about*** { ***to cross*** / ***crossing*** } the River Jordan’.
（*CALD*[9]（s.v. ABOUT））

b. She didn't respond. She just held her lips tight. She ***seemed about to*** say something, but it looked like if she did, she would cry.

（Haruki Murakami, *Yesterday*）

(10) … ; while in an early Attic scene, he ***appears about to*** cut off the monster's tongue.　（BNC E87）（Wada（2019：326））

第 2 に，about to は単独で as if 節内に生起することが可能である。

(11) Marc took a step forward ***as if about to*** restrain his younger brother by sheer force, but …　（BNC JXU）（Wada（2019：326））

第 3 に，about to は単独で形容詞的に名詞句を修飾することが可能である。

(12) a. No one could have the slightest foreboding of anything ***about to*** happen.　（江川（1991[3]：318））

b. Passengers ***about to*** depart on flight 26 should proceed to gate 5.

（Comrie（1985：60））

c. He looked like a man ***about to*** faint.

（『リーダーズ英和辞典 第 3 版』（s.v. ABOUT））

d. With drooping head like a prisoner ***about to*** receive his sentence.

（Jespersen（1933：336））

e. a petal ***about to*** fall　（『ジーニアス英和大辞典』（s.v. ABOUT））

(13) His face wore an expression close to ecstasy. He reminded me of a carnivorous raptor ***about to*** launch onto its prey.

（Haruki Murakami, *Killing Commendatore*）

本稿では，Wada（2019）の主張を踏襲しつつ，この分析を支持するさらなる統語的な証拠として，以下の 2 点を挙げる。

第1に，about to は単独で分詞構文内に生起することが可能である。

(14) a. It was dinnertime. People were with their families at the dinner table, ***about to*** enjoy a hot meal. I could sense that slight warmth in those lights. In contrast, on the other side of the valley, Menshiki, I, and the Commendatore were seated at that large table, ***about to*** begin an eccentric, formal dinner party.

(Haruki Murakami, *Killing Commendatore*)

b. Yet when I looked at Morrie, I wondered if I were in his shoes, ***about to*** die, and I had no family, no children, would the emptiness be unbearable? (Mitch Albom, *Tuesdays with Morrie*)

第2に，about to は単独で疑問文の返答に用いることが可能である。

(15) Ready for bed? — Just ***about to***.

(『リーダーズ英和辞典 第3版』(s.v. ABOUT))

以上の点に加え，本稿では，さらに，be going to の going to (gonna) と同様，be about to においても，about と to の間には統語的な隔たりは存在しないことを指摘しておく。(i) 次の (16) の例に見るように，動詞句削除において，to 不定詞の削除が不可能であること，(ii) about to には bouta という縮約形が存在すること (Cf. 渡辺 (2009：72)) がその証拠である。

(16) *He's keen to leave, but ***isn't about***. [Cf. He's keen to leave, but ***isn't able***.] (Westney (1995：20))

3. Be about to の意味的特徴

次の（17）の例や（18）の記述に見るように，be about to は，一般に，tomorrow や next week などの未来を表わす時の副詞語句とは共起しないとされる（Cf.『ウィズダム英和辞典 第4版』(s.v. ABOUT)；『ユースプログレッシブ英和辞典』(s.v. ABOUT）など）[4]。

（17）a. *It***'s about to** rain this afternoon.　（田中（2017[2]：216））

b. *Doc Brown ***is about to*** leave tomorrow.　（Wada（2000：388））

c. ?He ***is about to*** leave Japan tomorrow.　（安藤・山田編（1995：8））

d *He ***is about to*** leave the town next week.　（Watanabe（2010：354））

e. *Mana ***is about to*** play the *koto* next week.　（Wada（2000：388））

f. *The building ***is about to*** be pulled down next year.（Turton（1995：§6））

g. *We ***are about to*** carry out this project next year.

（木塚・Vardaman 編（1997：52））

4　小西（1976：291），小西編（1989：11），渡辺編（1976：355）などでは，be about to が tomorrow と共起した次の例が挙げられている。「追加表現」（afterthought）としての tomorrow である（コンマに注意）。

（ｉ）He ***is about to*** leave, tomorrow.　（小西（1976：291））

また，『ジーニアス英和辞典 第5版』（s.v. ABOUT）や中邑・山岡・柏野編（2017：89）などでは，例文の記載はないものの，be about to が now と共起可能であることが指摘されている（この点については，5～6節を参照）。

（ii）be about to は be going to よりも差し迫った未来を表し，通例未来を表す副詞（句）を伴わない。ただし，now とともに用いることは可能。

（『ジーニアス英和辞典 第5版』（s.v. ABOUT））

なお，*CAADE*[2]（s.v. ABOUT）は be about to と時の副詞語句の共起そのものを認めていないが，これは誤りである。後の議論に見るように，実際には，be about to が時の副詞語句と共起した例は数多く存在する。

（iii）*About to* is used to say that something is going to happen very soon without specifying exactly when. A time expression is not necessary and should be avoided: *The concert* ***is about to*** *start*. means that it is imminent; *The concert starts in five minutes*. tells us exactly when.　（*CAADE*[2]（s.v. ABOUT））

(18) be going to よりも差し迫った未来を表し，tomorrow，next week のような未来を表す副詞（句）とは通例，用いない。

（『ランダムハウス英和大辞典』（s.v. ABOUT））

事実，手元の用例（Haruki Murakami の長編小説 8 編[5]）を調べてみても，(be) about to と未来を表わす時の副詞語句が共起した例は202例中 2 例のみであった（just，now は除く）[6]。

一方，上の（17）の例を be going to に置き換えた（19）の例はすべて適格である。

(19) a. It***'s going to*** rain this afternoon. （田中（2017[2]：216））

b. Doc Brown ***is going to*** leave tomorrow. （Wada（2000：388））

c. He ***is going to*** leave Japan tomorrow. （安藤・山田編（1995：8））

d. He ***is going to*** leave the town next week. （Watanabe（2010：354））

e. Mana ***is going to*** play the *koto* next week. （Wada（2000：388））

f. The building ***is going to*** be pulled down next year. （Turton（1995：§6））

g. We ***are going to*** carry out this project next year.

（木塚・Vardaman 編（1997：52））

---

5 本稿の調査で使用した Haruki Murakami（村上春樹）の長編小説は以下の 8 編である（いずれも電子書籍）：(i) *Killing Commendatore*（『騎士団長殺し』）；(ii) *Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage*（『色彩を持たない田崎つくると，彼の巡礼の年』）；(iii) *1Q84*（『1Q84』）；(iv) *Kafka on the Shore*（『海辺のカフカ』）；(v) *The Wind-up Bird Chronicle*（『ねじまき鳥クロニクル』）；(vi) *Dance Dance Dance*（『ダンス・ダンス・ダンス』）；(vii) *Norwegian Wood*（『ノルウェイの森』）；(viii) *Hard-Boiled Wonderland and the End of the World*（『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』）

6 小西（1976：292）においても，次のようなデータが報告されている（さらに，渡辺編（1976：355f.）も参照）。

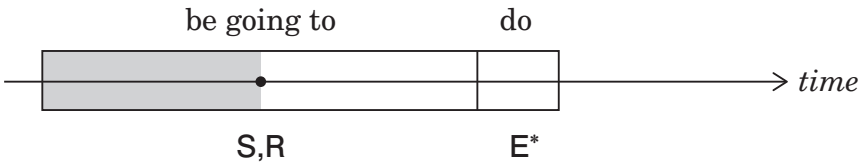
（ｉ）それはともかくとして，実際に，未来の一時点を示す副詞と共に用いられた例はきわめて少なく，たとえば，語法研究家忍甲一氏が報告されるところによると *The New Yorker* に1970年 6 月号から1971年 9 月号までの間に出た *be about to do* についてずばり副詞のつく例は 1 つも見当たらないということである。

同じ近接未来を表わす表現であるとされるにもかかわらず，be going to とは異なり，be about to が，一般には，tomorrow や next week などの未来を表わす時の副詞語句とは共起しないとされるのはなぜであろうか。

4. Be about to の時制構造と本質的意味

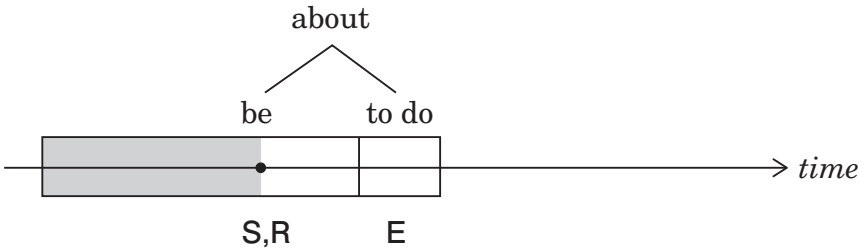
この問題を解決するために，be going to と be about to には，それぞれ，次のような時制構造と本質的意味が備わっているものと想定してみよう（S は発話時（point of Speech），R は基準時（point of Reference），E は出来事時（point of the Event）を指す（Cf. Reichenbach（1947：287ff.））。

(20) a. Be going to の時制構造（現在形）：



*E の時点は時の副詞語句や文脈によって，R（＝S）に近づくことも，R（＝S）から遠ざかることもある。

b. Be about to の時制構造（現在形）：



(21) a. Be going to の本質的意味：

Be going to は，現在の状況（過去形の場合は過去の状況）が基準時（R）において原形不定詞で表わされる未来の状況（E）に向かって進行中であることを表わす。

b. Be about to の本質的意味：

Be about to は，現在の状況（過去形の場合は過去の状況）が基準時（R）において原形不定詞で表わされる未来の状況（E）の周辺にあることを表わす[7]。

このような想定に基づくならば，be going to と be about to は，少なくとも次の２つの点で共通している。

第１に，be going to と be about to には，ともに，基準時以前の状況（＝前段階（意図・徴候））が認められる[8]。このことは，両表現が基準時以前の状況の存在を前提とする副詞である already と共起可能であるという事実によって証明される。

(22) She ***was*** already { ***going*** / ***about*** } ***to*** tell us.

（Huddleston and Pullum（2002：212））

第２に，be going to と be about to に後続する原形不定詞で表わされる状況は，ともに，不定詞の to によって，基準時よりも未来（右側）に位置づけられている。このことは，例えば，次の（23）の例において，両表現のパラフレーズに will が用いられていることからも明らかである。

7　柏野編（2010：360）は be about to に（ia）のような根源的意味と（ib）のような認識的意味の２つ意味を認めている。

（ｉ）a. I ***was about to*** leave when I remembered I'd left my wallet in my locker.

b. I think I***'m about to*** faint.

本稿では，これらの意味は，be about to の本質的意味に，主語が有生か無生か（[±animate]），原形不定詞で表わされる状況が自己制御可能な状況か否か（[±self-controllable]）といった要因が加わって導き出されるものであると考える。

8　「前段階」については，拙論（2014）や吉良（2018）などを参照されたい。

(23) a. [Look at those clouds!] There ***is going to*** be a storm in a minute.
(= *'There are signs in the present that there will be a storm soon.'*)
b. [Look at her!] She ***is about to*** faint. (= *'You can see now that she will faint in the very near future.'*)　(a-b: Declerck（2010：274）)

では，両者の相違点はどうであろうか。Bolinger（1977）の言う「かたちと意味の一対一の対応関係の原則」に従えば，両者の意味の違いは，(***be***) ***going*** と ***about*** の意味の違いに求められるはずである。

ここで注目すべきは，「移動」を表わす go の進行形から発達した be going to の場合には[9]，現在の状況が基準時において原形不定詞で表わされる未来の状況に向かって進行中（***be going***）であることが述べられているにすぎず，未来の状況の生起時は必ずしも近い未来に限定されないという点である。もちろん，未来の状況へとつながる現在の状況が進行中である以上，未来の状況が近い未来に生起する可能性は存在する。Be going to が「近接未来」を表わすとされるゆえんである。しかし，そこでの近接性は be going to の本質的意味およびその時制構造から語用論的にもたらされる含意であって，意味論的には「移動（進行）」は必ずしも「近接（immediacy）」を含意しない（例えば，He is going to New York.（彼はニューヨークへ向かっているところだ）という文は，彼がニューヨークのすぐそばまで来ていることを必ずしも含意しない）。事実，以下の（24）の例では，時の副詞表現によって，原形不定詞で表わされる未来の状況が遠い未来に生起することが明示されている。

(24) a. If Winterbottom's calculations are correct, this planet ***is going to*** burn itself out 200,000,000 years from now.［単純未来］
(Leech（2004[3]：60）)
b. What ***are*** you ***going to*** be when you grow up?［意志未来］
(江川（1991[3]：221）)

9　Be going to の文法化については，Hopper and Traugott（2003[2]）を参照されたい。

以上の考察からも分かるとおり，be going to の近接性はその本質的意味および時制構造から醸し出される「語用論的含意（implicature）」であって，「意味論的含意（implication）」ではない（Cf. Wada（2019：334））。ゆえに，be going to は近い未来の状況のみならず，遠い未来の状況にも言及することが可能である。

一方，be about to の場合はどうであろうか。ここでは，次の 2 つの言語事実に基づき，be about to の場合には，about によって時間的近接性（周辺性）が意味論的に含意されているものと想定してみたい。

第 1 に，「移動」を表わす go を含む be going to とは異なり，be about to には「周辺」を原義（基本義）とする about が含まれる。

(25) a. around とほぼ同様に「(…) の周辺に」（↓前 6，副 5）の意が原義で，「(…の) あちこちへ」（↓前 4，副 5），「…の近くに」（↓前 5）を経て，「およそ」（副 1），「…について」（↓前 1）の意や，**be about to** *do*（もうすぐ…する）といった成句で用いられるようになった。around より歴史的に古い語で，around より（(かたく)）響く。

（『ウィズダム英和辞典 第 4 版』（s.v. ABOUT））

b.【基本義：…の周りに。あるものの周辺に位置する】

…の近くに，…のあたりに【位置】（前❸ a））

- …について【関連】（前❶ a））
- およそ【概略】（前❷）
- …しようとしている（前成句 **be about to** do）

（『ジーニアス英和辞典 第 5 版』（s.v. ABOUT））

今，Perkins（1983：72）や Höche（2010：54）などに従って，be going to の going と同様，be about to においても，about が「空間的周辺性（近接性）」の意味から「時間的周辺性（近接性）」の意味へと拡張したと想定するならば，be about to に関して，(20b) の時制構造および (21b) の本質的意味が得られる。

第 2 に，about を含む be about to と about を含まない be to を比較すると，about を含む be about to にのみ，近接性の含意が認められる。例えば，Hewings（2013[3]：254）は次の（26a）と（26b）の例を比較して，about を含む（26b）は「Jonas Fischer 氏がすぐに辞職することを強調する」（‘***is about to*** resign’ emphasises that he will resign very soon）とコメントしている。

（26）a. Jonas Fischer has denied that he ***is to*** resign as marketing manager.

b. Jonas Fischer has denied that he ***is about to*** resign as marketing manager.

以上の 2 点は，be going to とは異なり，be about to の場合には，about によって時間的近接性が意味論的に含意されていることを示すものである。

以上の点を踏まえると，be about to が，一般には，tomorrow や next week などの未来を表わす時の副詞語句とは共起しないとされる理由も自ずと説明される。すなわち，それは，be going to とは異なり，be about to の場合には，about によって時間的近接性が意味論的に含意されており，原形不定詞で表わされる未来の状況が基準時から近い未来に生起することが示されるためと説明される。

なお，冒頭で示した次の例において，be going to の容認度が低いのは，be about to とは異なり，be going to の場合には，原形不定詞で表わされる未来の状況が近い未来に生起する可能性と遠い未来に生起する可能性の 2 つの可能性を秘めているためである。これからすぐにコーヒーを飲む人への注意喚起であれば，後者の可能性は不要である。

（27）Message printed on hot beverage cup sleeves:

Caution: The beverage you { ***are about to*** / ?***are going to*** } enjoy is extremely hot.［＝（1）］

5. さらなる問題

前節までの考察で，be about to が，一般には，未来を表わす時の副詞語句とは共起しないとされる理由が首尾よく説明された。しかし，ことはそれほど単純ではない。なぜなら，以下の（28）～（32）の例に見るように，be about to が未来を表わす時の副詞語句と共起している例が散見されるからである。

(28) a. The water for the spaghetti ***was*** just ***about to*** boil when the telephone rang. (Haruki Murakami, *Dance Dance Dance*)

b. "I'm glad you called," he said. "I ***was*** just ***about to*** call you…." (Haruki Murakami, *Killing Commendatore*)

(29) a. "What I***'m about to*** do now involves a good deal of pain," Aomame said in a voice without inflection. (Haruki Murakami, *1Q84*)

b. "That is the problem which we ***are*** now ***about to*** solve," said Sherlock Holmes. (荒木編（1984：240))

(30) Since he was a child, he had had this big, ugly face, with a misshapen head. His thick lips sagged at the corners and looked as if they ***were about to*** drool at any moment, though they never actually did. (Haruki Murakami, *1Q84*)

(31) a. By the way, that debate, the first one ***is about to*** start in 15 seconds. Don't — don't miss that one. (COCA, spoken, 2016)[10]

b. "I ***am about to*** leave for the station in five minutes, so please explain what you want, quickly." (小西（1976：291))

(32) a. "I ***am about to*** leave for America tomorrow, so I am afraid I cannot see you next week."

10 柏野健次先生提供（2018年12月20日）。

b. “We ***are about to*** leave town next week, so we are very busy packing.”　（a-b: 小西（1976：291））

これらの言語現象をどのように説明すべきか。

6. About の周辺性と相対的・心理的近接性

はじめに，(28)～(31) の例のように，be about to が近い未来を表わす時の副詞語句と共起した例について考えてみよう。先に述べたように，be about to の場合には，about によって時間的近接性が意味論的に含意されている。すると，これらの例のように，be about to にわざわざ now（=“immediately”（Cf. *CALD*[9]（s.v. NOW））や just（=“very soon”（Cf. Quirk et al.（1985：217））などの近い未来を表わす時の副詞語句を付加することは，冗長的（redundant）であるように思われる。では，これらの例では，なぜ，be about to に近い未来を表わす時の副詞語句が付加されているのであろうか。

ここで注意すべきは，be about to の場合には，about によって時間的近接性が意味論的に含意されているとは言うものの，原形不定詞で表わされる未来の状況の生起時については，正確には示されていないという点である。これは，about という語の性質（=周辺性）による。例えば，以下の例を見てみよう。ここでは，about によって「場所的・時間的周辺性」が表わされているが，正確な場所や時間は示されていない。

(33) a. somewhere ***about*** here この辺のどこかに［で］
b. arrive ***about*** midday 正午頃到着する
c. I had breakfast (at) ***about*** 9:00. 9時頃食事をとった
d. He looked ***about*** casually. 彼は何気なくまわりを見た.
（a-d:『ウィズダム英和辞典 第4版』（s.v. ABOUT））

したがって，be about to に近い未来を表わす時の副詞語句が付加されているとすれば，それは，about が表わす近接性を強調したり（Cf.（28）～（30）），原形不定詞で表わされる未来の状況の生起時をより正確に示したりするため（Cf.（31））である。それによって，聞き手（読み手）に対して，be about to のもつ時間的曖昧性を解消することができるからである。特に，（31）のような例においては，“don't miss that one.” や “so please explain what you want, quickly.” などの表現からも察せられるとおり，時間的な情報が重要な役割を果たしている。反対に，時間的近接性に関して曖昧性のない次の（34）のような例には，未来を表わす時の副詞語句を付加する必要はないであろう。

（34）Careful, the beverage you ***are about to*** enjoy is extremely hot.

（Starbucks Coffee のコーヒーカップの注意書き）

次に，（32）の例のように，be about to が遠い未来を表わす時の副詞語句と共起した例について考えてみよう。ここでは，次の（35）の例のように，時の副詞語句とは共起していないものの，be about to が遠い未来の状況に言及している例とあわせて考えてみたい。

（35）I'***m about to*** become a father.

be about to と似た表現に be going to があるが，前者は後者よりも差し迫った事柄について用いられる。例えば，I'***m about to*** become a father. と言えば２，３週間後のことを指すが，I'***m going to*** become a father. と言えば半年後くらいのことを指す。be about to は通例，「まさに…しようとしている」と訳されるが，この例に見られるように必ずしも数分後の事柄を指すわけではないことに注意したい。（柏野編（2010：360））

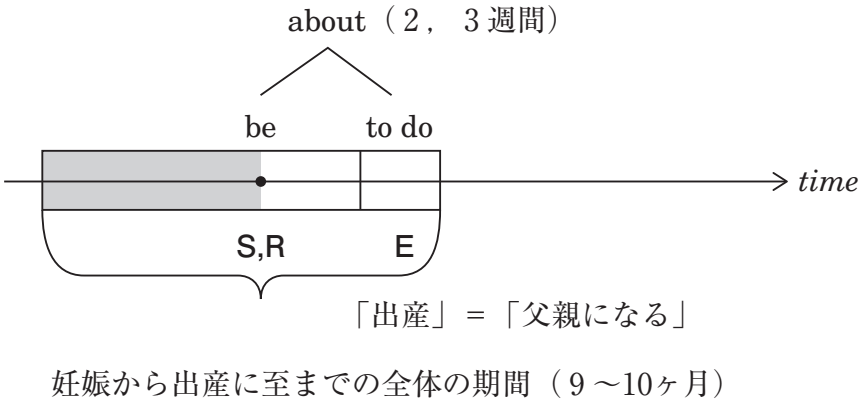
先に述べたように，be about to の場合には，about によって時間的近接性が意味論的に含意されている。すると，これらの例のように，be about to が

遠い未来の状況に言及することは，be about to の時制構造およびその本質的意味とは矛盾するように思われる。では，これらの例では，なぜ，be about to が遠い未来の状況に言及しているのであろうか。

本稿では，この問題に対して，(i) 相対的近接性および (ii) 心理的近接性という観点から，その謎を解き明かしてみたい。

はじめに，(35) の例について考えてみよう。結論的に言えば，ここでの be about to が２，３週間後の（比較的）遠い未来の状況に言及することができるのは，絶対的な時間としての「２，３週間後」は遠い未来であっても，妊娠から出産に至るまでの期間全体（およそ９～10ヶ月間）から相対的に眺めれば，基準時（＝発話時）から２，３週間後の状況も近い未来の状況と捉えられるためである（Cf. Yamamoto（2010：78）；Wada（2019：336））。

(36)



次の『ジーニアス英和辞典 第５版』(s.v. ABOUT) の記述についても，同様の説明が可能である。ここでも，結婚に至るまでに要する期間全体（数ヶ月，数年）から相対的に眺めれば，基準時（＝発話時）から少し離れた未来の結婚も近い未来の状況と捉えられるからである。

(37) be going to が遠い未来を表す場合があるのと同じように be about to も少し離れた未来を表すことがある：Bill ***is about to*** get married to his current girlfriend. ビルは今の恋人ともうすぐ結婚する（cf. What ***are*** you

going to be when you grow up? 大きくなったら何になるつもりなの？)。

ところで，(32) や (35) の例には，「相対的近接性」に加え，「心理的近接性」も関係しているように思われる。「心理的近接性」とは，物理的な時間的近接性とは異なり，話し手（書き手）の精神状態（興奮や不安）などにより，未来の状況が差し迫っていると感じることを指して言う。あるインフォーマントは，(35) の例について，次のようにコメントをしているが，このことも「心理的近接性」の存在を裏づけるものである。

(38) I think the context, becoming a father, is both a big, life changing (as you know) event and condition — one that occupies the mind of a father-to-be, thus making the future seem always imminent, always present in his worried mind….

(32) の各例についても，この「心理的近接性」の観点から説明が可能である。「アメリカへ旅立つこと」「街を去ること」自体は遠い未来の状況であっても，話し手にとっては，忙しさからその状況が差し迫っているように感じられていることが看取されるからである（Cf. Wada（2000：407））。

以上の考察から，一般には遠い未来と考えられる未来の状況であっても，相対的な時間の長さや心理的な切迫感によって，その状況が近い未来に生起すると捉えられる場合には，be about to が用いられることがあると結論づけることができる。

7. おわりに

以上，本稿では，従来，周辺的な未来表現とみなされてきた be about to について，適宜，be going to との比較・対照を織り交ぜながら，その意味的特徴を考察してきた。統語的特徴も含めると，本稿での考察は以下のようにまとめられる。

(39) Be about to の統語的特徴：

ⅰ. Be about to の主語として生起する名詞句の種類に関して，統語上の制約は存在しない。

ⅱ. Be about to は be + about to という複数の要素からなる複合的な表現である。

(40) Be about to の意味的特徴：

ⅰ. Be about to は，現在の状況（過去形の場合は過去の状況）が基準時（R）において原形不定詞で表わされる未来の状況（E）の周辺にあることを表わす。

ⅱ. この周辺性（近接性）は，about によってもたらされる意味論的含意である。したがって，be about to は，ふつう，tomorrow や next week などの未来を表わす時の副詞語句とは共起しない。

ⅲ. ただし，about が表わす近接性を強調したり，原形不定詞で表わされる未来の状況の生起時をより正確に示したりするために，近い未来を表わす時の副詞語句が付加されることがある。

ⅳ. また，一般には遠い未来と考えられる未来の状況であっても，相対的な時間の長さや心理的な切迫感によって，その状況が近い未来に生起すると捉えられる場合には，be about to が用いられることがある。

残された課題としては，be about to の典型的な使用場面とそこで生じる語用論的意味を明らかにすることが挙げられる。以下の（41）の例に見るように，be about to には，「注意喚起」（Cf.（41a））や，「誘いの前置き」（Cf.（41b）），「依頼の断りの理由」（Cf.（41c）），「言い訳」（Cf.（41d））など，様々な語用論的意味が認められるからである。

(41) a. Keep your seat belts fastened, everyone — we***'re about to*** land.
（Leech（2004[3]：70））

b. We***'re*** just ***about to*** go and have something to eat. Would you like to join us?
（Carter and McCarthy（2006：671））

c. A: Can you type this letter for me?

B: Sorry, I'***m*** just ***about to*** go home. It'll have to wait until tomorrow. (Hewings (2013[3] : 25))

d. A: Why don't you switch it off and turn it back on again?

B: Yes, I ***was about to*** try that when you came in. (Hewings (2013[3] : 24))

これらの問題については，今後の検討課題とし，その詳細については，稿を改めることにしたい。

引用文献

安藤貞雄 . 2005.『現代英文法講義』東京 : 開拓社 .

安藤貞雄・山田政美編著 . 1995.『研究社 現代英米語用法事典』東京 : 研究社 .

荒木一雄編 . 1984.『英文法用例辞典』東京 : 研究社出版 .

荒木一雄編 . 1986.『英語正誤辞典』東京 : 研究社出版 .

Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.

Carter, R. and M. McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Close, R. A. 1975. *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.

Comrie, B. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.

Declerck, R. 2010. "Future time reference expressed by *be to* in Present-day English," *English Language and Linguistics*, 14.2, 271-291.

江川泰一郎 . 1991[3].『英文法解説―改訂三版―』東京 : 金子書房 .

Heaton, J. B. and N. D. Turton. 1987. *Longman Dictionary of Common Errors*. London: Longman.

Hewings, M. 2013[3]. *Advanced Grammar in Use*. Cambridge: Cambridge University Press.

Höche, S. 2010. "What about *be about*? Walking the tightrope between tense and aspect", *Rice Working Papers in Linguistics*, 2, 52-74.

Hopper, P. J. and E. C. Traugott. 2003[2]. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

石橋幸太郎編 . 1966.『英語語法大事典』東京 : 大修館書店 .
Jespersen, O. 1933. *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.
柏野健次編著 . 2010.『英語語法レファレンス』東京 : 三省堂 .
木塚晴夫・J. Vardman 編 . 1997.『日本人学習者のための米語正誤チェック辞典』Macmillan: Macmillan Language House.
吉良文孝 . 2018.『ことばを彩る 1 テンス・アスペクト』（〈シリーズ〉英文法を解き明かす―現代英語の文法と語法⑤）東京 : 研究社 .
小西友七 . 1976.『英語シノニムの語法』東京 : 研究社出版 .
小西友七編 . 1989.『英語基本形容詞・副詞辞典』東京 : 研究社出版.
Leech, G. 2004[3]. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
Long, R. B. and D. R. Long. 1971. *The System of English Grammar*. Illinois: Scott, Foresman.
中邑光男・山岡憲史・柏野健次編 . 2017.『ジーニアス総合英語』東京 : 大修館書店 .
Perkins, M. R. 1983. *Modal Expressions in English*. New Jersey: Ablex.
Poutsma, H. 1926. *A Grammar of Late Modern English*: *Part II The Parts of Speech, Section II The Verb and the Particles*. Groningen: P. Noordhoff.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
Reichenbach, H. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. New York: The Free Press.
佐藤健児 . 2014.「進行形の「前段階」性について」日本大学英文学会編『英文学論叢』第62巻 , 99-119.
Strauss, S., P. Feiz and X. Xiang. 2018. *Grammar, Meaning, and Concepts*: *A Discourse-Based Approach to English Grammar*. New York: Routledge.
鈴木英一・安井泉 . 1994.『動詞』（現代の英文法第 8 巻）東京 : 研究社 .
田中茂範 . 2017[2].『表現英文法 増補改訂第 2 版』東京 : コスモピア .
Turton, N. D. 1995. *ABC of Common Grammatical Errors*. London: Macmillan Education.
Wada, N. 2000. "*Be Going To* and *Be About To*: Just Because Doc Brown Was Going To Take Us Back To The Future Does Not Mean That He Was About To Do So," *English Linguistics*, 17.2, 386-416.
Wada, N. 2019. *The Grammar of Future Expressions in English*. Tokyo: Kaitakusha.
渡辺登士編 . 1976.『続・英語語法大事典』東京 : 大修館書店 .
渡辺拓人 . 2009.「*Be about to* の文法化と *go about to* の衰退について」大阪大学大学院言語文化研究科編『言語文化共同研究プロジェクト2008: 言語の歴史的変化と認知の枠組み』69-78.
Watanabe, T. 2010. "Development and Grammaticalization of *Be About To*: An Analysis of *the OED* Quotations," in Imahayashi, O., Y. Nakao. and M. Ogura (eds.) *Aspects of the History of English Language and Literature*: *Selected Papers Read at SHELL 2009, Hiroshima*. Peter Lang.

Westney, P. 1995. *Modals and Periphrastics in English*. Tübingen: Niemeyer.
Yamamoto, G. 2010. “Be about to in English Movies,” 映画英語教育学会編『映画英語教育研究』第15号 , 75-85.

英和・英英辞典

井上永幸・赤野一郎編 . 2019.『ウィズダム英和辞典 第 4 版』東京 : 三省堂 .
小西友七・南出康世編 . 2001.『ジーニアス英和大辞典』東京 : 大修館書店 .
小西友七・安井稔・國廣哲彌・堀内克明編 . 1993.『ランダムハウス英和大辞典 第 2 版』東京 : 小学館 .
高橋作太郎編 . 2012.『リーダーズ英和辞典 第 3 版』東京 : 研究社 .
南出康世編 . 2014.『ジーニアス英和辞典 第 5 版』東京 : 大修館書店 .
八木克正編 . 2004.『ユースプログレッシブ英和辞典』東京 : 小学館 .
Collins COBUILD Advanced Learner’s Dictionary 9th Edition. Glasgow: HarperCollins.［*CALD*[9]］
Collins COBUILD Advanced American English Dictionary 2nd Edition. Glasgow: HarperCollins.［*CAAED*[2]］
Oxford Advanced Learner’s Dictionary 10th Edition. Oxford: Oxford University Press.［*OALD*[10]］

小説

Albom, Mitch. 1997. *Tuesdays with Morrie*. New York: Broadway Books.
Murakami, Haruki. 2019. *Killing Commendatore*. Translated by Philip Gabriel and Ted Goossen. New York: Vintage International.
Murakami Haruki. 2017. *Yesterday*, in *Men Without Women*. Translated by Philip Gabriel and Theodore Goossen. New York: Vintage international.
Murakami, Haruki. 2014. *Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage*. Translated by Philip Gabriel. New York: Alfred A. Knopf.
Murakami, Haruki. 2011. *1Q84*. Translated by Jay Rubin and Philip Gabriel. New York: Alfred A. Knopf.
Murakami, Haruki. 2005. *Kafka on the Shore*. Translated by Philip Gabriel. New York: Alfred A. Knopf.
Murakami, Haruki. 2000. *Norwegian Wood*. Translated by Jay Rubin. New York: Vintage International.
Murakami, Haruki. 1998. *The Wind-up Bird Chronicle*. Translated by Jay Rubin. New York: Vintage International.
Murakami, Haruki. 1995. *Dance Dance Dance*. Translated by Alfred Birnbaum. New York: Vintage International.

Murakami, Haruki. 1993. *Hard-Boiled Wonderland and the End of the World*. Translated by Alfred Birnbaum. New York: Vintage International.

Semantic and textual characteristics of the colligational framework *the N1 of the N2* in argumentative essays by L1 speakers of English and Japanese

Joe Geluso

Abstract・はじめに

Discontinuous formulaic language refers to recurrent sequences of words with one or more variable slots. Examples include *on the * hand* and *the * of the ** where the asterisks represent variable slots. These sequences of words have also been called "frameworks." Previous research has suggested that frameworks, despite their variability, may attract internal constituents that are semantically similar. The present study uses corpus and computational approaches to achieve the goal of better understanding the semantic characteristics of the recurrent framework *the N1 of the N2* where N1 and N2 represent nouns occupying the variable slots in an otherwise fixed sequence. A corpus of English argumentative essays representing first language (L1) speakers of English and Japanese was used to compare how the two groups make use of the framework. Specifically, the group of N1s used by each L1 group was compared using network analysis to better understand the semantic groupings and relationship between the N1s. A second goal was to analyze the framework's role in contributing to the texture (i.e., cohesion and coherence) of a text. Findings suggest that the set of N1s used by the L1 English authors are more semantically interrelated

and qualitatively different from the set of N1s used by the L1 Japanese authors. The L1 English authors more frequently use abstract N1s compared to the L1 Japanese authors who more frequently use concrete N1s. The two groups also differ in how they use the framework to contribute to the texture of a text: the L1 Japanese authors use more direct repetition of the N2 throughout their essays than the L1 English authors. Pedagogical implications include more explicit teaching of the framework, including the nature of the nouns that fill the variable slots, and the textual functions that the framework typically serves.

1. Introduction

Phraseology, or the patterning of language, permeates language at all levels: from the pairing of individual words to patterns across an entire text. Firth's (1957) widely-cited statement "You shall know a word by the company it keeps" (p. 11) is motivated by the role collocation, or words that co-occur more frequently than chance would predict, plays in the meaning of a particular word. Firth famously exemplified collocation with the example of *powerful* and *strong*, where the former co-occurs more frequently with *car* and the latter with *tea*. Since Firth's seminal work, much research has been done on the patterning of language. Sinclair (1991), for instance, proposed the "principle of idiom" or that semi-preconstructed phrases are as readily available in the mind of a speaker as individual words, and comprise much of the language that speakers regularly use.

Much work on formulaic language has been done under the umbrella of "lexical bundles." The term "lexical bundle" first appeared in Biber et al. (1999) and was defined as "recurrent expressions, regardless of the idiomaticity, and regardless of their structural status" (p. 990). Examples of

frequent 4-word lexical bundles in academic registers are *as a result of* and *the nature of the*. Studies on lexical bundles have often aimed to elucidate the types of discourse functions bundles fulfill within different text types. For example, numerous studies have examined how bundles express stance (e.g., *it is important to*), are used as discourse organizers (e.g., *on the other hand*), or fulfill referential functions (e.g., *the nature of the*) (Biber et al., 2004). While lexical bundles focus on *continuous* sequences of words, other types of formulaic language represent *discontinuous* sequences of words, or words with a variable slot (Eeg-Oloffson & Altenberg, 1994; Renouf & Sinclair, 1991).

To describe discontinuous formulaic language, Renouf and Sinclair (1991) used the term "collocational framework" and defined it as a "discontinuous sequence of two words, positioned at one word remove[sic] from each other" (p. 128). Renouf and Sinclair, using spoken and written sub-corpora from the Birmingham Collection of English Text, focused on frameworks made up of grammatical words, such as *a * of* and *for * of*, where the asterisk represents a variable slot. They found that frameworks were more frequent in written than spoken texts, and claimed that "[c]o-occurrences in the language most commonly occur among grammatical words" (p. 128). The framework *the * of the* in particular has consistently been found to be the most frequent frame in both written and spoken registers (Biber, 2009; Garner, 2016; Gray & Biber, 2015; Hasselgård, 2019; Römer, 2010). This framework is of interest given its high frequency and inclusion of a noun phrase and an *of*-phrase: two features that have been found to be extremely common in academic writing given their high information density properties (Biber & Gray, 2016; Hyland, 2008).

1.1. Frameworks and semantics

Not only are frameworks comprised of grammatical words frequent, researchers have observed that such frameworks exhibit a tendency to enclose words that feature similar semantic characteristics (Marco, 2000; Renouf & Sinclair, 1991; Eeg-Olofsson & Altenberg, 1994). For instance, Eeg-Olofsson and Altenberg (1994) explained that abstract nouns such as *trouble, problem, question,* and *situation* were likely to fill the frame *the * is*. Marco (2000) argued that the framework *a * of* often attracts collocates that express quantity or measure such as *number, percentage,* etc. and nominalizations that can be quantified such as *an accuracy of 55%* or *a specificity of 90%*.

The idea of semantically similar fillers in frameworks is also investigated in the present paper with respect to the recurrent framework *the * of the **. Hasselgård (2016 & 2019) investigated this framework using the nomenclature *the N1 of the N2* where N1 and N2 stand for "Noun 1" and "Noun 2," respectively. For example, *the end of the war* and *the rejection of the possibility* are realizations of the framework *the N1 of the N2*. Hasselgård (2019) called this sequence a "colligational framework" as an adaption of Renouf and Sinclair's (1991) "collocational framework." Hasselgård (2019) observed that while collocation involves the co-occurrence of words, colligation involves the co-occurrence of words and specific grammatical patterns. In the framework *the N1 of the N2*, the lexical items are attracted to the grammatical categories of the noun and *of*-phrases that are inherent to the framework. Hasselgård (2019) specifically focused on the semantic relationship between the N1 and N2 in English academic writing by L1 (first language) speakers of English compared to L1 speakers of Norwegian. The present study also investigates the semantic profiles of the fillers, but focusses more heavily on the

semantic similarity of the N1s in relation to each other in argumentative essays by L1 speakers of English and Japanese. In addition to analyzing the semantic similarity of fillers within the framework, the framework in its entirety is analyzed for its overall role in creating texture, or cohesion and coherence throughout a text.

1.2. Frameworks and texture

Formulaic language plays a role in the construction of discourse, and hence has a role in the creation of texture in a text (Biber et al., 2004; Gray & Biber, 2015; Nesi & Basturkmen, 2006). To further explore this idea, the term "texture" must be defined and operationalized.

Halliday and Hasan (1976) proposed that an individual text is best regarded as a semantic unit and that "a text has texture… it derives this texture from the fact that it functions as a unity with respect to its environment" (p. 2). According to Halliday and Hasan, texture is created by cohesive relations within a text, with different resources functioning to create texture (p. 2). Hoey (1991) argued that "lexical cohesion is the dominant mode of creating texture… and the study of cohesion in text is to a considerable degree the study of patterns of lexis in text" (p. 10). The following paragraphs will describe three textual resources to which patterned language contributes in order to create texture in a text: information structure, connectives, and reiteration.

Halliday and Hasan (1976) explained that each information unit is structured in terms of two elements, a New element and a Given element (p. 326). While the Given element is optional, the New element is mandatory as without it there would be no information unit. Given information is that which the speaker or author presents as recoverable or accessible to the listener or reader via shared knowledge available either by previous

mention in the text or from outside the text. Halliday and Matthiessen (2014) proposed that while an "information unit does not correspond exactly to any other unit in grammar," it is nearest to the clause (p. 115). The preferred patterning in English is to present Given information first followed by New information, we can therefore hypothesize that the unmarked information status of a clause will be Given information followed by New information (Mahlberg, 2003, p. 104).

Mahlberg (2003) argued that lexical and phraseological patterns can also function to structure Given and New information. Mahlberg discussed general nouns, or nouns that capture a general meaning (e.g., *thing, man, fact, way*), positioning them as a device that can serve to introduce new information as they act as "a kind of hook onto which all the other information can be put" (p. 101). Mahlberg (2003) provided numerous examples:

1. … there's George Hamilton. *The man with chicken tikka complexion* pitches up in London this Saturday…
2. … what we got in America. *The thing is*, more of us are out of the…

In Example 1, *man* is the general noun that refers back to George Hamilton. Mahlberg explained that the general noun in this instance is used to add information in passing (p. 103). In Example 2, Mahlberg pointed out that the general noun *thing* provides "a kind of introduction or focusing device" to encapsulate Given information before introducing New information (p. 104). The larger phrases that the general nouns from Examples 1 and 2 are subsumed within, reflect the structure of frameworks: in Example 1, *the * with ** and in Example 2, *the * is.* The recurrent framework *the N1 of the N2* often houses general nouns, e.g., *the fact of the matter,* where general nouns and the frame combine to form a

lexical bundle that can act as a focusing device and hook off which to present new information. Sinclair (1991) also made the observation that in *of*-nominal groups the first noun will serve to highlight a specialized part, component, aspect, or attribute of the second noun (pp. 87-90). Examples include, *the first week of the war,* and *the blistering heat of the prairie.*

The next textual resource we will consider is that of connective. Quirk et al. (1985) explain that a "relation between parts of a text is achieved by connective features" (p. 1,437). Connectives often take the form of what Halliday and Hasan (1976) called "cohesive conjunctions" and Biber et al. (1999) called "linking adverbials." The two terms refer to cohesive devices that work to relate what follows the connective to the preceding text. Biber et al. (1999, pp. 875-879) provided a useful taxonomy for linking adverbials, dividing them into six meaning groups: (1) enumeration and addition (e.g., *for one thing, for another*), (2) summation (e.g., *in sum*), (3) apposition (e.g., *that is to say, for instance*), (4) result/inference (e.g., *as a result*), (5) contrast/concession (e.g., *on the other hand*), and (6) transition (e.g., *incidentally, by the way*). These meaning groups can help to pinpoint the textual function of connectives.

Reiteration is the last form of texture to be considered and has perhaps the clearest connection to simple lexis. Halliday and Hasan (1976) defined reiteration as one lexical item referring back to another (p. 278). These references could be the repetition of a word or related words, such as synonyms, hypernyms, or meronyms, throughout a text (see section 2.3). This reference of lexis creates a "lexical chain" that traverses a text, contributing to cohesion (see Figures 5 & 6, section 3.2.3, for visualizations of lexical chains).

1.3. Goals of the present study

The goal of the present study is to examine the use and role of the high frequency colligational framework *the N1 of the N2* in English argumentative essays authored by L1 speakers of English and Japanese. As developed throughout the introduction of this paper, the target framework is investigated with the following characteristics in mind: (1) semantic similarity of fillers in the first variable slot, and (2) the framework's role in creating texture via information structure, connectives, and reiteration. Specific research questions are:

1. How do the semantic characteristics of the fillers in the N1 position of the framework compare as used by L1 English and L1 Japanese authors of English argumentative essays?
2. What role does the target framework play in creating texture in English argumentative essays by L1 English and L1 Japanese authors?

2. Methodology

2.1. Corpus

The data used for this study were drawn from the written portion of the International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE) (Ishikawa, 2013). The ICNALE corpus consists of argumentative essays in response to two prompts:

Do you agree or disagree with the following statements? Use reasons and specific details to support your answer.

- Part-time job: It is important for college students to have a part-time job.
- Smoking ban: Smoking should be completely banned at all the restaurants in the country.

These prompts were answered by groups of English language learners representing 10 different countries, as well as by L1 speakers of English from the United States, the United Kingdom, Australia, and New Zealand. The data used in the present study consisted of the 400 essays written by L1 speakers of English to make the ENS sub-corpus and a random sample of 400 essays from the 800 essays written by Japanese learners of English. Sub-corpora of equal sizes were desired for comparability. Word counts for the sub-corpora were generated via a custom script in the Python programming language and included words with apostrophes and hyphenated words as one word (e.g, *don't*; *part-time*) and also counted digits (e.g., 7). All statistical analyses were also carried out in the Python ecosystem using common data science packages (e.g., Pandas, NumPy, SciPy). Table 1 shows that the starting point for the data between the sub-corpora are similar in terms of overall raw word count and average length of .txt files. Type-token ratio, a measure of lexical diversity that divides the number of distinct word types by the total number of words (i.e., tokens), is also reported. A Welch's *t*-test revealed that mean type-token ratios of texts between L1 groups was significantly different at $p < .001$, with a large effect size $d = 1.48$. This indicates that the L1 English authors used a

Table 1. Overview of ENS and JPN sub-corpora used in the present study

	Sub-corpora	
	ENS	JPN
Word count	89,067	87,540
Number of texts	400	400
Mean Type Token Ratio	0.565 (0.05)*	0.492 (0.05)*
Mean text length	222.67 (23.85)*	218.85 (23.88)*

*Standard Deviation

broader array of vocabulary than the L1 Japanese.

2.2. Data extraction and storage

Following Eeg-Olofsson and Altenberg (1994), the present paper will consider instances of frameworks with one or two consecutive variable slots. Therefore, the target framework for the present study, *the N1 of the N2,* can include instances of modifiers preceding the nouns as well. In the event that the framework had modifiers preceding the main nouns, only the main noun was considered in the semantic analysis. The framework was extracted from the sub-corpora with a custom Python script that captured instances of one and two words in each variable slot. Frameworks were only included if they did not cross punctuation boundaries such as periods and commas. The extracted frameworks were stored in a SQLite database.

2.3. Semantic similarity of N1s

The semantic similarity of the N1s produced by the L1 English and Japanese writers was calculated using the WordNet lexical database (Miller, 2010). WordNet groups words into sets of synonyms called "synsets." The main relations that link words in synsets are hierarchical relations of synonymy, hypernymy, and meronymy. While the concept of synonymy is familiar to general audiences, hypernymy and meronymy might warrant further explanation. Hypernymy refers to relations between hypernyms and hyponyms, or superordinates and subordinates, respectively. An example of hypernymy is the word *car* in relation to *motor vehicle,* where *motor vehicle* is a hypernym of *car.* Hypernymy can be conceptualized as "isa" relationships as in a *car* ***isa*** *motor vehicle* (Hudson, 2007). Meanwhile, relations of meronymy are whole/part relations where the *whole* is the holonym and the *part* is the meronym. For example, if we talk about a

bumper as part of a *car*, the *bumper* is the part, or meronym, and the *car* is the whole or holonym. Relations of synonymy, hypernymy, and meronymy are depicted in Figure 1.

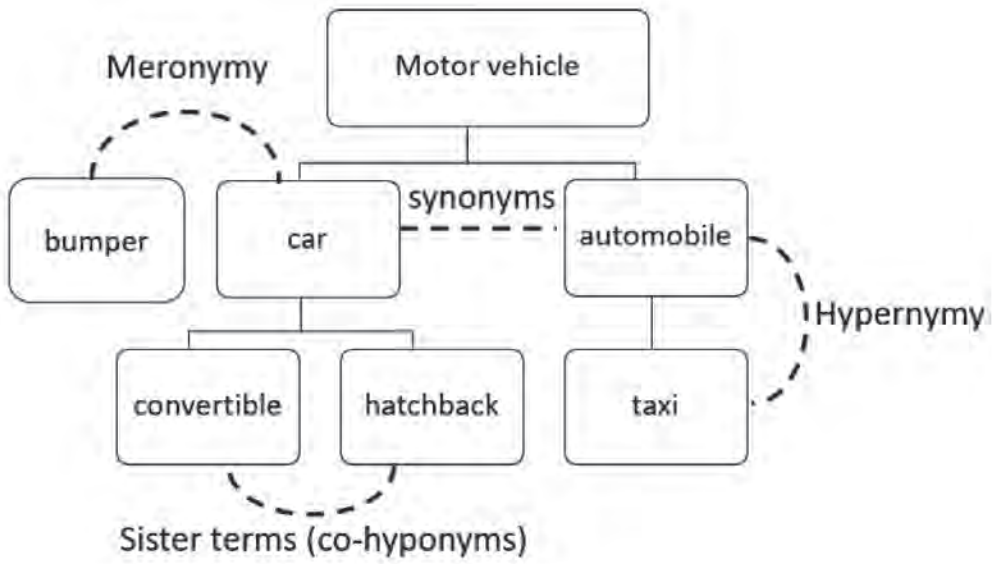


Figure 1. Schematic of semantic relations between words in WordNet

The basis of most measures of semantic similarity in WordNet is the distance between two words via connections of hypernymy, meronymy, or synonymy. For example, using Figure 1 as a reference, *hatchback* is only one hypernymic connection from *car,* but two from *motor vehicle.* Therefore, the similarity score between *hatchback* and *car* will be higher than that between *hatchback* and *motor vehicle.* Sun, Huang, and Liu (2011) provide an informative account of different WordNet-based measures of semantic similarity. They recommend the Wu-Palmer method as they feel it best aligns with human intuition (p. 123). Wu-Palmer scores of similarity range between 0 and 1 with the former indicating no semantic relation and the latter indicating synonymy. Figure 2 provides an example of Wu-Palmer scores and the lexical relation between the words that would give rise to

those scores. Note that the scores in Figure 2 will not apply to all words sharing the same relations in WordNet. That is, not all instances of direct hypernymy will have a Wu-Palmer score of .96 as seen in Figure 2. The reason is that scores are contingent on the number of layers in a hierarchy of words: the more layers, the smaller the decrease in scores between direct hypernyms.

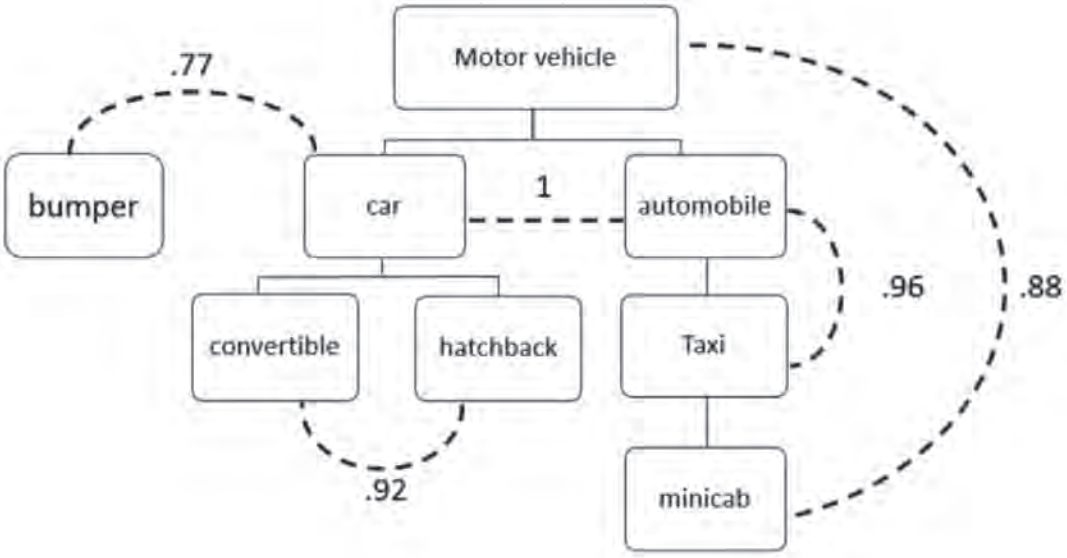


Figure 2. Example of semantic similarity scores between words in WordNet using Wu-Palmer

WordNet also disambiguates words for sense. For instance, the word *car* has five senses in WordNet. Sense 1 refers to the typical automobile most people might imagine when they hear the word *car*. Other senses include an *elevator car* and *cable car*. For this study, the author and a collaborator checked the sense of each N1 from the extracted frames and verified senses that were present in the corpus. Any disagreements were discussed and a final decision was negotiated. Therefore, similarity measures were only run between senses of words that were verified to be in

the corpus.

The calculation of Wu-Palmer similarity scores were automated in a Python script using the Natural Language Toolkit (NLTK) (Bird, Loper, & Klein, 2009). NLTK is a Python library for natural language processing. The comparison between two words with multiple senses that gave the highest Wu-Palmer score was kept to represent the relationship between the words. So, for example, two senses of the word *whole* appear in the N1 position of the target frame in the ENS sub-corpus and one sense of the word *middle*. Therefore, both senses of the word *whole* were compared with the one sense of the word *middle.* The resultant Wu-Palmer scores were 0.55 and 0.13, so only the higher score was kept to represent the semantic relationship between *whole* and *middle*. Once relationships between each N1 in the ENS sub-corpus and each N1 in the JPN sub-corpus were established, a basic network analysis was conducted to visualize the semantic relationship between the N1s using the network analysis package NetworkX for Python (Hagberg, Schult, & Swart, 2008).

2.4. The role of the frame in creating texture

The second analysis focuses on the framework's role in texture for each text. In particular, the three resources outlined in section 1.2 for creating texture are examined: (1) information structure, (2) connectives, and (3) reiteration. Only texts that contained an instance of the target feature were used: 71 and 45 files for the ENS and JPN sub-corpora, respectively. Given the manageable number of files, each file was manually inspected for the frame's role in creating texture. In order to count the types of cohesive ties, each frame was coded as carrying out a "primary function." If a frame clearly functioned to introduce new information and connect it back to Given information, it was counted as information structure. If the frame

clearly resided within a connective, such as a linking adverbial, it was counted as a connective.

Reiteration was operationalized in terms of repetition of a word lemma or a word related through synonymy, hypernymy, meronymy, or collocation. For repetition, Hoey's (1991) idea of complex repetition was adopted, meaning that derivational forms regardless of part of speech were considered repetition. For instance, *smoking, smoker,* and *smokes* were all considered repetition of the word *smoke*. Synonyms, antonyms, and words with relations of hypernymy and meronymy were identified via their relationships in WordNet. Collocation was operationalized using the word association measure Mutual Information (MI). MI values of 3.5 or higher in the Corpus of Contemporary American English (Davies, 2008), a more conservative measure than Hunston's (2002) suggestion of 3.0, were used.

3. Findings and Discussion

A brief profile of the overall make-up of files that contained the framework in each sub-corpus is given in Table 2. The tokens of the frame in the ENS sub-corpus exceed those of the JPN sub-corpus, 78 to 64, and are also more evenly dispersed among the texts occurring in over 90% of the ENS texts while occurring in only 70% of the JPN texts. This could suggest that L1 Japanese authors are not familiar with this common framework or are not comfortable using it and hence avoid it. It is also of note that while the framework is more frequent in ENS sub-corpus, the number of distinct N1s and N2s is fewer compared to the those in the JPN sub-corpus. This could be evidence of the L1 English authors drawing on a more restricted set of fillers reflecting better attunement to the colligational restrictions of the pattern.

Table 2. Data used for analysis from the ENS and JPN sub-corpora

	ENS	JPN
Number of instances of frame	78 (0.876)*	64 (0.731)*
Number of distinct fillers in the N1 position	42	46
Number of distinct fillers in the N2 position	44	54
Number of files the frame occurred in	71	45

*Normalized rate of occurrence per 1,000 words

3.1. Semantic characteristics of the N1 in the target frame

Table 3 shows all N1s that occur at least twice in either sub-corpus and their distribution between the smoking (SMK) and part-time job (PTJ) prompts. The italicized entries, *taste* and *health*, two abstract nouns, appeared in both the ENS and JPN sub-corpora and only in response to the prompt on smoking.

As Table 3 illustrates, the Japanese authors were more prompt-specific in their use of the N1s than their L1 English counterparts. In fact, there were no N1s in the JPN sub-corpus that occurred in texts representing both prompts. By contrast, nearly half of the N1s used by the L1 English authors appeared in texts in response to both prompts. This would seem to support the notion that the L1 English authors use more general, broadly applicable words in the N1 position than the L1 Japanese authors.

Semantic maps visually depicting the interconnectedness of the N1s used by the L1 English and Japanese authors are in Figures 3 and 4. The semantic maps intend to show how the N1s group together in a semantic space relative to their relationship to all the other N1s of the target frame from their respective corpora. Each N1 is represented by a circle, or node, in

Table 3. Proportions between prompts and N1s recurring at least twice in one sub-corpus.

	English	Freq (SMK:PTJ)	Japanese	Freq (SMK:PTJ)
1	fact	2 : 7	smoke	7 : 0
2	rest	6 : 3	smell	6 : 0
3	*health*	6 : 0	number	4 : 0
4	*taste*	5 : 0	*taste*	3 : 0
5	end	3 : 1	*health*	2 : 0
6	good	2 : 0	importance	0 : 2
7	effect	2 : 0		
8	interest	2 : 0		
9	majority	1 : 1		
10	owner	2 : 0		
11	part	2 : 0		
12	reality	1 : 1		
13	side	1 : 1		

*Words occurring in both lists in *italics*

the figure and are in color in the PDF version of this report. The nodes are connected by a green line to all other nodes that share a Wu-Palmer score of 0.25, or 25%, or higher. Node color reflects the number of connections a word shares with other words. The color transitions generally from dark blue to dark red as the number of connections increases. Blue nodes have the fewest connections in the map, and as the number of connections increases, the node color transitions to green, yellow, orange, and finally red signifying the most interconnected nodes in the map. Node size reflects the frequency with which an N1 appears in the framework: the more frequent the filler, the larger its node. So, for example, small blue nodes represent the lowest frequency words that share comparatively fewer semantic

connections to the other N1s in the map. Examples from the smaller cluster of nodes, Cluster 2, in Figure 3 (the ENS semantic map) are *development, side,* and *leader*. Large blue nodes represent words that filled the N1 position more frequently, but still feature comparatively fewer semantic connections to the other N1s. Large orange and red nodes represent N1s that are both comparatively more frequent and more interconnected with the other N1 fillers. Examples of frequent N1s that are also well interconnected in the ENS map are *fact, rest,* and *health,* all located in Cluster 1.

Interpreting the location of each node on the semantic maps is less transparent than color and size. To illustrate, we shall use specific examples from the ENS map. Note the nodes for *whole* and *effect* on the right side of Cluster 1. These two words share a high similarity score of 75%, which partially explains their proximity to each other. However, their similarity score is not the only factor that determines their position on the map. The position of each node is influenced by its relationship with all other nodes. Cluster 2 includes the words *development, owner, home, leader, middle,* and *side*. Judging by the lines extending from these words toward the main cluster, they all share connections to only *whole* and *effect* from Cluster 1. If we think of the lines connecting nodes as rubber bands pulling the nodes together, we can see why *whole* and *effect* are not more centralized in Cluster 1: because the blue nodes in Cluster 2 are working to pull them away. In general, the ENS semantic map shows that the N1s from the ENS sub-corpus appear to form one major semantic group in Cluster 1 of mostly well-connected nodes featuring words like *end, beginning, rest, majority,* and *future*. Additionally, the most frequent fillers in the N1 position are located in Cluster 1 (e.g., *fact, rest, health,* and *taste*).

The semantic map reflecting the relationship between the N1s in the

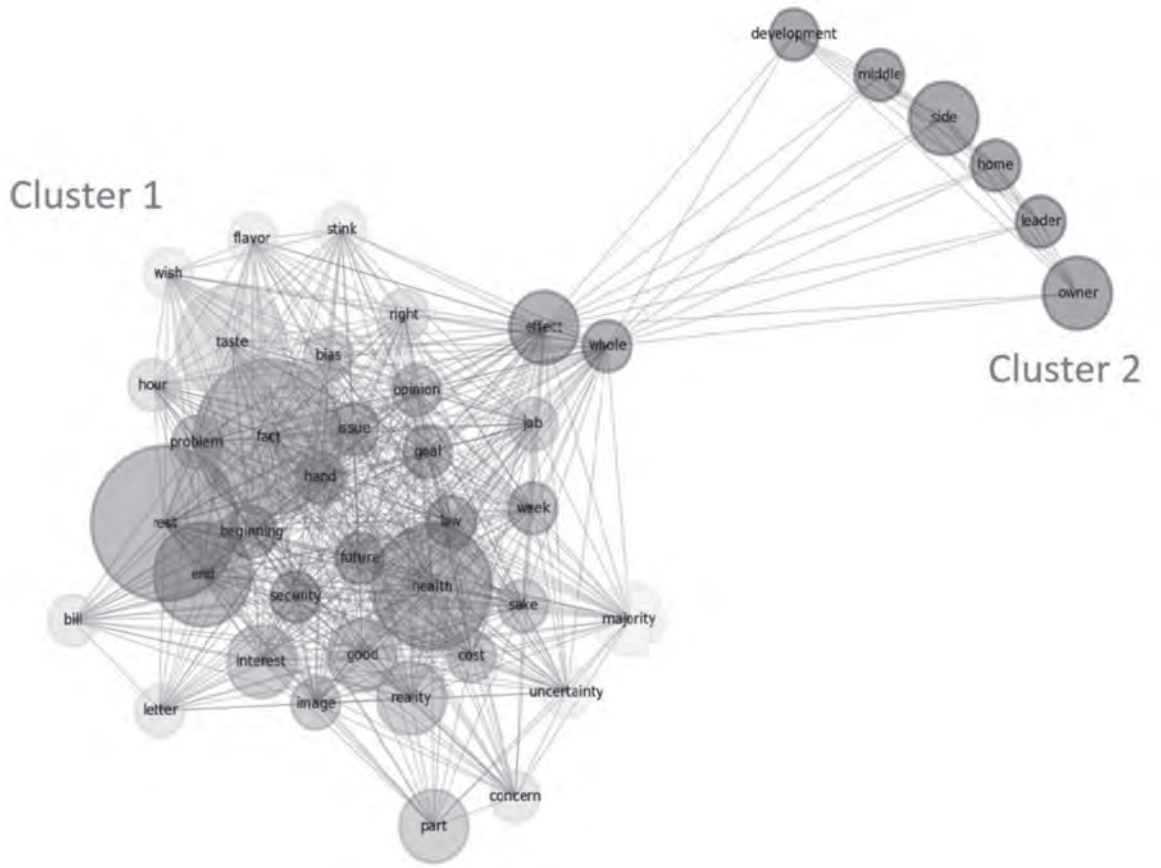


Figure 3. Semantic similarity map of N1s in *the N1 of the N2* framework in the ENS corpus (color is available on the PDF version of this manuscript available from the author upon request)

JPN sub-corpus displayed in Figure 4 is quite different from that of the ENS sub-corpus. Some striking differences between the ENS and JPN maps are that (1) unlike in the ENS map, there is an overall dearth of orange or red nodes in the JPN map, meaning that the bulk of the N1s are comparatively less interconnected than the central nodes *balance* and *cause*; (2) the most frequent N1s in the JPN map are not exclusively found in one coherent semantic group as we saw with the N1s in the ENS map; and (3) while the fillers are separated into two distinct clusters in both figures, the ENS map sees the majority of N1s concentrated in a single cluster. In the JPN map, the highly-connected words *balance* and *cause*

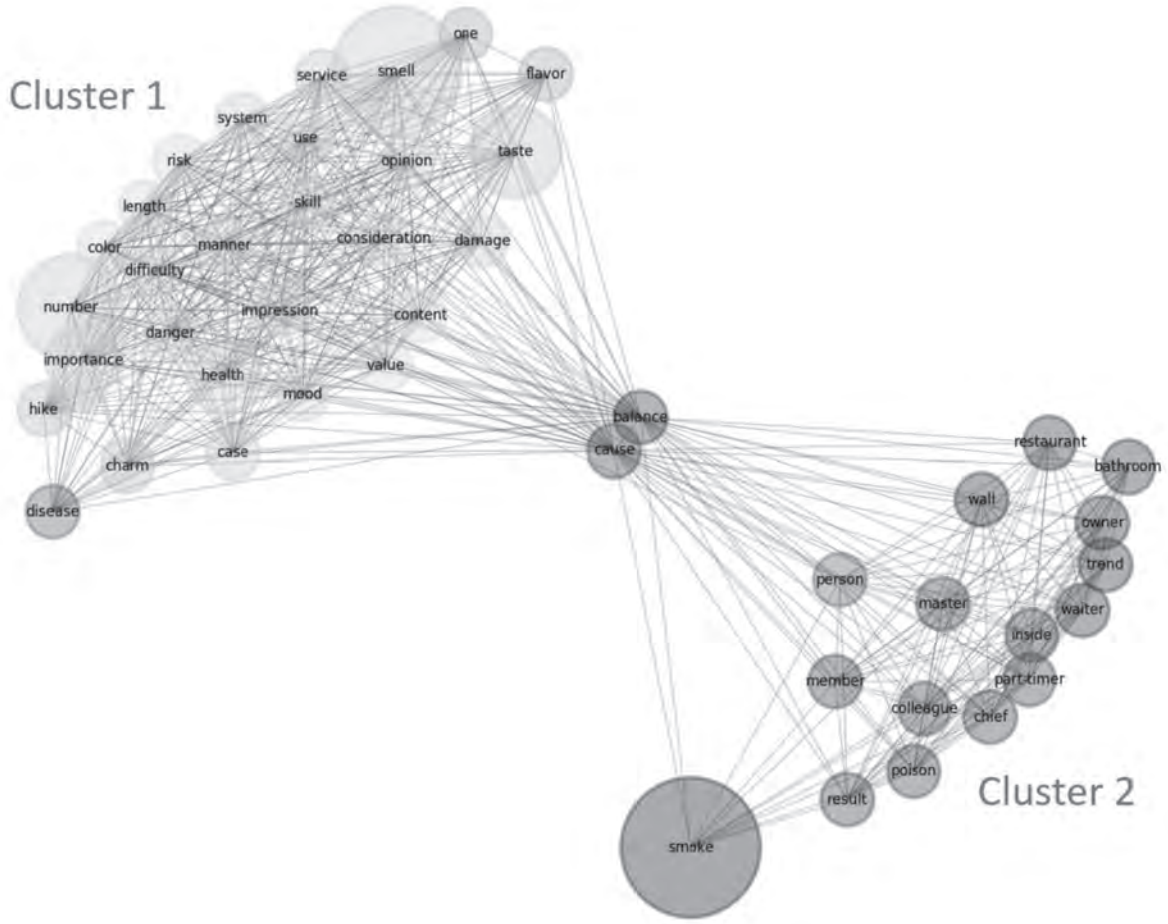


Figure 4. Semantic similarity map of N1s in *the N1 of the N2* framework in the JPN corpus (color is available on the PDF version of this manuscript available from the author upon request)

hover between Clusters 1 and 2 which are much closer in size than the two clusters in the ENS map. In essence, the Japanese authors are using two distinct semantic groups of fillers that are closer in size, and the two words that bridge those groups, *balance* and *cause,* are pulled to a semantic space that resides more or less evenly between them.

Perhaps the most telling observation of the groupings of N1s in Figures 3 and 4 is the types of nouns in Clusters 1 and 2 of the respective figures. Cluster 1 of both figures features words that are all abstract entities in WordNet's hierarchy of hypernyms. To provide a more precise

categorization than "abstract entity," each word was classified using Biber's (2006) semantic categories for nouns (pp. 248-250). Drawing on nouns that occurred more than 20 times per million words in the T2K-SWAL Corpus, Biber (2006, p. 248) identified eight categories of nouns reproduced here:

Animate: humans or animals

Cognitive: mental/cognitive processes or perceptions

Concrete: inanimate objects that can be touched

Technical/concrete: tangible objects that are not normally perceived and/or cannot normally be touched

Place: places, areas, or objects in a fixed location

Quantity: nouns specifying a quantity, amount, or duration

Group/institution: nouns that denote a group or institution

Abstract/process: intangible, abstract concepts or processes

Table 4 presents the semantic category of each noun in the N1 position from the ENS sub-corpus in terms of Biber's (2006) semantic categories for nouns based on their cluster membership in Figure 3. The first column of Table 4 presents the semantic category, the second column presents all N1s located in Cluster 1, and the third column presents all N1s located in Cluster 2. The differences in types of nouns that make up the clusters is striking. For instance, 21 of the 23 abstract/process nouns that make up the ENS map belong to Cluster 1. All eight of the cognitive nouns belong to Cluster 1, and the remaining seven nouns of Cluster 1 are divided between quantity and technical concrete nouns. Cluster 1 contains no animate, place, or group/institution nouns while Cluster 2 does feature nouns representing each of those categories. Clearly, the vast majority of N1s used by the L1 English authors are abstract/process and cognitive nouns.

Table 4. Semantic categories of N1s in ENS sub-corpus

Semantic category	Nouns in Cluster 1	Nouns in Cluster 2
Animate		*owner, leader*
Cognitive	*concern, fact, flavor, opinion, stink, taste, uncertainty, wish*	
Concrete		
Technical concrete	*bill, letter*	
Place		*middle*
Quantity	*future, hour, majority, part, rest, week*	
Group/institution		*home*
Abstract/process	*beginning, bias, cost, effect, end, goal, good, hand, health, image, interest, issue, job, law, problem, reality, right, sake, security, whole*	*side, development*

Table 5 presents the semantic category of each N1 from the JPN sub-corpus in. The fillers *balance* and *cause* are included with Cluster 1 as they share more semantic ties with Cluster 1 than with Cluster 2.

Similarities between the types of nouns that fill the N1 position in the ENS and JPN sub-corpora can be seen in Tables 4 and 5, and are reflected in how the N1s clustered in the semantic maps. Cluster 1 in both maps features more interconnected words and contains mostly abstract/process and cognitive nouns such as *taste, health, wish, end, rest,* and *development*. These types of nouns define some intangible aspect of the N2 as illustrated in the following concordances from the JPN and ENS sub-corpora:

3. …the smoke ruins *the taste of the dish* and the smoking with… (JPN, SMK)

Table 5. Semantic categorization of N1s in JPN sub-corpus

Semantic categories	Nouns in cluster 1	Nouns in cluster 2
Animate		*chief, colleague, master, member, owner, part-timer, person, waiter*
Cognitive	*consideration, flavor, impression, mood, opinion, smell, taste*	
Concrete		*poison, smoke, wall*
Technical concrete	*disease*	
Place		*bathroom, inside, restaurant*
Quantity	*length, number, one*	
Group/institution		
Abstract/process	*balance, case, cause, charm, color, content, damage, danger, difficulty, health, hike, importance, manner, risk, service, skill, system, use, value*	*result, trend*

4. … smoking has a risk to *the health of the people* who have been troubled… (JPN, SMK)
5. … governments would be following *the wishes of the majority* of cities. (ENS, SMK)
6. When it comes down to it, at *the end of the day* that's really all that… (ENS, SMK)
7. … in the summers and part time through *the rest of the school year*… (ENS, PTJ)

While there is much overlap in the types of N1s that comprise the ENS and JPN semantic maps, there are also differences. Table 6 compares the

proportion of N1 semantic types used by L1 English and Japanese authors. Abstract/process nouns made up 45% of the tokens used in the N1 position by the L1 English authors compared to 36% by the L1 Japanese authors. Quantity nouns also made up much more of the N1s in the ENS corpus accounting for 21% of the tokens compared to 9% in the JPN sub-corpus. Outside of abstract/process and quantity nouns, the biggest differences in types of nouns used by the two groups of writers was concrete nouns and animate nouns. The L1 English authors used no concrete nouns in the N1 position compared to 14% of the fillers from the JPN corpus, and animate nouns made up only 4% of the fillers in the ENS corpus but 13% of the JPN corpus.

Table 6. Percent of N1 types in frames out of N1 tokens

Semantic categories for nouns (Biber, 2006)	ENS	JPN
Animate	4%	13%
Cognitive	26%	22%
Concrete	0%	14%
Technical concrete	3%	2%
Place	5%	5%
Quantity	21%	9%
Group/institution	1%	0%
Abstract/process	45%	36%

What most clearly separates the two groups' use of the frame is the Japanese authors' more frequent use of the genitive *of*-phrase with animate and concrete nouns and the L1 English authors' use of the more idiomatic phrases such as the *fact of the matter* and *(at) the end of the day*. The more

idiomatic phrases will be treated in more depth in the next section on the frame's role in creating texture in the text. With respect to the genitive *of*-phrase, the Japanese authors used it frequently with *smoke* in the N1 position. *Smoke* is a concrete noun. Recall that the L1 English authors did not use concrete nouns in the N1 position of the frame in this data set. Rather, they opted for the phrase *cigarette smoke* 89 times.

8. …*the smoke of the cigarette* is worse for a woman and a minor (JPN, SMK)
9. …it is considered that *the smoke of the cigarette* is bad for not only… (JPN, SMK)
10. …you do not have to smell *cigarette smoke* which interferes with the… (ENS, SMK)
11. …enjoying food, and having *cigarette smoke* mixed into the air… (ENS, SMK)

There was also more use of animate nouns in the frame in the JPN sub-corpus that were followed by *of*-phrases functioning as a post noun modifier. Take, for example, the use of *colleagues* and *waiters*:

12. …we can make friends with *the colleagues of the part-time job*. (JPN, PTJ)
13. …as a visitor, but *the waiters of the restaurant* must come to work (JPN, SMK)

In Examples 12 and 13, the N1 already carries meaning that the *of*-phrase brings, *colleagues* are at work and *waiters* work in restaurants, rendering the information that the prepositional phrase carries redundant.

In summary, the Wu-Palmer method of calculating similarity did a reasonable job separating out nouns of different semantic categories, and

placed them relative to one another in a two-dimensional space. The findings indicate that particularly for the L1 English authors, the majority of N1s belong to a semantically interconnected group of abstract/process and cognitive nouns. The N1 also typically shares an interesting relationship with the N2 in that it tends to define some abstract or intangible quality or attribute of the N2. This latter finding is congruent with Hasselgård's (2019) findings on the same framework. The next section will investigate how the framework contributes to creating texture in the texts.

3.2. The role of the frame in creating texture

In section 1.2 three manners in which formulaic language can contribute to texture were outlined: (1) information structure, (2) connectives, and (3) reiteration. The following sub-sections will look more closely at how the frame was used to create texture.

3.2.1. Framework in Information Structure

Use of information structure as a cohesive resource was slightly more frequent in the JPN texts than the ENS texts at 0.22 and 0.16 times per 1,000 words, respectively. In the JPN corpus, the frame frequently holds the subject position of the clause: *the smoke of the cigarette, the smell of the cigarette, the smell of the smoke.* These instances hold a noun phrase and represent Given information that leads into a new proposition as shown in the following examples:

14. Thirdly, *the smoke of the cigarette* makes the room dirty. (JPN, SMK)
15. *The smell of the cigarette* is never comfortable for non-smokers. (JPN, SMK)
16. In addition, I think that *the smell of the smoke* ruins the taste of the

dish… (JPN, SMK)

However, there are some differences in how information structure is used in the ENS and JPN sub-corpora. With the JPN authors, over half of the 19 instances of the frame contain Given information in both the N1 and the N2. Also, the N2 is most frequently a concrete or place noun such as *cigarette, people,* or *restaurant* and used in the genitive *of*-phrase. Meanwhile, in the ENS sub-corpus, more abstract nouns appear in the N1 position. Recall Mahlberg's (2003) example of a focusing device with the phrase *the thing is,* where *thing* is a general noun used to encapsulate and focus Given information before presenting New information. The most frequent example from the ENS sub-corpus is *the fact of the matter*. Like the JPN texts, the framework houses a noun phrase in the subject position of the clause. Unlike the examples from the JPN sub-corpus, it uses a general abstract noun, *matter*, to package the entirety of the Given information. This is seen in Example 17. Example 18 uses the noun *many* in the N2 position to refer back to the general population of Japan and how its well-being should concern individuals in Japan.

17. *The fact of the matter* is that we are already busy enough… (ENS, PTJ)
18. … where *the good of the many* is the concern of the individual (ENS, SMK)

3.2.2. Framework as Connective

With only 6 and 4 raw instances in the ENS and JPN sub-corpora, respectively, the framework did not frequently function as a connective. When the framework did function as a connective in the ENS corpus, it was as a linking adverbial and frequently an idiomatic expression. For example:

19. At *the end of the day*, a student's most important directive is to go to school (ENS, PTJ)
20. But at *the end of the day*, I don't really know. (ENS, SMK)
21. On *the other side of the coin*, I know that a lot of students are fairly resilient and… (ENS, PTJ)

Using Biber et al.'s (1999) semantic categories of linking adverbials, Example 19 fulfills the function of "summation" in that the author used it to "conclude or sum up the information in the preceding discourse" (p. 876). Example 20 also functions to sum up the author's opinion on the topic of the text. However, the author used two linking adverbials in succession with "But" functioning as "contrast/concession" to precede his or her ultimate conclusion. The author points out the health drawbacks of smoking as support for the thesis of banning smoking in public places, but the author concedes that the choice ultimately rests with the Japanese people. Example 21 also functions for "contrast/concession" by linking an opposing view to the preceding text.

The connectives in the JPN sub-corpus were less formulaic and idiomatic than the connectives in the ENS sub-corpus. In Examples 22 and 23, the connectives work to link what follows to the preceding discourse, but the choice of words differs from what an L1 or more proficient speaker would typically use. In Example 22, a more proficient speaker would most likely use *as a result of the above*, and in Example 23 most likely *in the worst-case scenario*.

22. As *the result of the above*, protecting non-smokers from side-stream smoke is the most important thing… (JPN, SMK)
23. …and, in *the case of the worst*, miscarriage and to have a baby born… (JPN, SMK)

While the frame does not result in many connectives for either group of writers, the L1 English writers tended to use idiomatic sequences of words to achieve texture while the Japanese authors appear to be less aware of the idiomatic phrases and instead pieced together individual words resulting in unnatural sequences.

3.2.3. Framework in Reiteration

Previous research on lexical overlap and writing development over time has found that there is an increase in cohesive devices such as reiteration and connectives as young writers initially develop, but this trend reverses as writers mature and improve over time (Crossley et al. 2011; Haswell, 1990). Much like young L1 learners, L2 learners also seem initially to use more explicit cohesive devices before the trend reverses later in development (Crossley et al. 2016; Yang & Sun, 2012). In light of these trends, it was expected that the N2 would feature more reiteration throughout the texts in the JPN sub-corpus due to a typically narrower range of vocabulary when compared to L1 English authors.

The N2 was chosen to be the focus of this part of the analysis because it is usually the N2 of this framework that serves as the head noun (Sinclair, 1991). Figures 5 and 6 are examples of reiteration in a text from the ENS and JPN sub-corpora, respectively. The text samples feature the target frames, ***the middle of the restaurant*** and ***the mood of the restaurant***, marked in ***bold italics***, and the N2 is also ***underlined***. Instances of reiteration of the N2 throughout the texts via complex repetition are marked by plain **bold text** and instances via collocation by plain underlined text. There were no instances of reiteration via synonymy, hypernymy, or meronymy in these examples. Lines to delineate the lexical chains that traverse the texts are provided.

In an essay from the ENS sub-corpus presented in Figure 5, it is seen that the author begins the essay with the topic sentence about "Banning smoking at restaurants…". The author uses the frame to emphasize how inconsiderate it is to smoke in the restaurant by pinpointing a specific attribute of the restaurant, "the middle," as the location where the patron chooses to "light up." The N2, *restaurant,* has five anaphoric and cataphoric links creating a lexical chain anchored at more or less equal intervals throughout the text: four instances of repetition and one instance of collocational overlap with the word *meal*.

Banning smoking at **restaurants** is becoming a common practice in many states in the United States of America. The fact that smoking is still permitted at Japanese **restaurants** would thus appear to be a temporary condition, because as time goes on the limitations on smoking are becoming more and more widespread. In addition, no one likes to have their meal ruined by an inconsiderate individual who deems it appropriate to light up right in ***the middle of the restaurant***. Such an individual is endangering not only himself but also others around him with his second hand smoke, which is surprisingly much more dangerous than the smoke he will be inhaling himself. Long periods of exposure to secondhand smoke have been known to cause cancer just as long periods of smoking does as well. With this kind of obvious link between a life threatening disease and a stupid habit, the choice to quit smoking and the choice to ban smoking at **restaurants** would seem to be obviously a good one. Nonetheless, there are many individuals who consider themselves rebels and find all kinds of ways to claim that other people are imposing upon their rights to be themselves. There is no way to please this kind of individual, but there is a way to keep this kind of individual from hurting other people. That would be by banning smoking at the **restaurants** in Japan.

Figure 5. Lexical cohesion with the N2 *restaurant* in a text from the ENS sub-corpus

Figure 6 depicts a text from the JPN sub-corpus and follows the lexical chain for the N2 of the frame *the mood of the restaurant*. The relationship between the N1 and the N2 in this instance lines up well with that in the ENS corpus as *mood* defines some intangible aspect of *the restaurant*. Also, the frame identifies *mood* as an important attribute of the *restaurant*. The

more pronounced difference between Figures 5 and 6 is the number of semantic connections to the N2 throughout the texts. While, the text from the ENS sub-corpus features five semantic connections to the N2, the text from the JPN sub-corpus features eight connections.

I disagree with the statement. Some country seems to have a custom of smoking at dinner, same as even a child. It means that smoking is a good method to be relaxed and enjoy themselves at dinner time. More over, I've heard from my uncle, who loves smoking, that smoking is a tool with which people have a nice dinner and communicate with each other. Indeed we can see people enjoying having a meal and communicating at restaurant in Japan, say, izakaya or so. Though it might be because they are drinking, smoking must help them have a good time. **Restaurants** should offer the place where their customers can enjoy themselves and have a meal relaxed, even if someone who doesn't smoke insists that the smoke of tobacco does harm than good for him. It is a **restaurant** that is responsible for solving the problem like this. In other words, the **restaurant** should divide the seats for non-smoker from those for smoker. And then, both non-smoker and smoker will be satisfied with ***the mood of the restaurant*** and taste dishes good. This experience would make them come back there again. In order to have their customers feel like this, **restaurants** shouldn't completely ban smoking.

Figure 6. Lexical cohesion with the N2 *restaurant* in a text from the JPN sub-corpus

As outlined in Table 7, the mean number of total links an N2 had throughout the texts in the ENS sub-corpus was 3.99—less than half the number of links that texts in the JPN sub-corpus featured with a mean of 9.00. These numbers reflect all lexical links such as lexical overlap of the lemma, synonyms, antonyms, collocates, hypernyms, and meronyms

Table 7. Means, standard deviations, and range of lexical links to N2 per text

	Mean	SD	Range
ENS	3.99	3.56	0-17
JPN	9.00	7.90	0-32

appearing elsewhere in the text. It is clear that, in general, there are more instances of reiteration related to the N2 in the essays from the JPN sub-corpus.

A more detailed look at the types of reiteration that make up the lexical chains in the ENS and JPN sub-corpora is provided in Table 8. Texts from the JPN sub-corpus have an average of more than 3.0 instances per text for both repetition of the lemma and collocational overlap, while the ENS texts have a comparatively lower rate of occurrence at approximately 1.6 per text for both categories. The average per text rate between groups is much more similar in the measures of synonymy, antonymy, hypernymy, and meronymy. Higher rates of repetition among the L1 Japanese authors is likely related to the observation that identical lexical overlap is more common in both early first language and second language learner writing but does little in the way of elaborating ideas in a text and hence decreases as writers develop (Haswell, 1990). This may also be related to less lexical diversity of the texts in the JPN sub-corpus compared to those in the ENS sub-corpus as was reflected in the type-token ratios. That is, the Japanese authors have fewer words at their disposal in English and are therefore more likely to repeat words, inflating rates of repetition.

Table 8. Mean per text frequency of types of lexical links with the N2 in the ENS and JPN corpora

	Repetition	Collocation	Synonymy	Antonymy	Hypernymy	Meronymy
ENS	1.67	1.61	0.20	0.03	0.62	0.14
JPN	3.27	3.04	0.24	0.02	0.71	0.09

4. Conclusion

This study contributed empirical evidence supporting the intuition that N1s in the colligational framework *the N1 of the N2* share semantic characteristics. By using network analysis, it was shown that in this data set most N1s share a semantic space defined by hypernymic and meronymic relationships. Furthermore, the L1 English authors appear to choose N1s from a more restricted semantic space than their L1 Japanese counterparts. In terms of the relationship between the N1 and the N2, the L1 English authors typically fill the N1 slot with an abstract/process or cognitive noun that defines some intangible aspect or attribute of the N2; this is congruent with Hasselgård's (2016 & 2019) characterization of the semantic relationship between the N1 and N2 in this framework. The Japanese authors do this to a lesser extent, relying on more animate and concrete nouns in the N1 position, particularly in the genitive *of*-phrase.

In terms of creating texture, the framework contributed to information structure, connectives, and reiteration. The L1 English authors used the framework for information structure less than the L1 Japanese authors, and the nature of the usage also differed between groups. The L1 English authors more frequently used general nouns in idiomatic expressions to focus the preceding text in its entirety before presenting New information than the L1 Japanese authors. In terms of connectives, the L1 English authors used more idiomatic linking adverbials than the Japanese authors whose use of connectives in the framework appeared to be constructed piecemeal. With respect to reiteration, the vast majority of N2s in the framework represented Given information featuring some sort of reiteration of previously established entities. However, the nature of the textual links differed between the two groups. The Japanese authors used

more instances of repetition and collocation with the N2 than the L1 English authors, but both groups feature similar frequencies of links established through other forms of semantic repetition such as synonymy and hypernymy.

These findings have important implications for the teaching of this high-frequency framework as it plays an important role in text construction and cohesion. One immediate takeaway in the context of Japan is to raise awareness about differences in usage of the frame between the groups of authors. Instructors could create data-driven learning activities that focus on induction of patterns and exemplar-based learning to guide learners to observe these differences (Boulton & Cobb, 2017). For example, instructors might have learners compare instances of the frame from the ENS and JPN sub-corpora to try to discover the qualitative variation between the fillers in the N1 position (e.g., abstract versus concrete nouns). This could lead to a discussion about the differences between abstract and concrete nouns and how the frame can be used to highlight some intangible aspect of an entity versus the genitive *of*-phrase. Learners could then re-examine the samples of language in light of the class discussion. The goal would be to guide learners to reconsider how and when they want to use this high-frequency frame.

Likewise, activities that guide learners to contemplate the relationship of the framework to the larger text could be useful. It is apparent that texts in the JPN sub-corpus featured more instances of creating cohesion via lexical repetition with the N2 of the framework. While this is likely an artefact of a more restricted English lexicon, it could raise awareness of the trend and serve to motivate learners to aim for more lexical breadth in their writing. Furthermore, noticing the more idiomatic instances of the framework (e.g., *the fact of the matter* and *(at) the end of the day*) that

function as part of information structure and connectives could raise awareness of norms for structuring information flow.

Of course, there are numerous limitations to this study. For one, the sample of texts was small, and the subset of texts that had the target feature was even smaller. Cortes (2015, p. 205) explained that problems can arise when making comparisons with or between small corpora. Future studies might amend these weaknesses by re-visiting the topic with larger corpora. Another avenue to pursue would be to examine the role of discontinuous formulaic language with a wider range of different first language groups and in different registers. Finally, alternative methods of gauging semantic similarity such as distributional methods that have become more commonplace in computational linguistics (e.g., word2vec) would be a welcome extension.

Language is a complex phenomenon and the empirical findings here point to subtle differences in the usage of a high frequency instance of formulaic language between more and less proficient speakers of English. Furthermore, the differences in the usage of the framework found between L1 speakers and learners may warrant more critical contrastive interlanguage analysis over a wider scope of discontinuous formulaic language. Such analyses have the potential to guide instructors toward innovative teaching materials to address the differences between L1 groups outlined in the present article.

References

Biber, D. (2006). University language: A corpus-based study of spoken and written registers. Amsterdam: John Benjamins.

Biber, D. (2009). A corpus-driven approach to formulaic language in English: Multi-word patterns in speech and writing. *International Journal of Corpus Linguistics, 14*(3), 275-311. doi: 10.1075/ijcl.14.3.08bib

Biber, D., Conrad, S., & Cortes, V. (2004). If you look at…: Lexical bundles in university teaching and textbooks. *Applied Linguistics, 25*(3), 371-405. doi: 10.1093/applin/25.3.371

Biber, D., & Gray, B. (2016). *Grammatical Complexity in Academic English: Linguistic Change in Writing.* Cambridge: Cambridge University Press.

Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *The Longman Grammar of Spoken and Written English.* London: Longman.

Bird, S., Loper, E., & Klein, E. (2009). *Natural Language Processing with Python.* Cambridge: O'Reilly Media Inc.

Boulton, A., & Cobb, T. (2017). Corpus use in language learning: A meta-analysis. *Language Learning, 67*(2), 348-393. doi: 10.1111/lang.12224

Cortes, V. (2015). Situating lexical bundles in the formulaic language spectrum: origin and functional analysis developments. In V. Cortes, E. Csomay, & D. Biber (Eds.), *Corpus-based Research in Applied Linguistics: Studies in Honor of Doug Biber* (pp. 197-216). Amsterdam: John Benjamins. Council of Europe. 2001.

Crossley, S. A., Roscoe, R. D., McNamara, D. S., & Graesser, A. (2011). Predicting human scores of essay quality using computational indices of linguistic and textual features. In G. Biswas, S. Bull, J. Kay, & A. Mitrovic (Eds.), *Proceedings of the 15th international conference on artificial intelligence in education* (pp. 438–440). New York: Springer.

Crossley, S. A., Kyle, K., & McNamara, D. S. (2016). The development and use of cohesive devices in L2 writing and their relations to judgments of essay quality. *The Journal of Second Language Writing, 32,* 1-16, doi: 10.1016/j.jslw.2016.01.003

Davies, M. (2008) The Corpus of Contemporary American English: 1 billion words, 1990-present. http://corpus.byu.edu/coca/

Eeg-Olofsson, M., & Altenberg, B. (1994). Discontinuous recurrent words combinations in the London-Lund Corpus. In U. Fries, G. Tottie, & P. Schneider (Eds.), *Creating and Using English Language Corpora: Papers from the Fourteenth International Conference on English Language Research on Computerized Corpora.* (pp. 63-77). Amsterdam: Rodopi.

Firth, J. R. (1957). A synopsis of linguistic theory, 1930-1955. *Studies in Linguistic Analysis,* Oxford: Blackwell, 1-32.

Garner, J. R. (2016). A phrase-frame approach to investigating phraseology in learner writing across proficiency levels. *International Journal of Learner Corpus Research,* 2(1),31-67. doi: 10.1075/ijlcr.2.1.02gar

Gray, B., & Biber, B. (2015). Lexical frames in academic prose and conversation. In

S. Hoffmann, B. Fischer-Starcke, & A. Sand (eds.), *Current Issues in Phraseology* (pp. 109-133). Amsterdam: John Benjamins.

Hagberg, A. A., Schult, D. A., & Swart P. J. (2008). Exploring network structure, dynamics, and function using NetworkX, in *Proceedings of the 7th Python in Science Conference (SciPy2008),* Gäel Varoquaux, Travis Vaught, and Jarrod Millman (Eds), (Pasadena, CA USA), pp. 11–15, Aug 2008.

Halliday, M. A. K., & Hasan. R. (1976). *Cohesion in English.* London: Longman.

Halliday, M. A. K., & Matthiessen, C. M. I. M. (2014). *Halliday's introduction to functional grammar* (4th ed.). London and New York: Routledge.

Hasselgård, H. (2016). "*The way of the world*: The colligational framework 'the N1 of theN2' and its Norwegian correspondences". *Nordic Journal of English Studies*, *15*(3):55–79. doi: http://ojs.ub.gu.se/ojs/index.php/njes/article/view/3589

Hasselgård, H. (2019). The nature of the essays: The colligational framework 'the N of the N'in L1 and L2 novice academic English. *Corpus approaches into World Englishes and Language Contrasts* (Studies in Variation, Contacts and Change in English 20), ed. by Hanna Parviainen, Mark Kaunisto & Päivi Pahta. Helsinki: VARIENG. http://www.helsinki.fi/varieng/series/volumes/20/hasselgard/

Haswell, R. H. (1990). *Change in undergraduate and post-graduate writing performance (part 2): Problems in interpretation (ERIC No. ED323537)*. ERIC Institute of Education Sciences. Retrieved from (http://eric.ed.gov/?id=ED323537)

Hoey, M. (1991). *Patterns of lexis in text*. Oxford: Oxford University Press.

Hudson, R. (2007). *Language networks: The new word grammar*. New York: Oxford University Press.

Hunston, S. (2002) Corpora in applied linguistics. Cambridge: Cambridge University Press.

Hyland, K. (2008). As can be seen: Lexical bundles and discplinary variation. *English for Specific Purposes*, 27, 4–21. Doi: 10.1016/j.esp.2007.06.001

Ishikawa, S. (2013). The ICNALE and sophisticated contrastive interlanguage analysis of Asian learners of English. In S. Ishikawa (Ed.), *Learner Corpus Studies in Asia and the World* (pp. 91-118). Kobe: Kobe University School of Languages and Communication.

Mahlberg, M. (2003). The textual dimension of corpus linguistics: The support function of English general nouns and its theoretical implications. *International Journal of Corpus Linguistics, 8*(1), 97-108.

Marco, M. J. L. (2000). Collocational frameworks in medical research papers: a genre-based study. *English for Specific Purposes*, *19*(1), 63–86.

Miller, G. A. (2010). "About WordNet." WordNet. Princeton University. Retrieved from http://wordnet.princeton.edu

Nesi, H., & Basturkmen, H. (2006). Lexical bundles and discourse signaling in academic lectures. *International Journal of Corpus Linguistics, 11*(3), 283-304. doi: 10.1075/ijcl.11.3.04nes

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1985). *A comprehensive Grammar of the English Language.* London & New York: Longman.

Renouf, A., & Sinclair, J. McH. (1991). Collocational frameworks in English. In K. Aijmer & B. Altenberg (Eds.), *English Corpus Linguistics*. London: Longman, 128–143.

Römer, U. (2010). Establishing the phraseological profile of a text type: The construction of meaning in academic book reviews. *English Text Construction*, *3*(1), 95–119. doi: 10.1075/etc.3.1.06rom

Sinclair, J. McH. (1991). Corpus, Concordance, and Collocation. Oxford: Oxford University Press.

Sun, K., Huang, Y., & Liu, M. (2011). A WordNet-Based Near-Synonyms and Similar-Looking Word Learning System. *Educational Technology & Society*, *14*, 121–134.

Yang, W., & Sun, Y. (2012). The use of cohesive devices in argumentative writing by Chinese EFL learners at different proficiency levels. *Linguistics and Education, 23*, 31-48.

「他者」という罠

―― こどもたちに語る沖縄学[1] ――

前嵩西　一　馬

> 真の情熱は結局決意と同じに，云わば分析の結論の上で初めて発情する。「分析の結論」は決してまだ情熱ではないが，情熱を産まないような分析の結論は，「結論」のない分析であり，ペダントリーや弁解に於て見られるような匍匐的リアリズムに過ぎないのだ。
>
> ――村山知義[2]

はじめに

人類学的なアプローチにおいて，日常の身体や日頃の感情に注目することで「できごと」や「経験」に新たな光を当てるという手順が物を言うことがある。たとえば長い日本列島を人類学的な視点でどう捉えるか，といったような問いかけがそうだ。視覚という回路を礎にした想像力を効果的に用いる。北は北海道から南は沖縄まで，という表現がある。飛び石のように島が連なっている。その連なりが見えなくなるのが，南西諸島である。そして実は沖縄の中でも，久米島から宮古島は見えない。八重山宮古文化圏と呼ばれる所以がここにある。これが文化を感じる回路のひとつである。「文化の語り」における空間的な把握を促す最も簡易で効果的な問いかけのひとつがここにある。そして皮肉なことに，そのような問いを用いた途端，そこに住む人々の身体的な視野がそっく

り抜け落ちてしまうことがある。しかしそれぞれの土地に住む人々の視線だけでは，この「文化の語り」自体がそもそも成立しないというジレンマが生じてしまう。

「文化の語り」は空間のみならず，時間にも当然その効果の範囲を広げることができる。やや性急ではあるが，ここでは，ナショナル・メモリーとは異なる形で集団の記憶をどう問題化できるか，という問いをまずは（上記のジレンマ込みで）共有しておこう。母語やナショナルな同一性の物語から疎外された者たちの経験や表象は，従来のあるいは既存の分節化ではチューニングできない声で語られる。その調節（チューニング）不能な状況に内在する不安は，たとえば民族誌においてフォントが小さくなったり斜体字になったりすることで他者として登録済みの「ネイティブの声」から発せられることはない。それは，様々な場面において「文化の語り」として呼びうるテクストの精読を通してかろうじて浮かび上がる。

「文化の語り」において最も重要な要素は，「感情」である(3)。たとえば，グスクと呼ばれる沖縄の城跡群は世界遺産に登録されている。しかし，地元には，それらの石が戦後米軍に全部取られていたという話が密かに伝わっている。玉城のお城だけ石が残っている。世界遺産のオフィシャル・ストーリーにはまず出てこない。このように（フィールドワークで出くわす）数多くの語られない「文化の語り」というものを通して，人々のグスクに纏わる微細な「感情」に触れることができる。我々が知っている文化や歴史は，どのような形で創られてきたのか。歴史や文化を学ぶとはそもそもどういうことか，また，知らないことを知るというのはどういうことか，こういった普段はあまり考えない原理的な問いを，沖縄の近さと遠さ(4)を通して考えてみたい。

歴史の表象は，夜空の星のようなもの。そこにすでにない星が放つ光が手に取るようにリアルに見える。もうないのにある。その星について人々は語り継いできた。歴史の夜は語りの朝を迎え，そしてまたそれを繰り返す。様々な「文化の語り」が充満している現代社会において，そこに住む人々の身体的な視野を含む固有の語りが「共同体の記憶」としてどのように構成されてくるか

という視点から，本稿では２つのテクストを見ながら，我々自身がすでに持っている「感情」を，生きた「テクスト」として使ってみたいと思う。１つ目は，沖縄の批評家と歴史家の間でかわされた沖縄の「今」をめぐる対照的な視線が刻まれた書籍であり，２つ目は，こども向けの学習雑誌に掲載された記事をめぐる執筆者としての経験である。いずれも，次世代に向けての言説をどう形成していくかという問題意識を共有しており，両者ともに「カタリツグ」行為に必然的に内在する（二重の）身体性とそれに付着する感情について考える時間を共有しうるテクストだと言えよう。

ちなみにカタリツグという言葉には，pass on もしくは hand down という英語表現が対応する。ここでは talk，speak，tell といった発話行為自体は口にされず，そのかわりに，ある「時間」の幅――たとえ我々が生きている「今」や「この世界」――を超え出ようとする身体性が手を伸ばす。その「手」が２つの身体――何かを渡そうとする者と渡される者――を撫でるとき，切実なコミュニケーションは，世界中に遍在する「文化の語り」に姿を変える。本稿ではそのような語りを担う者として，ときおり「私」という一人称が登場する。さて，その文化の物語にとって「私」から手渡される固有の「内容」や行為はどのような意味を持つのか。まずは最初のテクストを紐解いてみよう。

１．「沖縄問題」を描く

ここに，沖縄の団塊世代を代表する論客二人がものした書籍がある[5]。沖縄イニシアティブ論争[6]で沖縄内外に大きな議論を呼んだ歴史家高良倉吉氏と，沖縄のオルタナティブを常に模索している左派的知識人仲里効氏が，沖縄戦，本土復帰，基地問題など30の時事的，歴史的トピックを論じ合った。いわゆる沖縄問題と称される問題群に対する二人の立ち位置の違いとともに，彼らの沖縄に対する思いが率直に綴られている好著である。戦略的に沖縄が主体を立ち上げていくためには日米安保路線に乗ったうえで知識人は言説を戦略的に形成すべきであり，それが彼らの責任でもあるという高良も，そうではない，

あくまでも，国民国家や資本主義といった今あるシステムを疑うというのが知識や思想を生業とする人々の責任であるという立場の仲里も，実は「アジア」をあるひとつの濫喩として，沖縄あるいは沖縄と日本を語っている。高良のほうが「アジア」という言葉をより多く用いているが（そのぶんだけ高良の文章のほうが実存感を持つ箇所もある），いずれにせよ，両者ともその意味するところが今ひとつつかめないというもどかしさが残る。（「アジア」の記号性については後述する。）

この書籍の腰帯に目をやると，そこには「沖縄の苦悩が聞こえる」という文言がある。そこで前提とされているのは何か。この帯の付いた書籍を，書店で商品として手に取る者にとっては，苦悩する「沖縄」という主体がまずある。そしてそれを聞く者という主体が想定されている。もっとも，この「聞く者」はまだ主体化されていない可能性もある。なぜから，この文言からだけでは，「聴く」という意思を持った主体がいるのかどうかわからないからだ。聞こえる，という言葉は，聴く「listen to」意思をもたないにもかかわらずどこからか聞こえてくるものにたまたま身を置くという「hear」である可能性があるからだ。まるで，店先のラジオから沖縄出身のユニットが奏でるポップスがたまたま聞こえてくるように。その両者が主体としてコミュニケーションを発動できるのは，つまり，「沖縄の苦悩」を聴き取る主体が日本国内に点在する書店で一定数立ち上げられるときとは，残念ながら，日本が後戻りできない事態に陥ったときなのかもしれない。すなわちそれは，国内各地に自衛隊米軍を問わず軍事基地が増強配備され，本土が「沖縄化」される状況になってようやく日本に住む人々が「沖縄の苦悩」という徴候に事後的に気付くという，危機的な（critical）「とき」であるだろう。こうしてかつての政治的主体は日本に回帰する。はからずもこの書籍の帯は，「沖縄問題」とは何か，という問いへのひとつの決定的に重要な（critical）状況証拠的かつ行為遂行的な回答になっている。

１－１．「沖縄を定義する」という行為

本書において，沖縄に関わる言説として決定的に意味を持つ「対立構図」が提示されている箇所は幾つもあるが，本稿では巻末に収められた対談を取り上げることにしよう。「沖縄の歴史，国家，自立」と題されたダイアローグは，読売新聞西部版の紙面において，先述したように30のトピックを高良と仲里が互いに論じるという１年３ヶ月に渡る連載のあと，2007年に行われた。その冒頭でまず，両者の沖縄の定義における差異について触れられている。

仲里　高良さんは，沖縄を日本というフレームの中に位置づけている。私は，そのフレームに必ずしも内蔵できないエッセンスがあり，そこに沖縄の可能性を見いだすべきだと考えている。もう一つ，文体に違いがあった。高良さんの場合は非情に比喩的に言えば，パースペクティブ（透視的）な視線によるものだ。彼が鳥の目だったら，私は虫の目かも知れない。

仲里は自らの沖縄に対する眼差しを虫の目と名付け，高良のそれをより俯瞰的な鳥の目と呼ぶ(7)。ここでは，そのメタファーに沿って，両者の沖縄を定義する行為の差異について考察していきたい。

「自分の体験してきたことをどう言語化していくか」という問題意識の中から特異な文体を発明してきた仲里にとって，高良の言葉は「治者の論理」に汚染されているように聞こえる。米兵による少女暴行事件に対する抗議が沸騰する中，当時の沖縄県知事だった太田昌秀（二期目，1994年から1998年）が提示した沖縄の定義へのアンチテーゼとして「沖縄の定義」を確立させていった歴史家高良をヘーゲル的だと呼ぶ一方で，仲里は，自らの眼差しには「全体を鳥瞰する歴史が見落とす人間や事象へのまなざしを向け，歴史を逆なでにする」，すなわち「時代の裂け目を丁寧に見ていく視線がある」ベンヤミン的なものが内包されていると分析する。高良はその布置に対して特に否定せず，復帰後の沖縄のための「国史」作成として，自らの沖縄の定義づけの動機を語る。その

中で，彼は「アジアに出かけて考えたこと」や「宮古，八重山，奄美の世界のこと」を取り入れた事実を強調する。ここに，主体的な歴史（あるいは文化）の語りにおいて，地理的な移動の経験をどのように還元しうるかという問題が引き出せるだろう。

高良は実際パフォーマティブでアクティブな歴史家として，基地の町でロックフェスティバルを開催し，軽妙な語り口が評判を博すラジオ番組を持ち，アジア諸国をはじめ様々な土地に足を運ぶことを通して，自らの土地を主体的に俯瞰的に把握する視座を固めてきた。そこには，連載中高良の発言のそこかしこに感じられた，歴史家の自負がある。すなわち，自ら獲得したこのような視座こそが沖縄の生活を生きる市井の人が共感できる形での沖縄の主体性をもたらす（つまり民衆の力となる歴史の語りがある）のだと。しかしそこで「アジア」という言葉は，日本という国民国家との具体的な交渉や衝突の蓄積の場として捉えられることはなく，むしろ，自らの主体を（あるいはやや意地悪に踏み込んで言えば，その主体にとって都合のよい民衆というイメージをも）確立する道具立てのひとつとして，そして，自分が所属する社会の現在＝歴史を構築する素材のひとつとして疎外的な記号として用いられている(8)。

高良は沖縄イニシアティブという提言が，「沖縄の新しい政治的パフォーマンスの始まりだった」と位置づける。この「パフォーマンス」という言葉に注目してみよう。そこには行為の効果を期待する，もしくは少なくとも前提とする主体性の確認がある。その主体性があることによって，実は仲里の主体性もまた，パフォーマティブに確認されるという皮肉な構図がじわじわと浮かび上がってくる。仲里（の言説あるいは立ち位置）は，高良のように能動的に―つまり現行のシステムに対して自らの機能を高らかに掲げ積極的にその役割を担うことでシステム内の主体性と生産性を謳う―動かない。動かないことによってある種のシアトリカリティ（演劇性）を持ってしまう(9)。

高良の沖縄を定義するという行為の目的地は（仲里がこの対談中で示したように，ヘーゲル的な）「現在」である。しかし仲里の目的地は違う。彼の言説はどこへも動かないのだ。動かないことで何かを立ち上げようとしている，と言っ

てもいい。この動かないという動きは，高良の「鳥の目」がタイムを競うゲームを肯定する（そしてそのゲームに積極的に参入していく行為に繋がる）のに対して，仲里の「虫の目」は，タイムを競うことそのものを問う姿勢に見えてくるのだ。この対立は，やや性急に過ぎるかもしれないが，政治的そして経済的に展開されているグローバル・ゲームに「乗り」，その枠組みのなかで精一杯機能することで当たられた「分け前」に与るという行為＝姿勢に対して，システムからの要求に素直に従うのではなくまず「立ち止まり」その枠組みの妥当性自体を問うという行為に重ねることができるだろう[10]。沖縄の近代史の中で，そして現在においても暴力的に措定されてきた所与のシステムの中において，「イニシアティブ」をあえて取るという立場に対して，その暴力性自体をまずは問い直すことで異なるオルタナティブなシステムのあり方を考える，つまり「イニシアティブ対オルタナティブ」というこの二項対立の構図こそが，沖縄を定義する行為の批評的類型だと言える。

本対談の終盤戦において，この対立構図が言語というトピックを介してより鮮明に浮かび上がる箇所がある。

高良　（前略）私たちと子どもの世代に言葉のギャップがあるのは，沖縄だけの現象ではない。地域の伝統文化が受け継がれなくなったという日本全国どこにでもある現象だ。方言を語るときには，そのことを考慮に入れなければ一方的な議論になる。

仲里　そういう風に一般化してしまえば元も子もない。沖縄という場にこだわって植民地主義の問題や国家のあり方を考えるとき，沖縄の言語体験は日本中のどこにでもある問題だということではすまない。

高良　それでは，言語を奪われた人間，植民地的身体性をすり込まれた人間に対して，どうすれば良いと説明するのか。今も続いている植民地的状況を打倒するように説くのか。

仲里　そうではない。近代というコードとは別の回路から立ち上がる主体があってもいいと言っているんだ。主体の立ち上げ方を国民や国語というコードの下でならしていく文脈自体がおかしい。

高良　思想性を持った知識人にしか分からないような議論ではダメだ。これからどうするんだということを庶民に分かるように言わなければ。植民地的身体性すり込まれているために文化が断絶していると言うのだろうが，一番の問題は，伝統文化が寸断された状況を見据えながら，今を生きる人間がそれをどう再構築するかということだ。

仲里　今には今の位相があり，三十年前や五十年前には「植民地的身体性」の現れ方が違う。言語体系は国民国家体系と密接に結びついているということだ。沖縄の言語体験の中に国家が埋め込まれていることにもっと自覚的であるべきだと言っているのだ。近代化によって伝統が失われた他の四十六都道府県とは違うんだ。

高良　仲里さんの主張を聞くべき人間は誰なの？　あなた自身なのか？　誰のために議論しているのだろうか。

上記の議論の前にポストコロニアルという概念をめぐる両者のやり取りがあり，その具体的な事例として沖縄の言語体験が取り上げられる流れとなっている。ひとつの国民国家内における使用言語の有用性と多様性についての価値観の違いがお互いに確認された後に，この，言葉を用いて言葉を扱うというメタレベルな議論において，両者はイニシアティブ対オルタナティブという構図の典型的な「差異」を次のように見いだす。高良にとって，言語とはあくまでも生活主体の自己実現の道具に過ぎず，また社会全体にとっても時代背景や環境によって従属的に変化して構わないものである。その一方で仲里にとっての言語とは，主体形成そのものに重要な役割を果たすもので，言語の有り様が，時

代の文脈や条件に個々人や社会全体がどのように関わり合えるかという可能性の問題に直結する。そしてこの議論は，言葉を用いて言葉を扱うというメタレベルな議論であるが故に，仲里にとって現状を変革しうる身近な可能性という最重要課題が，高良の目には知識人のみを相手にする類の高尚な空理空論と映ってしまう。但しここで高良の弁を反主知主義と切って捨てるのは，両者に共通する「沖縄を定義する」姿勢そのものに内在する重要な資質を見逃すことに繋がる。

１－２．ねじれた世界における「経世済民」のあり方

両者の「沖縄を定義する」という行為には，それぞれの柳田国男の言うところのいわゆる「経世済民」の思想が宿っていることがわかるだろう。鳥の目も持つとされる者が，庶民の代弁者を買って出る一方で，虫の目を持つ者が，庶民に理解されない高尚な説を提示していると自他共に認める「ねじれ」に注目したい。（対談において高良は仲里が述べたこのメタファーに対して特に反論せずむしろその比喩に乗っかり議論を展開しているので，両者ともこの比喩的姿勢を引き受けているものと見なす。）通常のメタファーであれば，鳥の目は目線が高く，地を這う虫の目は庶民の視点とされるはずだ。なぜここにねじれがあるのか。それは端的に言って，その鳥と虫が棲まう世界がねじれているからに他ならない[(11)]。文化と政治が織りなす分厚い壁を一点突破する一撃として，私は（民族誌的）叙述という方法を採っているのだが，そこで形成される特異な「視点」こそが，そのねじれをかろうじて可視化しうる私なりの経世済民のコトバに繋がる。

現実のなかで沖縄を定義する所作において，異化が進んでいるように見えて実際は同化が進んでいると，とある沖縄文学研究者は喝破している。そのような現実のなかに確固たる制度として存在する学問領域におけるある台詞について考察したい。それは「沖縄研究化しようとする沖縄学がある」という，否定的な文脈で用いられる台詞である。ここで私がどうしても共有したい問いは，この「沖縄」というところに，「日本」を代わりに入れてみることができるだろうか，という問いである。おそらくその答えは否である。日本研究というも

のはありだ。日本人以外のあるいは日本の外での日本研究は制度的に可能である。ではなぜ，沖縄研究というコトバだけ否定的に語られたのか。そこに，「沖縄学」という主体の揺れが潜む。日本語という環境のみを条件にした場合，沖縄研究は，沖縄の主体性が剥がれ，あたかも沖縄の自律性を伴った苦悩を消去しているかのような印象を与える。しかし，日本語圏外では，むしろ，そのような日本語の磁場が持つナショナルなものへの批判的視座がより容易に獲得できる。（たとえば人種をめぐる人類学的議論の場において、日本のアカデミズムにおいては何々ロイドというコトバ使いへの批判的視座は，アメリカの社会的背景の説明込みで提示される。）

先の台詞に見られる「沖縄研究」というコトバが指し示す事態への違和感もまた，沖縄学の主体性を救い出すために（そしてそのような行為を学問という制度のなかでなしうる研究者は殆どいない。なぜなら，まず沖縄を扱う研究機関をはじめとする制度的環境が乏しいからであり，沖縄人ではなく日本人で沖縄を研究している人が少ないからであり，そしてそのなかでもこのような批判的視点を持ちうる人はとても少ないからである。）差し出されたものなのであるが，その行為 / 好意を「沖縄人」という視点からさらに見つめ返せば，その姿が沖縄人と日本人の非対称性を前提とした温情主義的姿勢と容易に重なる危険性が見て取れるのである。おそらく今ここで述べている事柄は，ほぼ全ての読み手へ（今はまだ）到達されないコトバとして発せられる。架空の対話者に向け，私の分厚い壁を一点突破するための記述はこのような形を取らざるをえない。

現時点において，文化生態学的視点から見るならば，そしてそのフォーマットで記述することを民族誌的記述と呼ぶならば，ここで読者と共有すべき，そして考察の対象とすべきリアリティは，現在私が使用している言語，この日本語という自明の環境のなかで，沖縄人という主体がどのような形態で出現してくるかという「観察」によって，構成されうるだろう。ここでは，その沖縄人を「観察」するという行為に（これこそがまさにかつて人類館事件当時の人類学という学問が持っていた眼差しでありその本質は今も続いている）倫理的正当性を与える学問的妥当性（academic validity）に与しないという私の立ち位置を明示する

べく（これは日本語＝日本人＝日本文化という三位一体の神話的磁場のなかで確認確定表象されにくいポジションなのであるが，そうであるがゆえに），学問的枠組みで観察するのではなく，あらゆる方法で[12]メタレベルの視点を組み込んだ「現実」を念頭に置きつつ，叙述の展開を試みるほかない。

2．「他者」としての沖縄を描く

かつて沖縄出身の研究者が，学術的な会場の踊り場で「沖縄の人間が沖縄を語らないという権利もあるのに」と絞り出すような声で呟いていた。沖縄人（サバルタン主義者）が沖縄を表象してもしなくてもいずれにせよ非難される。表象すれば，本質化していると言われ，しなければしないで不合理な現実を目の前に沈黙していると言われる。まともな文化研究のアリーナではこういうジレンマが当然発生する。それは，まさに，サバルタン主義者[13]としてのあり方だ。

そもそも「サバルタンは語ることができるか？」とは，脱植民地研究の泰斗スピヴァクの問いだ。彼女は「語れないよ」と言ったのだ。それに対してその学問領域のひとつの到達点は，語るかどうか，いつどう語るかではなく，聞き届けられるかどうか，が問題なのだということだった[14]。つまり，我々がどう聴いているか，という問いに変換されたのだ。そして現状はそのさらに逆なのだ。実際に語るサバルタンの声があまりにも容易に聞き届けられ理解されること，それ自体が問題なのだと。サバルタンが捉えられている対話の弁証法では，彼を抑圧する側が常にすでに対話の言語を一方的に確立させてしまっていて，彼を擁護する活動家や学者や批評家ですら，抑圧者の言葉で語らざるをえず，さらにはサバルタン自身の語りさえも，理解される意味世界のなかで，抑圧する側の覇権によって固められた文脈のなかで，朗々と聞こえてしまうのだ！

ではこの問いは，教室にどのように持ち込まれうるのか。たとえば2016年沖縄島北部の闘争の地において機動隊が現地の人々を「土人」呼ばわりしたでき

ごとがあった。事件化したその発言を中心に，多くの言説が生産され，某ラジオ番組にゲストスピーカーとして出演した私もまた，言葉を紡いだ[15]。ネトウヨがすくい取れずかつ私の声の残滓（ノイズ）が届くよう心懸けた結果，「世界土人会議」なんていうものをやるのもいいですねといった脱構築的発言や，沖縄の人々が常にすでに土人という言葉を南洋諸島で使用していたというポストコロニアルな歴史を持ち出すことで，その塗り固められた意味世界をずらす試みを行った。その結果，私がＭＣとの静かな綱引きをしていたと表現していたリスナーもいれば，「偏った」レッテル張りから逃れた聴き手もいたことが確認できた[16]。当時私が担当する沖縄学関連の講義に参加していた学生諸君にも呼びかけ，聴き手の判断を宙づりにする技術（一時停止）が，やりとりのなかのどこに隠されているか，そのような問いを共有する課題を提出した。その土地の歴史や文化のみならず住む人々の身体性や視野からも学ぶために必要とされる，「他者」としてその土地を描く行為が自明なこととしてルーティン化しないためには，どのような仕掛けが必要なのだろうか。

２－１．「沖縄の歴史を描く」という行為

次は２つ目のテクストについて見ていこう。かつてこどもたちに向けて沖縄を語るという貴重な仕事を担当したことがある。朝日新聞社が出版している雑誌『アエラ』のこども向け（小学校高学年を主な読者として想定）版で『ジュニアエラ』という雑誌の編集部から連絡があり，基地問題についてこども向けに特集記事[17]を作成するのを手伝って欲しいと要請された。当時本土復帰40年の節目ということもあり，思い切って引き受けては見たものの，実際に編集者と記事の構成や内容について話を進めていくうちに，その根本的な困難さに手を焼くことになった。

それは一言で言うならば，研究者や大人が自明としている枠組みを外した場合に，どこまで沖縄を語ることができるのかということだった。資本主義のメカニズムや帝国主義という言葉を用いずに，如何に沖縄の「特異な」状況を語ることができるのか。日本語，日本人，日本国という三位一体の神話（酒井直

樹）の環境の中で，形成される「沖縄」が常に捉え損ねるものについて考えるなか，今使ったこの「特異」という言葉そのものが，何を私は語りたいのかという自らの欲望を照らし返す好機となった。そして，沖縄を語るアリーナにおける重要なポイントとは，「他者」としての沖縄をこどもたちにどう語るかということであった。

本稿では，こどもに語るフォーマットを通して，編集サイドと最後まで討議した領域について具体的に見ていきたい。討議したポイントはたとえば以下の内容だった。

1．世論調査のデータ選択について。よりいい具体的な代替案。2010年５月11日と15日の沖縄タイムスの「県内移設」を巡る沖縄世論の変化についての記事（４月に世論調査実施）の妥当性。また，2002年のこの調査の元データを当たって質問の意図などを再確認したいという歴史学者の意見を参考にした。

2．「県外移設に反対という沖縄の声の多さ」の理由について誌面上でどう機能するか。やや固定化された言い方になるが，いわゆる「革新系」の人々の頭には，「本土に移設したって結局日米安保再強化にしかならないので，県外移設はやはり反対」という「安保反対」堅持という考え方も多くある。つまりはイデオロギー的にはこのように説明できる。また，たとえば，共産党であれば，党利党是として本土の党員も沖縄の党員も，「国内移設反対，国外移設賛成」で統一しているので，一定数そのような声がある，という政治学的な分析が可能だ。しかしそれでは，もうひとつの沖縄の歴史的文脈，生活という体温が浮かび上がってこない。それが次の３つめの点になる。

3．誌面では，「95年以前は」と書かれているが，「90年代後半までは」といったようなややおおまかな表現に替えるべきだという私のコメントについて。理由は，県レベルの意向がどうであったかということを明示する記事が見つかったことと，95年の少女暴行事件をまずい形で象徴化させる恐れがあると

思ったからである。ちなみに，県庁の公式見解は，たとえば「県外移設も選択肢1998年３月31日」という琉球新報の記事で確認できる[18]。

大田知事（当時）について，「県外移設について，これまで大田知事は「自らの痛みをよそに移すことはしたくないというのが県民の大方の意向」と再三強調し，基地の県外移設を国に求めることに否定的な見解を繰り返してきたとある。つまり，少なくとも県レベルでは，98年までは県外移設の意向はなかったと考えられる。この声，現在の沖縄の人々が発しているこの声こそが，基地問題のイメージに潜む，ノイズのような異物なのかもしれない。常に見つめられる側だった者が，こどもが，見つめ返している。その見つめ返される眼差しを，どう受け止めることができるのか。そして，見つめ返しているのは，本当に，こどもなのか。ひょっとして，見つめている者が常にすでに見つめられている者だったとしたら。

４．基地があって「経済的に助かる」という言葉だと，この「助かる」という言葉が含む多義性をうまく伝えられないと悩んだ。基地の近くに住み仕方なく基地に経済的に依存せざるを得ない人の声と，基地から離れたところに住み（那覇や石垣島など）基地があったほうがまあ県の財政が多少は潤うから「助かる」という声が，ここには含まれている。この「助かる」という言葉を別の言葉に変えることについて検討する。マイノリティの声が，このように経済的な指標を含む言葉使いでしか翻訳できないという問題をどう考えるか，ということは，とても重要なポイントである。それは沖縄に限った話ではない。たとえば３．11直後，「美味しんぼ」という漫画をめぐっていわゆる「福島表象の問題」が取りざたされたことがあった[19]。東京を中心とするメディアで語られずしかし福島の人々のあいだで真っ先に語られた事柄のひとつは，補償問題に関する案件だった。政府筋の人々は福島よりの発言をして安心させているように見えて，むしろその逆に補償を打ち切るステージへ進んでいるのではないかという大きな不安を福島の人々に与えていた。

アメリカ軍が日本にいるのはナゼ？　特集

基地問題は日本人みんなの問題だ

沖縄をめぐる歴史の旅はどうだった？　つらい過去を知って、ウチアタイ（沖縄の言葉で心の打撃という意味）を負ってしまったかもしれないね。でも、それによってキミの何かが変わるかもしれない！

今、沖縄はどうなっているの？

現在、注目されているのは、普天間基地の移設問題。アメリカ兵による少女暴行事件をきっかけに広がった県民の怒りが、日米両政府に普天間基地の全面返還を約束させた。県内への移設が条件だったが、県民の約7割がこれに反対している。「日本の安全のためにアメリカ軍の基地が必要なら、ほかの都道府県も同じように負担するべきだ」と主張しているんだ。以前は県外の人に遠慮があって、公の場では言わなかった言葉だ。

普天間基地の移設問題

自民党政権時代の日本とアメリカ（米）との話し合いで1996年に返還が決まったが、県内の移設が条件だった。

2006年に名護市辺野古の沿岸部を埋め立てて移すと決まったが、地元では反対運動が続いている。「県外か国外に移すべきだ」と主張してきた民主党が09年に政権を握ったが、米政府との交渉に失敗、進展していない。

アメリカ軍の基地「キャンプ・シュワブ」がある辺野古沿岸部。絶滅危惧種のジュゴンがすむ

沖縄の人たちは1995年まで公式の場で「県外にも基地を負担してほしい」と言ったことがありません。それは「自分たちが基地で苦しんでいるのに、同じような苦しみを塩やすことはできない」という思いがあったからといわれています。

もし、日本が47人のクラスだったら？

「基地問題は、日本人みんなの問題」と言われてもピンとこないかもしれない。日本を47人のクラスにたとえてみよう。

クラスは各都道府県から一人ずつ選ばれた生徒で構成され、「青森君」や「福島さん」などがいる。キミもその一人だ。

さて、沖縄君はこれまでクラスのみんなの約4分の3にあたる34個のランドセルを一人ですっと背負わされてきた。「もう限界。もう背負いたくない」と言っているのに、いじめっ子は「これまでそれで小遣いをもらって、おいしいものを食べてきたじゃない。もっと背負えよ」と意地悪を言う。まわりのみんなは目を合わせないようにして黙ったまま……。

これって、いじめだよね？　基地問題はまさにそれだ。見て見ぬふりをしていて、いいのかな？

前の沖縄県知事・大田昌秀さんは1998年に「沖縄の人も同じ人間です。他人の犠牲になるのは、人間的な生き方ではないと思うのです」という演説で、全国に基地の負担を呼びかけました。

ボクにも関係があるってこと？

写真　雑誌『ジュニアエラ』沖縄問題特集記事ゲラ

5．沖縄は日本にとって歴史の「他者」だから助けるべきなのか，国民という「同胞」だから助けるべきなのか。教育と研究の齟齬が見つかる領域で，私達はどのようなまなざしを獲得できるのか。

ここでは，最後まで編集部と揉め共に悩んだ5の問いを取り上げてみたい。この問いについて簡潔に言い換えるならば，米軍基地が不平等に負担されている沖縄の状況をこどもたちに平易な言葉で語る際に，沖縄を日本の他者として扱うのか，それとも同胞として扱うのか，ということになる。どのような経緯で沖縄が米軍基地問題を抱えるようになったか，その歴史を紐解く際に，どうしても，沖縄の歴史と日本の歴史が異なるということに触れざるを得ない。友軍にスパイ扱いされて殺された沖縄の戦場の記憶や方言札といったざらざらした歴史の手触りを体感するプロセスが必要となる。

もしそのとき，沖縄が日本と異なるということを紙面で強調すると，それを読んだこどもたちが，「沖縄は日本じゃないんだ，だったら助ける必要なんかないじゃん」と思ってしまい基地問題に関心を持たなくなる危険性がある。かといって，沖縄の特異性を骨抜きにして沖縄問題を語ることは不可能だ。あくまでも学術的な正確さにこだわり紙面を作って，次の世代の日本人が自分たちの問題として基地問題を学習する機会を逃すのか，沖縄の他者性についてはある程度妥協した紹介を心がけ，日本の問題として基地問題をしっかり理解してもらうか。

結局私は後者の語りを選択した。47人のクラスのほかの子たちにいじめられている沖縄君というキャラを設定し，いじめに無関心なことがいかに問題なのかを訴えるという見立てを構築した。「沖縄目線の日本史」という絶妙なフレーズを考案した編集者に感謝しつつも，研究者目線からは国民意識を強化する反動的なテクストを作成してしまったという，後悔の念も抱いたということもここで正直に告白しておく。

なぜなら，本来倫理とは共同体の成員ではない者にこそ向けられるものだからだ。しかし，教育的効果という名の「戦略」を優先させたイメージをこのと

きは選んだ。この苦渋の選択を，調和のとれた誰もが納得安心するイメージではなく，個としての非常に微細な，一般化が難しい，めんどうな苦悩を，ノイズとして，うまいことときれいにまとめることのできない喉に引っかかった魚の小骨のようなものとして，あらためてここに差し挟んでおきたい[20]。

２－２．「民族主義」や「独立」が示す「フェアプレイ」

ここで「同胞ではない」という文言に，「独立」という政治的な言葉が呼び込まれる予感を持つ者もいるだろう。あるいは「民族主義」という言葉も然り。前者の「独立」に対しては，基地問題から見れば沖縄に依存しているのはむしろ日本本土の側であり，沖縄は独立するべきだ，ではなく，日本は自立するべきだ，となるのが筋だろう。この点については後述するとして，まず後者の「民族主義」について，ファノンは３つの民族主義について述べている[21]。まず，かつての植民者であり主権を越えた統治を行う者が主張する民族主義。次にその「独立を与える」とする統治権力に対応し交渉する側の，つまりエリートや民族主義政党が主張する民族主義。実はこれら１つ目と２つ目の民族主義は，対立しているように見えるが，同じ「交渉」という政治的空間を共有しようとしている点で，同じ土台に立っていると言うことがわかる。そして最後が，両者が構成するところの政治的空間を脅かす潜在力を持った，第三の民族主義である。

この三つ目の民族主義を，ファノンはルンペンプロレタリアートの民族主義と呼んだ。たとえば冨山一郎は，この３つめの民族主義に着目し，そこに根源的敵対性（radical antagonism）の確保があるということの重要性を強く指摘している。根源的敵対性とは，自明とされている政治的空間を根底から覆すような否定性のことであり，対立する力を定義する構造自体に対する否定性とは，対立する力を力として成立せしめている問われることのない土台自体を融解させ，その土台の上にある既存の対立が別物になるような契機を狙い撃ちしている力のことだ。その力を消費者のお茶の間にたとえていうならば，こういうことになるかもしれない。コカコーラとペプシの比較広告が大量に垂れ流され，

われわれ消費者は，どちらの広告がより過激でライバル社の商品よりも勝っているか，その戦いを楽しみ，また享楽的にいずれかを選択し消費する。しかし，たとえばインドに住まう貧しい農家の人々がコーラを農薬代わりに密かに使用しているという衝撃的なニュースを見ることで，問われることなかったそのペプシとコカコーラという二項対立を支える構造が解けてしまう危険が生じる。（主に米国で使用されている）比較広告は資本主義の典型的な文法だ。コカコーラとペプシの二項対立を共犯関係とみることで，そこに透明無色な「政治」の発動を発見する。そこに真の敵対性はない。交換価値はそのままに，使用価値をラディカルに変更することで（つまりコーラの成分を有機的に環境適応させることで！），市場世界そのものにダメージを与えることになる。このアクロバティックな転覆可能性が，敵対性という概念の可能性なのである。そして，ポストコロニアルとは，学術的なターミノロジーを散りばめた悟性的な解説ではなく，その否定性が動かす現実の展開，現勢化の力，そしてその現勢化を阻止しようとする囲い込みという別の現勢化，これらをとりまく暴力的なものを指し示す物言いなのだ。そのような「暴力」の在処をこどもに語ることの意味は何なのだろうか。その問いへの暫定的な答えが「フェアプレイ」を学ぶこととなる[22]。

ただし留保すべき点は，この系譜は，一方で，それではまるで，African American Studies を含む米国の Ethnic Studies のフォーマットのなかに，沖縄学もしくは沖縄研究を安易に落とし込むというプログラムにそのまま重なってしまう危険性がある。ここで述べることができることは，全ての研究者がそれぞれのidentity politicsを発動させつつ，隣接領域との緊張関係のなかに（たとえば米国の Area Studies（地域研究）と日本の歴史学の布置＝共犯関係のなかに「齟齬」を発見するとか）学問体系の転覆可能性を常に含みながら，研究・教育行為を重ねるしかない，ということだ。ここで述べられていることは，沖縄の「学知」をめぐる制度的あるいは共同体的場面の一コマとして，よく見られる光景についての人類学的知識の援用だ。そこには沖縄からの物言い（植民地主義的抵抗言説）に対して，ヤマトの良心的な知識人や政治家たちが取る行動を，「全

体の一部ではない部分」を「全体の一部」として抑圧する行為として見るというやっかいな作業も含まれる。

さて，フェアプレイとは，先に述べた，否定性の概念の一側面が，スポーツという文脈で具現化したものとして見ることができる。「一側面」というのは，つまり，フェアプレイという行為は，敵と味方の区別を無効にするものの，ルールやゲーム自体を，つまりフェアプレイが成立する条件を瓦解させる暴力までは持つことがないからである。そして，根源的敵対性の彼岸にあると思われる友愛や歓待の思想と手を取る所作になりうるからである。フェアプレイとは，現実にはありえないが可能であるべきだとする（法そのものが従うべき）規範つまりすべての行為の格律が，たった一人の行為によって示されるとき出現する[23]。

私にとって続けるべき作業，つまりプレイは，様々な場所でこのストーリーを語るということだ。そして，私にとって事後的に「フェアプレイ」と認められる行為は，おそらくこのストーリーを我々が共有する際に抱える困難や不安を，こどもや若者達に語るために語った内容と，そうなった経緯という新たな語りとともに，大人達にも伝える中に現れるだろうと想像する。もちろん，いま読者と共有しているこの場もまた，そのひとつになっている。

さらに先程保留しておいた「沖縄は独立するべきだ，ではなく，日本は自立するべきだ」という点についてみていこう。この文脈では，日本を沖縄に甘えている「こども」に見立てている。ここに人類学者グレゴリー・ベイトソンの「ごっこ」という「遊びと空想の理論」（精神の生態学）が補助線として機能してくる可能性もある。こどもは「ごっこ」遊びをするなかで，本格的な殺し合いに至らない形で共同作業として遊びというメタレベルのコミュニケーションを反復して成長していく。対立的な状況から実存協同に至るまでのプロセスが，こどもを大人にするのであれば，沖縄の否定性が，ややもすると，日本が立派な成熟した近代国家という「おとな」へ成長することに一役買うことになる。さて，これは果たして，否定性の生産的使用なのか，飼い慣らされた学問のなれの果てなのか，もしくは，新たな沖縄研究の嚆矢となるのか。基地応分負担

を求める声が沖縄からより一層の強度を持って聞こえてくる今，魯迅の顰み（革命の徹底性）にならうなら，はたして「フェアプレイはまだ早い」のか[24]。

おわりに

朝になると平地や山に等しく陽光が差す様に，社会生活のリズムはシステムによって差配されている。具体的で身近な生活空間は，それを密かに構成する国民国家や資本主義といった抽象的なものと切っても切れない関係にある。見えづらいその癒着を，学問の触手は「観察」や「想像」のレンズを通してつぶさになぞることができる。

しかし鎮魂の，怒号の，チルダイの，カリィの，その全てを探り当てられるわけではない。なぜなら触手そのものは「触られる」気持ちを理解する器官ではないからだ。たとえば祝日とは国土を再確定する特異な「時間」の反復であり，旅行とは日常の「普通」を正当化する「空間」の移動である。慰霊の日や沖縄観光は，こうして私達の「沖縄」を再生産し続ける。しかしいつの「沖縄」とて，昨日の「沖縄」でも明日の「沖縄」でもない。そこに全ての可能性はある。

夜になると沖縄の空には東京という星が，東京の空には沖縄という星が見える。首都圏の若者たちが未来の夜空に見つける沖縄星を描くような講義を，首都圏のキャンパスで心がけてきた。微かな光源を探すためにこしらえた暗闇に，啓蒙の光を照らすことはない。届かぬものに触れることがあり得るようなリアルな天体を，当事者性の有無を強く意識する学生たちと共に仰ぐ。

そんな満天の教室でごくまれに，夜から朝への静寂につくられる何かを手にすることがある。ある年の慰霊の日直前の，基地の歴史と記憶を扱う講義の際，３年連続で講義に顔を出している学生から耳打ちされた。「先生こんなことを云っては失礼ですが，先日の沖縄での米兵による女性暴行死体遺棄事件の流れでこのテーマを扱っていると感じている学生たちにとって，このトピックは重くてしんどいと思います。万一来週から彼らが来なくなってしまっては本当に

もったいないと思うので，毎年この時期にこのテーマを扱っていると仰ったほうがいいのでは。」基地問題もまた自分自身への問いとして目の前の若者に考えて貰うよう工夫を凝らしてきた私にとって，その学生目線の「親身な」アドバイスは，頓珍漢だと一蹴できない一撃だ。控えめな彼が講義の最中私に直接話しかけてきたのは初めてだった。その純粋な「優しさ」が，逆に当事者の怒りに向き合おうとしないご都合主義の都会のゆるさに見えてしまう。しかし絶句によって生じたスペースに新たな考えが浮かぶ。その「ゆるさ」を想像力の可動領域に組み込めないだろうか。たとえばバスティーユ広場の喧噪を民主主義の揺籃に位置づけるが如く，運動家瀬長亀二郎の果たした「役割」や当山栄の「身振り」に沖縄の新たな民衆史を発露させる，そのどこへでも飛んでゆける想像力の翼という軽やかさこそが，いつか別の場所でリベラルで切実な卵を産み落としてくれるのだ[25]。

一方，同じ講義で新しい言葉を伝えてくれた学生もいる。沖縄の基地問題を扱う講義に初めて触れた彼は，「社会情熱」（Social Passion）とでも呼ぶべき何かが沖縄にあると感じたという。受難（Passion）によってのみたどり着く知性があるとすれば，それこそは沖縄の「資源」となろう。たとえばそれは60年代ドル経済に組み込まれていったバブルな沖縄市場を，基地経済ではなく世界金融経済の枠組みで捉える冷静な視点に繋がるだろう。植民地下で独立運動の気運を醸造させていった世界文学のテクスト群を傍らに呼び寄せる感性に重なるだろう[26]。それは想像力の翼とは異なる。島々に拡がる無数の切り株は土深く情けの根を張り巡らせる。あらゆる環境を養分として吸収し，その地の根はやがて海を越え山を越え世界の隅々にこびり付く他者の根と出会う。ゆるやかで強かな繋がり。沖縄の歴史を覗く際にどうしても掛けてしまう「同化と異化」の眼鏡を一端外してみよう。自らがどう変わりたいのか。どこまでも続く地の根を裸眼で手繰り寄せる一心不乱な知的好奇心と持続が，初めて沖縄を知った都会の若者が放った「社会情熱」という耳慣れない言葉に血を通わせることになるだろう。

先述したように，批評家は沖縄に留まり続ける自らの眼差しを「虫の目」と

名付け，それと異なる目線―日本のなかの一地域として沖縄を捉える，より俯瞰的な視点―を持つ歴史家の文体を「鳥の目」と称した。私はここで，その「鳥に喰われる虫」というもう一つの比喩的位相を加えたい。虫を啄み糞を垂れる鳥は，別の場所で新たに生まれる命を運ぶ。つまりその虫は鳥を利用して時間と空間を移動する新たな虫（視点）となる。ここに「喰われる」という実存的な苦みを伴う認識の力と移動への希求があり，「喰われてやる」というまだ見ぬ地と主体の到来を待つ翼を持たぬ者たちの想像する智恵がある。右翼左翼が争えば飛び立てぬ鳥と，固有の王国にかしづく虫は，お互いの不自由さを較べ合うのではなく，互いに繋がり合うべきなのだ。

教室は砂漠にもなれば雨林にもなる。砂漠の天上に輝く星を数える若者たちは，あるべき社会という地図を持つ。雨林の枝葉も自由だ。無数の鳥が巣立ち色とりどりの実や虫を啄み梢を跨ぎ糞を落とす。小さな命がそこかしこに息吹く。ひるぎに寄せる波の調べや珊瑚の重ねる時間に愛想を尽かされぬよう無数の小さな「文化の語り」に耳を傾け，私達も豊かな時間を持つべきだ。そして待つべきだ。

こどもたちに語る沖縄を通して私が学びつつあること。それは，沖縄を語るとき常につきまとう「他者」という言説（の罠）と付き合う鍵は，トリッキーなプレイ（認識論）でもチームワーク（運動論）でもファインプレイ（英雄待望論）でもなく，フェアプレイ（各自が担う倫理的態度）だということ。フェアプレイの精神を抱きつつ，待つのだ。

（1）本稿は日本平和学会における平和教育分科会（2018年6月24日，東京大学）にて発表した内容を大幅に加筆修正したものである。当日会場に居合わせた「おとな」たちから多くのものを受け取った。また本稿は，こどもたちのためにわかりやすく書かれたものではなく，次世代へ，未来への倫理的責任を考えるという文脈で読まれるべきものである。

（2）MAVOというダダイズムなどの芸術思潮を日本に紹介したグループのリーダーで，戸坂潤らと交流のあった優れた言論人。若き山里永吉（沖縄で最初に洋式結婚した人物として，また沖縄独立派の理論的支柱の一人として知られ，琉球政府立博物館館長などを歴任）が日本美術学校在校中ともに活動していた。ちなみに山里の書い

た沖縄芝居の台本「那覇四街昔気質」で，「命どぅ宝」という言葉は初めて用いられたと2000年にクリントン元米国大統領が来沖した際に，大城立裕氏が紙面（琉球新報2000年７月23日）で開陳していたが，実は復帰10年目に社会的に定着した言葉だったということを，歴史家屋嘉比収氏は明らかにした（『沖縄戦 米軍占領史を学び直す 記憶をいかに継承するか』，2009年，世織書房，196－210頁）。沖縄の反戦平和のキーワードとなったこの言葉は，尚泰王が言ったという史実ではなく，沖縄芝居のなかの台本でもなく，伊良波伊吉というシバイシー（芝居人）が舞台上で初めて言ったのではないかという証明不可能な解釈は，つまりある想像力が現実の政治の力の糧になっていた可能性があるという事実は，「真の情熱」をもたらす。

（３）その「感情」は日常と知性で構成される。「日常」という言葉が示すものは本人にとってあまりにも普通で，それがあるということすら気がつかない。特別なものなど何もないという特別さ。その「特別さ」を支える優しさと悲しさの両方に気付くとき，人は特別な知性を持ち，そして社会の仕組みを変えていく。

（４）「文化の遠近法」については，以下の拙稿を参照。「Teaching Culture 教室の窓から覗く沖縄」，『沖縄学入門 空腹の作法』（勝方＝稲福恵子共編著），2010年，昭和堂。

（５）仲里効・高良倉吉（読売新聞西部本社文化部編），『「沖縄問題」とは何か』，2007年，弦書房。

（６）通常以下のようにメディアでは分節化されている一連の「議論」であり，その総括は未だなされていないが，沖縄では一つの「事件」として語られることが多い。「2000年に高良（倉吉）氏ら大学教授３人が公表した提言。米軍基地は歴史や基地被害，平和の理念といった点だけから論じられるべきではないと沖縄のタブーに踏み込み，日米安全保障における基地の存在意義を容認。問題は負担の過剰さであり，「存在することの是非を問う問題」ではないと，沖縄側の意識改革を求めた。沖縄の言論界からは「権力への奉仕者」「現状追認論者」と批判された。」（朝日新聞 2013年４月26日朝刊 オピニオン１より）

（７）後述するように，私はここで，虫の目にもう一つの比喩的な位相を加えておきたい。それは，鳥に喰われる虫というものだ。虫にとって鳥は手も足も出ない天敵に過ぎないかも知れない。しかしその虫を啄み別の場所で垂れる鳥の糞には，その虫の卵が宿る。次の虫は別の場所で新たに生まれる。それは時間と空間を移動する虫（視点）になり得る。

（８）本書において仲里の「アジア」もまたある種の記号として作用しているが，仲里自身は後に台湾や中国との関わりのなかで，交渉の蓄積の場としてアジアを具体的に位置づけることになる。

（９）「文化の語り」における演劇性については，以下の拙稿を参照。「文化を漕ぐ，言葉を焼べる　沖縄の近代性と共同性に関する民族誌的断章」，『琉球・沖縄研究』第２号（早稲田大学琉球・沖縄研究所），2008年，113－145頁。本稿で扱う高良と仲里のやりとりは，この論考で扱われるハーリーという沖縄の伝統儀礼＝レースの一コマにたち現れる演劇性に重ねられることでより理解しやすくなるだろう。

(10) そしてここでもまた，新たな虫のメタファーが召喚される。哲学者ジル・ドゥルーズがかつて用いたユクスキュルのあの「虫」である。この感性を記述することが，「分厚い記述」（thick description）になるのではなく，文化と政治が絡み合い成立するあの分厚い「壁」に対して一点突破を図る強度を持ちうる記述となる。

(11) このねじれた世界における言語と主体の関係性について，かつて「リアリティ・ショウ」という枠組みで提示した。そこでは，日本語という環境に出現する沖縄人という生態学的視点を共有すべく，描写＝記述をベタに行うのではなく，学問的妥当性を常に疑う批判的視点を持ちつつ行う。「The Okinawan Reality Show: 揺れる「沖縄人」，掠れる「沖縄口」」，2011年，人類学研究交流会第９回交流会，文理融合ワークショップ「沖縄人の表象をめぐって」。

(12) その方法のひとつが，先述したリアリティ・ショウという枠組である。そこでは「参加者」全員が，露悪趣味的世界のなかにもかろうじて映し出されるわずかな人間の主体性を発見するということと，マイノリティであるかマジョリティであるかを問わず共有する抑圧の存在をユーモアを通して確認すること，この２つが達成されることを目標とされた。そこにユーモアが訪れない場合は，当然最悪の結果を招くことになる。

(13) サバルタンとは，経済における権利剥奪，政治における抑圧，言説における沈黙，文化における否定，などを指すシニフィアン。

(14) 以下特に第４章「主体の創造的な危機」を参照。ハミッド・ダバシ（早尾貴紀ほか訳），『ポスト・オリエンタリズム テロの時代における知と権力』，作品社。

(15) TBS ラジオ荻上チキ Session-22「文化人類学者・前嵩西一馬さんと考える沖縄と差別」，2016年10月24日。

(16) たとえば以下のような，リスナーによるツイッター上のやりとりが確認できる。
酋長仮免厨 @kazoooya　2016年10月24日　その他　返信先 : @kazoooya さん
酋長仮免厨さんが酋長仮免厨をリツイートしました
ちと聴いてみたけど，前嵩西一馬さんは「偏ってる」とはちと違うね。
https://twitter.com/kazoooya/status/790553093725224960 …「差別，差別」と言う言葉が続いているけど，昔は，沖縄県民は本土から差別があっただろうけど，沖縄本土住民は沖縄先島住民を「差別」していたのも事実なんじゃないの？
酋長仮免厨さんが追加
https://twitter.com/kazoooya/status/790553093725224960
酋長仮免厨 @kazoooya　返信先 : @kazoooya さん
まぁ，だいぶ偏ってそうなメンバーの番組だね…（´・_・`）（TBS ラジオ「荻上チキ・Session-22」）：http://www.tbsradio.jp/85558 【スタジオゲスト】…

(17)「特集 沖縄復帰40年 アメリカ軍が日本にいるのはなぜ」『月刊ジュニアエラ』，朝日新聞出版社，14－23頁。

(18) http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-92793-storytopic-86.html

(19)『週刊ビックコミックスピリッツ』５月12・19日合併号（2014年４月28日，小学館）

に掲載された漫画『美味しんぼ』において，主人公が福島第一原子力発電所を訪れたあと鼻血を出し，地元の行政関係者が「福島では同じ症状の人が大勢いる」と語る場面を皮切りに，その後「今の福島に住んではいけない」といった発言が作品内で紹介された。これに対して風評被害を助長しているという批判がネットを中心に巻き起こりメディアが事件として取り上げる一方で，その作品の内容に対して福島県や閣僚から批判が続出した。

(20) ランドセルを背負わせるために転入させたのではないかという恐るべき想像力については，後述する「否定性」をめぐる問いと合わせて，稿を改めることとする。

(21) フランツ・ファノン（鈴木道彦・浦野衣子訳），『地に呪われたる者』，1996年，みすず書房。

(22) この議論は人類学や哲学の内部でも「全体の一部ではない部分」をめぐる問いとしてすでに行われてきたが，本稿では割愛する。たとえば，人類学で双分制という概念がある。これはいわゆる二項対立とは異なり，その世界，制度そのものを否定する「政治」の可能性を持つとされる。（クロード・レヴィ＝ストロース『構造人類学』（みすず書房，1972年），「第八章 双分組織は実在するか」，ピエール・クラストル『国家に抗する社会』，Ｇ．ドゥルーズとF.ガタリ『千のプラトー』（河出書房新社，1994年）「第十二章 一二二七年―遊牧論あるいは戦争機械」などを参照。なお「双分制」についての議論は冨山一郎氏（同志社大学）から頂いた私信に多くを学んだ。

(23) 芸術家岡崎乾二郎との対話から多くを学んだ。

(24) 暴力＝否定性＝独立ではなく，あくまでも，フェアプレイ＝言説でいくというマニフェストではない。八百長がルールの外に飛び出るということであるように，フェアプレイもまたルールそのもの成立させる条件をあらためて問う行為だとすれば，言葉の最大の機能である否定性を支持するというごく当たり前の表明に過ぎない。そして否定性をめぐっては，とりいそぎ次の問いを提出しておく。

> 「国家は種の直接なる統制を，個の自由なる分立との対立の綜合的統一において具体化し，かえって個を生かし容す（ゆるす）ことに由って種を豊富にし，活潑にして，調和和平を内にもたらすと共に，絶対否定の類における種相互の平和を外に向って立しなければならぬ。その対立的なる契機の故に，それの総合は常に動的にして危きに臨むことを免れないが，しかも内外の調和和平を理念とし，危きに遊んで安きことをその本質とするのでなければならぬ。しからざる国家は歴史の審判に堪えない。（田辺元，「種の論理」論文集Ｉ，社会存在の論理，『田邊元全集』第６巻，1963年。）

上記の田辺元のテクストに，否定性を経由して日本人性を獲得すべきという「普遍」的回路があるとするならば，沖縄の独立と基地応分負担論とが叫ばれる今の時代に，「沖縄人ではない」という言説における回路が持ちうる普遍的な意味は，その田辺のテクストを迂回してはじめて日本語の世界に翻訳されうるものではないか。なお，「沖縄人ではない」という言説をめぐる民族誌的考察は，以下の拙稿を参照。「沖縄で探す「鞘」の言葉 ―「高度必需品」としての蝶柄，笑い，生物群」，『思想』

第9号，岩波書店，2010年，96－113頁。

(25) 以下を参照。森宣雄，『沖縄戦後民衆史 ガマから辺野古まで』，2016年，岩波書店。

(26) カリブ海のフランス海外県出身の文学者エメ・セゼールの植民地主義論を読み返していた時のこと，彼の父親フェルディナンは毎朝出勤前にこどもたちにユーゴーやヴォルテールを読み聞かせていたと書いてあることに気がついた。以前読んだときにはまったくひっかかってこなかった箇所だった。もちろんフェルディナンのこどもたちにとってそれは，宗主国の言葉の習得以上でも以下でもなく，しかしそれと同時に，豊かな世界の広がりに身を置く人間的経験となっただろう。実はその当時，毎朝息子に数分本を読んで聴かせていたので，エメ・セゼールが過ごした朝にすこし驚き，考えさせられた。「一房の葡萄」が収められた本（有島武郎がこどもたちのために書いた唯一の童話集で生前出版した唯一の単行本）を読み聴かせながら，私自身沖縄の学習塾に通っていた頃，本土出身の国語担当講師に，沖縄のこどもたちは国語のテストではハンデがあるといつも言われていたことを思い出した。親戚のおじやおばたちはいまでも言う。「あんたは本当に日本語がじょうずだねえ」と。人類学や沖縄研究を単なる制度や領域としてではなく，「経験」としてこの身で捉え返す機会がこのような日常の懐に潜んでいたことに戸惑いつつも，こうして繰り返し日本語テクストの余白を通して，つまりこの場で読み手と「私」の「感情」の共有を試みることは，ひとつの民族誌的実践にほかならない。

『桜文論叢』執筆要領

平成１６年２月１０日大宮校舎委員会決定
平成１７年９月２９日桜文論叢編集委員会改正
平成１７年９月２９日施行
平成１９年７月　５日改正
平成１９年７月　５日施行
平成２２年７月　１日改正
平成２２年７月　１日施行
平成２５年５月３０日改正
平成２５年５月３０日施行

1　原稿は未発表の完全原稿とし，提出締切日を厳守する。他誌に投稿中でないものに限る。また，審査の迅速化のため，原稿の要旨を添付する。翻訳原稿については，必ず原著者又は原出版社の許可を得てから提出することとし，許可の確認ができる文書等も添付する。

2　文章は原則として常用漢字，現代仮名遣いを用いる。学術上必要な場合は，その限りではない。

3　原稿は，原則として，Microsoft Word で作成し，フォントは和文では「MS 明朝」，欧文では「Times New Roman」を使用し，いずれも下部にページ番号を付すこととする。注は，原則として，「挿入」メニューの文末脚注機能を使用せず，すべて尾注とする。

4　原稿の提出は原則として，電子メールの添付ファイルで研究事務課（kenjimu.law@nihon-u.ac.jp 宛）へ送付するとともに，印刷した原稿２部を同課へ提出する。

5　原稿の長さは，表題，氏名，本文，注，引用文献を含めた上で，和文の場合 20,000 字以内，欧文の場合 10,000 語以内とする（和文は「ツール」メニューの「文字カウント」で「スペースを含めない文字数」，欧文は「単語数」でカウントする）。なお，多少の超過はやむを得ないものとする。表題と氏名は，和文表記及び欧文表記を併記する。

6　要旨は和文 600～1,000 字程度，欧文 300～500 語程度とし，Ａ４版１枚に収めるものとする。

7　校正については，初校の際の加筆，訂正はやむを得ない場合に限るものとし，再校以後の加筆，訂正は避ける。

執筆者による校正は再校までとし，初校，再校ともに入手後１週間程度で返却する。再校返却の際は，タイトル頁に「校了（または責了）」と明記する。

8　文献の引用について

①　横書きの場合，本文の当該箇所の右上（行間）に括弧つきの算用数字で注記番号を付し，各章等の後に引用文献等を表示する。縦書きも同様とする。

②　表示については，著書の場合，著者名，書名『　』，発行年，頁等を示し，論文の場合は，執筆者名，論文名「　」，掲載誌名，巻・号，発行年，頁等を示すことを原則とする。

以　上

執筆者紹介（掲載順）

江島泰子　日本大学教授
佐藤健児　日本大学助教
ジョー　ジェルソ　日本大学助教
前嵩西　一馬　日本大学助教

機関誌編集委員会

委員長　大岡　聡
副委員長　賀来健輔
副委員長　南　健悟
委員　大久保拓也
委員　加藤雅之
委員　黒滝真理子
委員　髙畑英一郎
委員　友岡史仁
委員　松島雪江
委員　横溝えりか
委員　渡辺徳夫
委員　石川徳幸
委員　石橋正孝
委員　岩井義和
委員　大熊圭子
委員　加藤暁子
委員　杉本竜也
委員　中静未知
委員　野村和彦
委員　宮澤隆義
委員　佐藤義典
委員　前田　実

桜文論叢　第102巻（非売品）

令和２年10月30日発行

発行者　小田　司

発行所　日本大学法学部
機関誌編集委員会
東京都千代田区神田三崎町2-3-1
電話　03（5275）8510番

印刷所　株式会社メディオ
東京都千代田区神田猿楽町2-1-14 A&Xビル

ISSN 0288-1411

ŌMON RONSŌ

Vol. 102, October 2020

CONTENTS

— ARTICLES —

ESHIMA Yasuko, Vigny, poète engagé ? — son approche du saint-simonisme considéré comme “religion laïcisée” — 1

SATO Kenji, The semantics of *Be About To* in present-day English 33

JOE GELUSO, Semantic and textual characteristics of the colligational framework *the N1 of the N2* in argumentative essays by L1 speakers of English and Japanese 57

MAETAKENISHI Kazuma, A Trap called *Others*: Okinawan Studies for Children 95